Sweet hug

響かほり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｗｅｅｔ　ｈｕｇ

【Ｎコード】
Ｎ８８３３Ｖ

【作者名】
響かほり

【あらすじ】
恋多き美形年下俳優と噂される彼と恋愛奥手な年上看護師彼女の恋愛風景。彼らを温かく見守るドＳ医者夫婦に遊ばれて、なかなか会えない二人は今日も内緒の恋に翻弄される。
こちらは、他サイトで連載している自小説を改稿・転載しています。短編小説を連結して長編小説形式に連載しているため、話の時系列が前後している場合があります。

貴方の胸で眠りたい（前篇）（前書き）

短編小説を連結して長編小説式に掲載しています。このため、お話が増えると時系列が前後する場合がありますので、ご注意ください。
また、三人称と一人称のお話があります。

貴方の胸で眠りたい（前篇）

眠れない夜がある。
それは決まって同じ時。
紫苑（しおん）が隣で眠る、宵の深まりの中。
彼はいつも私を抱擁したまま、眠りこけていく。
逃げられないように、私をつかまえたまま。
最近は、朝までその手が緩むことはない。

「離してっ」

何度も何度も同じ手を食らうものかと、うとうとし始めた男の頬を軽くつねる。

「顔は駄目だよ。一応、商売道具だから…」

眠りの邪魔をする私の手を掴んだ紫苑は、重たげに瞼を片方だけ開く。
灰青色の瞳が、眠りを邪魔されて恨めしそうに私を見る。

「吉良（きら）ぁ、俺…あと三時間したら、仕事なんだけど？」
「私だって仕事なの。ほら、くっつくと寝れないから離れてよ」
「俺はこうしないと眠れないんだけど？」
「もう、毎回毎回、人を抱き枕代わりにするんじゃないの！抱き枕、買ったんでしょ？」
「いいじゃん…たまにしか会えないし…」

相手を押し退けようと、めいっぱい抵抗するけど、紫苑は微動だにしない。
規格外の均整な骨格をした長身男は、細身なのに力だけはやたらに強い。
その上、甘い顔貌のこの男は、子供みたいなことばかり言う。

「俺は枕より、吉良が良いんだけど」
「苦しくて寝れないのっ」
「吉良は俺に会いたくなかったの?俺は毎日、会いたいの我慢してるのに…俺が他の女と浮気してもいいの?」
「…しゃ、シャレにならない脅し…しないでよ」

私は思わずうろたえる。
惜しげもなく、率直なことを言える相手の言葉に、私はどれだけ経っても打ちのめされる。
紫苑にしてみれば、夜を共に過ごす女の子を探すのは容易なこと。
一晩だけの逢瀬でも、彼とのそれを望む女の子が数多にいることも理解しているつもり。
テレビの中の彼は、クールでスタイリッシュなイケメン俳優。
紫苑は本名。
芸名は上坂伊織(かみさかいおり)。
十代、二十代女性が彼氏にしたい男性?1に、二年連続で輝く男。
彼の周囲には、常に可愛いタレントさんや美人な女優さんがたくさんいる。
何も好き好んで、色気もない、可愛げもない、おまけに年上の私を選ばなくても…と、ときどき思う。

「嘘だよ。他の女だとガッつかれて、精気吸い取られるからしないよ……吉良がその気になってくれるのは、大歓迎だけど…どう?」

耳朶元で甘く囁かれ、ゾクリとする。
恐る恐る相手を見れば、多くの女性の心をつかむ、挑発的な男の微笑みがある。
ＴＶドラマで見る、甘美な彼のイメージそのままに。

「夜中に耳元で、エロい顔して、エロい声でエロ話するなぁ！子供ができる！」

吼えた私の口を、紫苑の掌が優しく塞ぐ。

「喋ってできるって…俺、どれだけ繁殖力旺盛なわけ？…まぁ、そんな事が言えちゃう吉良が、すごく好きなんだけど…」

好きだと紫苑が口にする時、彼は何かしらの不安を抱えているのだと、最近、わかり始めてきた。

「…俺、吉良のこと、眠る為だけに傍にいてほしいなんて思ってないから…」

少し前の紫苑は、極度の不眠症だった。
私が勤めるクリニックに、彼がこっそり時間外で治療に来ていたのが、そもそもの出会い。
クリニックの院長と紫苑は、年の離れた従兄弟で、院長が融通をきかせていた。
芸能界に疎かった私は、院長からの“破格の高額時間外手当”という餌につられ、彼の診察時間帯に合わせて超過勤務をしていた。
出会った当初の紫苑は、本当に疲れきっていて、いまにも倒れて死にそうな顔をしていた。
と、言うか倒れた。
出会ったその日、その瞬間に。

意識を失い、思いっきり顔面から倒れかけた彼の下敷きにされた。
…思い出すと最悪な出会いだったけど、それは、紫苑の身体は限界に近い状態だったということ。
薬でも睡眠をコントロールできない彼は、診察に来ると何時も疲れきった顔をしていた。
食事も満足に食べていない様子で、毎回、点滴治療も受けていた。
あまりにその姿が痛々しくて、私は気休めのつもりで、自分が使っていたラベンダーとクラリセージを調合したルームフレグランスを、彼にあげた。
それがいたく気に入ったのか、多少眠れるようになった為か、猛烈な勢いで執拗に求愛された。
ストカー規制法に引っ掛かりそうなくらい、しつこ…いや、情熱的だってことにしておこう。
その情熱に根負けして、紫苑と付き合い始めてから、彼が俳優だってことを知った。
そして同時に、眠る暇もないほど過酷な、彼の日常を知った。
眠りたくても眠れない多忙な日々が、彼の身体から休息する事を忘れさせていた。

「…わかってる。私を利用するだけなら、同棲なんて危ない真似しないわ。俳優“上坂伊織（かみさかいおり）”には致命的なスキャンダルだもの」

力が緩くなった彼の腕から、私は身体を起こす。

私をじっと見上げてくる紫苑（しおん）の、頬にかかるダークブラウンの髪を、梳くようになでた。

「じゃあ、どうして俺が寝ると、違うベッドに逃げるのか、ちゃんと教えてよ。俺の事、嫌い？」

「え…それは…ねぇ…」

思わず目が泳いでしまう。

捨てられた子犬のように縋る瞳に、いたたまれない気分になる。

こう言う時、顔の良い年下男はずるいと感じる。

何時も、これに負けるのだ。

「……のよ」

「？何？」

顔を見て喋ると、どうしても小声になってしまうので、ベッドに身体を戻し、紫苑の顔を見ないように自白した。

「年甲斐もなく、恥ずかしいのよ…仕方ないでしょ、慣れないんだからっ！仕事命で、男関係は無視して生きてきたんだから！三十路近いのに、この程度でドキドキして眠れないのっ！まだ恥ずかしい

わよ！キモイってわかってるわよ！ドン引きすればいいでしょ！守銭奴で悪かったわよ！馬鹿っ！」

言っている自分が、ドツボにはまっていた。
もう、何を言っているのかわからなくなって、自爆したことを八つ当たりしてしまう。
穴があったら、埋まってしまいたい。
そんなことを思っていたら、隣で紫苑が身体を起こした。
当然だ。
呆れたどころか、ドン引きに決まってる。
頭から掛け布団をかぶって、丸まった私の近くのベッドが軋む。
彼がベッドから降りて行くのだと思った瞬間、思いっきり布団を剥がされた。

「わっ！な、何！？」

驚いて顔を上げれば、紫苑が私の肩を掴む。
逃げられないように、押さえ込まれる。
見下ろす彼は、ニヤリと笑う。

「顔、赤いよ？いちいち反応が可愛いよね、吉良は」
「ばっ、馬鹿！！年上をからかうなっ…わ…笑うなぁ！」

抗議の声に、紫苑は嬉しそうに笑ったまま。
明らかに、私の反応を楽しんでいた。
あまりに楽しそうに笑うので、なんだか腹が立って、掌で彼の胸を何度も叩く。

「ごめん、ごめん」

悪びれた様子もなく謝った紫苑は、私の手を掴んで顔を寄せる。
唇に落とされた熱は、優しく私をついばむ。
身を委ねたくなるような心地よい口付けに、怒りも恥ずかしさも吹き飛んでいく。
キスを止めた紫苑が、間近で私を見つめる。
その表情が不意に曇る。

「…吉良、どうしよう…俺、完全に目覚めちゃったんですけど…」
「えっ！ご、ごめん。眠れるようにラベンダーのアロマする？カモミールティー飲む？」
「そっちじゃなくて…」

そっと耳打ちされた言葉に、私は悶絶した。

「って訳で、責任とってね？」
「だから、エロい声で下ネタ言わないでぇ！って、脱がすなぁぁぁぁ！」

こうなると、どうにも止まらない。
観念して、捕えられて、絡まって…
今日の夜は明けていく。
優しいけれど眠れない夜は、まだ続きそう…

ＥＮＤ

RAINY KISS 1

携帯電話のアラームが聞こえる。
もう、朝の五時なんだ…。
起きて洗濯をして、お弁当作って、仕事に行かないと…。
開かない目と格闘しながら、枕元にあるはずの携帯電話を探す。
私の手が探し出すより早く、アラームが止まった。
なぜだろうと思いながらも、目は開かなくて。
無理やり体を起こせば、誰かが私の身体に腕をまわしてふかふかのベッドに押し戻す。

「大丈夫、まだ時間あるよ?」

耳朶に、低音でそっと囁かれた言葉。
…紫苑(しおん)の声。
あれ、帰って来たの?
確か、まだ二日はドラマの地方ロケで帰ってこないって言っていたのに。
夢?
でも、抱き寄せられた感覚はすごくリアルで。

「お休み」

優しい声も、頭を撫でる掌の心地よい温もりも、彼のもの。
…紫苑が居なくて寂しいのかな、私…だから、こんな夢を見るのかな…
普段から、紫苑はテレビの収録や雑誌の撮影で、仕事が忙しい。
だから、何日も家を空けて帰ってこない時もあるし、帰ってくる

時間だってばらばら。
全然、会えない時だってあるけど…
同棲してから、一月も会えないのは初めてだから…不安なのかな…
夢でも良い。
もう少しだけ、彼を感じたい。
そう考えながら、深い眠りに私は落ちていった。

RAINY KISS 2

§

ダブルベッドの上、目覚めて私はぼんやり目の前の男の顔を眺めていた。
憎たらしいくらい、均整のとれた美顔。
お母様がフランス人だけあって、身体の造詣が日本人離れしている。
すっきりと高い鼻梁、唇は少し厚くて、肌は白皙。シミもなければ肌理も細かくて、見る度に羨望を抱いてしまう。
私がどれだけ、お手入れに気を遣っても、彼の美貌の前には何の役にも立たない。
近くで見ている分には眼福の極み、隣に立つ女としては立つ瀬がない容姿なのだ。
その見慣れた男の顔に、そっと手を伸ばしてみる。
紫苑の頬を、輪郭をなぞる様に触れていく。
温もりも、そのなめらかな肌も、本物。
徐々に、私の脳が覚醒していく。
“…あれ?…何で此所にいるの?…それより、今何時?目覚ましは?”
起き上がろうとして、体に巻き付いた男の腕に阻まれる。
「何処行くの…」

紫苑は薄目を開き、眠たげなアッシュブルーの双眸で私を見た。

「あ、おはよう。携帯電話探してるの」

そう言っているのに、まったくもって外れない彼の腕をやっとの事で引き剥し、携帯電話を手に取って時間を確認する。

表示された時間に、全身の血が凍った。

「じゅ、十一時っ！？」

思わず携帯電話を布団に落とし、頭を抱えた。

“殺されるっ！院長に吊し上げられるっ！”

「どうして、目覚ましが鳴らないのよっ！？」

「俺止めたよ？」

紫苑を振り返れば、彼は何がいけないの？とばかりに、不思議そうな顔をしている。思わず、横になっている彼の胸倉を掴んで、激しく揺すった。

「馬鹿ぁぁぁぁぁっ！！なんで止めちゃうのよぅ！」

「だって、吉良（きら）と一緒に居たくて」

「馬鹿、馬鹿ぁ！無断欠勤したら、院長に殺されるじゃないのっ！」

あの小さなミスを大きく突く鬼院長こと榊健人（さかきけんと）に、血祭りに上げられてしまう。

紫苑から手を離し、着替えるためにベッドから降りようと、体の向きを変えた。

が、紫苑に背後から抱きすくめられる。

「大丈夫。健斗には、夜中のうちに俺が連絡入れたから」

「…ど、どう言う事？」

恐る恐る後ろを振り返ると、紫苑が軽く唇を重ねてくる。

「今日は俺が吉良を独り占めするから、邪魔するなって、健斗に釘刺した」

「そ、それってどう言う意味？」

「言わせたいの？」

挑発的に、意地悪く笑った紫苑に、ゾクリとする。

喉に触れてきた彼の指先が、肌を撫でて滑り降りる。

パジャマの一番上のボタンを外され、思わず彼の手を握る。

帰ってきてすぐそれって、ちょっと性急過ぎる。

話したい事もたくさんあるのに。

それを不満そうに、紫苑は見る。

「なんで？せっかく、健斗が病欠扱いで、有給消化しておくって、承諾してくれたのに」

どうしてそんな所だけ、やたらに手回しが良いのだろう。

「それに今日は雨だから」

「雨？」

そう言えば、閉じられたカーテンの先から、雨音がする。『雨だから』の意味は分からないけれど、雨が降っているのは確かみたい。

「外に出ないで？吉良を濡らして良いのは、俺だけだから」

耳元で囁かれた、低くかすれた妖艶な声に、思考が停止する。
ややあって、紫苑の言葉の意味をじんわりと脳が理解する。
一気に顔が熱くなって、そのまま、羞恥心で眩暈がして倒れかかる。
それを紫苑が慌てて支えるけど、折り重なるようにしてベッドの上に倒れる。
しばらく無言で、私を見つめていた紫苑の視線が横にそれる。

「ごめん。ホントは一日、吉良とそうしたいんだけど…俺また、現場に戻るんだ」
「え…？」
「撮影が長引いて、そのまま仕事が玉突きで…戻る目処がつかないんだ。だから、約束したドライブが無理だって、謝りに来たんだ」
「…そう…なんだ…」
「ごめん」

紫苑との約束は、あまり守られた事がない。
特にデートの約束は。
仕事だから仕方ないって理解する反面、やっぱり残念だってショックもある。

「…もしかして、それを言うためだけに戻って来たの？」

電話で事足りるはずなのに。

「どうしても吉良に会いたかったから、半日だけ休み貰ったんだ」

無理して戻って来てくれたのかと思うと、もうそこで彼を憎めない。

それがどれだけ大変な事か、分かるから。

会いたいと思うのは、私だって同じ。

それでも私からは絶対、動いてはいけない。

人気商売の彼の足手まといになるから。

だからこそ、紫苑の行動が嬉しい。

私は紫苑の首に腕を絡め、自分から彼に唇を寄せる。

軽く触れて、彼をぎゅっと抱擁する。

「来てくれてありがとう、紫苑。嬉しい」

耳元で、紫苑が微笑むのが分かる。

腕を緩め、彼を見る。

「でもそれなら、起こしてくれたら良いのに」

「吉良の寝顔を見ていたら、なんか俺も眠くなって…吉良がいないと、ぐっすり眠れないんだ」

安堵したように笑う紫苑が、いつもより愛しく思える。

「デートの穴埋め、ちゃんとするから」

「帰るまでこうしていて…それでチャラでいいから」

知らない所で、紫苑への気持ちがどんどん大きくなる。

彼と離れたくないって、少しでも長く彼に触れていたくて、少しだけわがままを言ってみる。

紫苑は困ったように笑うと、額にそっとキスをする。

「吉良、寂しくさせてごめん」

私は首を横に振る。

寂しいって認めたら、独占欲に歯止めがきかなくなりそうで。

紫苑の全てを、縛り付けるなんてしたくないから、気持ちに蓋をする。

でも、年上だからって、大人な態度なんてずっと出来ない。

「次に会う時は……貴方に濡れても…いい？」

意趣返しに、恥ずかしいけれどそう聞いてみる。

驚いたように紫苑は目を瞬かせ、怖いほど真剣な眼差しで私を見る。

“もしかして、女の方から誘うような事を言われるの、紫苑は嫌い？…ど、どうしよう…”

私が内心ではらはらしていると、紫苑は自分の顔を手で押さえ、がっくりと肩を落として深く溜め息をつく。

「なんでそんな事、言っちゃうなぁ…」

困ったような、呆れたような声音。
完全にアウトの方だ…。

「うっ…ご、ごめん！忘れて！今のなし！」
「もう遅い」

ゆっくりと、ダークブラウンの髪をかき上げ、気怠い色香を纏った表情で、紫苑は唇の端を歪める。

“あれ？嫌がってるのとは、なんだかちょっと違う気がする”

「俺を誘うようなこと吉良が言うの…初めてだよね？」
「…だ、駄目…かな…」
「そんな訳ない。すごく嬉しいよ？ただ、帰りたくなくなって困るけど」

覗き込む灰青色の瞳に、吸い込まれそうで、胸の鼓動が一気に跳ね上がる。
俳優”上坂伊織“モードが入った彼の笑みは、ちょっと苦手だった。淫靡すぎて。

彼の色気に当てられて、頬がとても熱くてくらくらする。

「紫苑が帰って来るの、ちゃんと待ってるから」

そんな事しか言えないけど、紫苑は何時もの様に優しく笑ってくれる。

「…遠慮なんてしないから、覚悟して？」

甘い危険を感じて逃げようとした時には、口付けが首筋に降りて来た。

「え？い、今じゃないよ？ちょっと、紫苑っ」

「我慢できない」

もがけばもがくほど、わたしの素肌は彼の前に晒されて、紫苑の熱が肌に絡み付く。

仕事に真摯な彼の事だから、仕事に穴を開けるとは思えないけど、それでも心配で、彼の髪を軽く引っ張る。

「し、仕事は？ねぇ…っ！」

胸元に降りた口付けが、チクリと肌を刺す。

甘い痛みに驚いて、身体が震える。

「大丈夫だから、少し黙って…」

低く囁いて、紫苑は私の体に幾度もキスの痕を刻んでいく。

会えなかった時間の分だけ強引で、濃厚な彼の愛情表現にまどろみ、熱に浮かされ、満たされ、潤んでいく。

寂しさや不安を埋めていくように、二人、一つにとけていく。

降り止まぬ雨と共に……。

ＥＮＤ

桜散りいこうとも　1

長い冬を越えて、街道沿いの桜並木にもようやく春の兆しが訪れる。
小さく硬かった花蕾を膨らませ、淡桃色の花弁を綻ばせながら。
私は通勤の足を止め、じきに咲くそれを見上げる。
また、この季節がやってきた。
この悔しいほどに優美で可憐な花が咲く、大嫌いな季節が。

§

「…ら、吉良！」
「は、はいっ！」
大声で呼ばれ慌てて振り返れば、クリニックの院長、榊健斗が腕を組んで呆れ顔だった。
イギリス人の祖母を持つ院長は、百八十？の長身でどこか異国めいた雰囲気がある。
白衣には皺もなく、その中に纏っているイタリアブランドのワイシャツもきっちりと着こなす。医者にありがちな不健康さも、ゴルフ焼けの褐色の肌もなく、モデルと称するにも遜色のない凛々しさと、整いすぎた顔立ち。
今年三十八歳になろうという男には到底、見えない若々しさもある。

睡眠外来が主体のメンタルクリニックの若き院長は、私の雇用主であり上司でもある。

彼は患者への人当たりも良いので、彼目当ての女性患者は、女性患者総数の七割を占めているし、医者としての腕も良いので男性患者も多い。

一見、一部の隙もないようなこの英国紳士風の外見の男が、実は真正ドSだとはスタッフしか知らない。

性格の一部が、大きく破綻しているから、私たちスタッフは結構大変だったりする。

「お前、いつまで呆けているつもりだ？皆、昼休憩で出て行ったぞ」

眼鏡越しのライトブラウンの双眸から放たれる険しい視線が、私に突き刺さる。

煮沸消毒をしながらぼんやりしていた私は、タイマーが鳴ったことにも気付かず、ずっと、その場に立ちつくしていたらしい。

あわてて火を止める。

周囲を見渡せば、同僚はいない。

時計は、十三時になろうとしていた。

「もう、こんな時間なんですね…すいません。これが終わったら食後のコーヒーを」

「カルテ整理が今終わった所だ。まだ飯は食ってねぇ」

手早く煮沸消毒した器材を取り出していると、院長が隣に立つ。

頭半分ほど背の高い院長は、訝った表情で私を見下ろす。

「らしくもなく、気が入ってねぇな？」

「…そうですか？」

「紫苑が眠らせなかったのか？」

何時もなら、そのセクハラまがいの台詞も軽くあしらえるのに、今日は紫苑の名前を聞いただけで、胸が痛む。
今、紫苑は少しまとまった休みが出来て毎日家にはいるけれど、そんな艶のある話ではないのだ。

「ちがいますよ…」
「じゃあ、倦怠期か？」
「…どうして、紫苑がらみで聞くんです？」
「あの莫迦以外で悩むことがあるのか？」

莫迦って…仮にも紫苑と院長は従兄弟なのに。
答えずにいれば、院長は白衣を脱ぎ私に投げる。

「飯食いに行くから、着替えてついて来い」
「……おごりですか？」
「…そこだけは、しっかりしてやがるな。貧乏人に金なんざ出させるか。行くぞ」

院長は皮肉めいた苦笑を浮かべた。

桜散りいこうとも　2

§

きっかけは些細なことだった。

昨日の夜、雑誌を見ていた恋人、榊紫苑の一言にその端を発した。

「花見に行きたい」

ソファに腰を下ろしていた彼に近付いて、手に持っていたものを見る。

紫苑が見ていた雑誌のページは、夜桜の名所が書かれていた。

旅行雑誌の花見特集をみて、彼はどうやら触発されたみたいだった。

「南のほうなら、もう桜も咲いてるし。夜なら、人の多いところでも大丈夫だと思うから行こうよ」

芸能界に疎い私でさえ、顔は分からないけれど名前だけは知っていた唯一の芸能人。

俳優、上坂伊織。

それが、紫苑の仕事の顔。

溜め息が出るほど精緻な肢体と甘い美貌は、女性に絶大な人気がある。

三歳の時にキッズモデルとしてデビュー、六歳で子役俳優デビューをして、映画と舞台を中心に活動していた。もともと、その容姿

と演技力には定評があって、五年前に主演した映画がヒットして人気に火がついた…らしいと、上坂伊織マニアを自称する職場の仲間から聞いたのだけど。

芸能界音痴な私は、彼から職業を聞くまで彼が俳優だなんて知らなかった。

最近ではドラマにも準主役で出演し、スターダムにのし上がった彼には、ほとんど休みがない。今回の様に一週間も休みが取れるなんて、何年ぶりかのことらしい。

そんな彼が人並みのデートが出来ないことを気遣って、最大限に考えて言ってくれたであろう提案。

私は申し訳ないけれど、乗り気ではなかった。

「何言ってるの。夜桜って言っても、ライトアップされて明るいのよ?すぐ、貴方だってばれちゃうわ」

「どうせ、花見に夢中で、誰も人の顔なんて見ないよ」

「二人で人混みに出掛けるのは、紫苑のマネージャーさんに危ないって注意されたし…」

紫苑はむっとしたように雑誌を閉じ、ソファの横に置く。

「何?吉良は俺より、熊井の言うことを優先させるわけ?」

「そういう意味じゃないけど…『夜桜デート』なんて、スキャンダルになって紫苑の仕事に支障が出るのは、私も嫌よ」

「俺に女がいるからって見限るような奴ら、俺の見た目だけしか見てないファンだろ。そんなファンしかいないなら、中身のない俳優だっていう俺の問題だ」

祖母がイギリス人、母親がフランス人の紫苑は、殆ど外国人にしか見えない端正なルックスと類稀な美貌ばかりが取り上げられる。

役柄も似たような二枚目役ばかりで、俳優である彼の本来の評価

は、あまりされない。

「それなら遅かれ早かれ潰れる。ルックスだけのお飾り俳優なんて、いくらでもいる」

「紫苑、そういう言い方するのはやめて」

「やりたい役も出来ない、遊びにも行けない…息が詰まるんだよ！」

声を荒げながらも紫苑は、怒りを押し殺しているようだった。

私生活でも制限を余儀なくされて嫌になっている彼の気持ちも分かっているのに、私には、彼の望みを叶えてあげることはできない。

桜の花を見ることだけは…。

「…お花見に行きたいなら、お友達と行っ」

「俺は、吉良と行きたいんだよ！」

言葉を途中でふさいだ紫苑は、立ち上がり、私を見下ろす。

あまり怒りを見せたことのない、紫苑の鋭い視線と怒気が少し怖い。

「ごめん…お花見だけはどうしても嫌なのよ」

「そんなに俺と出掛けるのが嫌なんだ」

「そうは言ってないでしょ」

「同じことだよ！」

「全然違うわ！お花見なんて、絶対行かないから！」

捻くれたことを言い出した紫苑に、だんだん腹が立って、私は思わずそう怒鳴った。

にらみ合うように互いを見据え、ほぼ同時にそっぽを向いた。

それから、顔も合わせていない。

桜散りいこうとも　3

§

院長はクリニックから徒歩五分ほどの距離にある、蕎麦屋さんに連れて行ってくれた。
和食、殊に蕎麦好きな院長のお気に入りの店で、良く出前を取っている。
外観からして、庶民な私には敷居の高さを感じたら、店の中もお上品な感じで私が知っている大衆食堂のような感じではなかった。
ものすごく、嫌な予感がして、恐る恐るメニューを見た瞬間、私はその値段の高さに思わずメニュー票を両手で閉じて院長を見る。
普通の店の二倍近い御立派なお値段。
おごりですか？なんて、冗談で言うんじゃなかったと、おもいっきり後悔する。
高価なものをタダで手にする時ほど、そのしっぺ返しは大きかったりする。
特に院長の場合は、仕事で反動が来る。
私の心中に気付いたのか、院長が眩しいほどの似非紳士スマイルを向ける。

「遠慮なく選べ」

遠慮なくこき使ってやるから。と、その言葉の後に、聞こえない付加価値が付いている。
こう言う時、高価なものを選択すると、後々、自分が働きながら

後悔をする。
かといって一番安いものを選ぶと、院長が「俺の財力なめてるのか？」と、不機嫌になって、結局は仕事で苦労する羽目になる。
そんな鬼院長は夏でも冬でも、ざる蕎麦の定食を注文する。
私は悩んだあげく、山菜そばを注文した。味にうるさい院長が週三回もお昼に食べるだけあって、文句なしにお蕎麦は美味しかった。
食事中、何を聞かれるのかとずっと身構えていたけど、結局、院長は何を聞くわけでもなく、単純に食事を済ませただけだった。
店を出て、クリニックに戻る道を二人で歩いた。
私はふと目に入ったものに足を止めた。
街路樹の桜の木の枝に、膨らみかけた桜色の蕾がある。
じきに花は開き、この染井吉野もふくよかな花をたくさん結ぶ。

「…もうじき咲くな」

院長も足を止めて私の隣に立ち、同じ枝に視線を向けていた。

「お前、紫苑が夜桜見に行きたいって言ったのを、嫌がったらしいな。しかもそれで喧嘩したってな？」

だから紫苑のことを色々言ったのかと、ようやく合点が行く。
お互いに仲良くないと言うけれど、プライベートのいろんな情報がダダ漏れになる仲。従兄弟と言うよりは年の離れた兄弟みたいで、院長はわりと紫苑を気にかけている。

「どうして蕎麦屋で聞かなかったんですか？」
「うまい飯を不味くする話なんざ出来るか」

そうだ。楽しいことを邪魔されるのが、院長は大嫌いだったっけ。

「…紫苑、怒ってました？」
「鬱陶しいぐらい落ち込んでたぞ。帰ったら、甘やかせよ？」
「…私が花見を嫌がる理由、話してないですよね？」
院長に視線を向ければ、彼も横目で私を見る。
「…そいつは、お前が話すかどうか決めることだろ」
院長の視線が、不意に鋭くなる。
「まだ、桜は好きにならないのか？」
「…嫌いです」
大っ嫌い。桜の花も、この花が咲く季節も。
見るたび、思い出してしまうから。
四年前に、自分が見捨てた人を。
死なせてしまった人を。
「お前は悪くない…あれは、奴らが自爆しただけだ」
院長は、言葉を吐き捨てるように言い放つ。
不愉快だと言わんばかりに。
私は四年前、両親を捨てた。

桜散りいこうとも　4

中小企業の町工場を経営していた両親は私が二十一歳の時、会社の倒産と同時に多額の借金を残して失踪した。

いわゆる夜逃げ。

その借金は、看護師として勤めていた一人っ子の私に全て降りかかり、病院に内緒で水商売のバイトをしながら返済することになった。

シフトをやりくりしながら、やっとの思いで四年近くかけて借金を返し終わったと思ったら、今度は、何件もの金融会社から借金の督促が来た。

しかも、暴力団がらみの暴利な金融会社ばかりから。

両親は失踪先でも借金を重ねて、それを勝手に私の負債にして押し付けた。金融会社の人間は、病院にまで借金の取立てに来た。

それが原因で、前の病院には居られなくなって…大好きな仕事を続けられなくなって、辞めることになった。

両親は何処にいるのかもわからない状態で、分かるのは、泥沼の借金地獄に落とされた事だけ。

金利だけで膨れあがっていく理不尽な借金と、身勝手な両親に精神的に追い込まれた。

水商売で借金を返す生活に疲れ、不眠症になり睡眠薬の過剰服用（オーバードーズ）で私は救急搬送された。

一人で抱えることが限界だった私を助けてくれたのが、以前退職した職場で医師をしていた榊健斗夫妻だった。

現、榊健人夫人の美菜先生と私は仲が良く、退職後も交流があった。

その関係で、当時、美菜先生の恋人だった院長とも親しくしてい

た。

健斗院長は代々医者の家系で、いくつもの医療法人を運営する榊グループの直系一族。

院長夫人の美菜先生は、形成外科の医師であり、美容業界のトップ企業の社長令嬢。

そんな華々しい家柄の二人は、私の両親を容易に探し出して私の前に連れてきてくれた。

何年ぶりかに再会した両親は、福福しく身を肥やし、ブランド物を身につけた奢侈の塊だった。

働きもせず借金で豪遊し、ギャンブルに金をつぎ込んでいた両親の実情を知った私は、両親と絶縁した。

もう呆れ果てて、怒る気力もなかった。

ただ、両親の顔も見たくなかった。

血を分けた親子であることすら嫌だった。

だから弁護士を立て、両親と籍を切り離し、不当に負わされた借金も無効にした。

その後、両親は借金を繰り返し、借金取りに追いたてられ、一年くらいして二人は亡くなった。

何処から調べたのか、見知らぬ土地の役所の人から、両親が亡くなったと連絡が来た。

借金を苦にした自殺という内容の遺書が残されていたので、自殺で処理されたらしい。

両親が死んだのは三年前、満開に咲き誇った桜花が散り始めた季節。

知らせに、涙は出なかった。

悲しくもなかった。

むしろほっとした自分がいた。

除籍して、戸籍上も赤の他人になっても、ずっと不安だった。

また、二人が作った借金で、自分の生活が脅かされるのではないかと、いつもびくびくしていた。

だから訃報を聞かされても、遺体を引き取らなかったし、彼らが何処に埋葬されているのかも知らない。

我ながら、自分が酷い人間だと思う。

自分を生んでくれた両親。

確かに酷い仕打ちはされたけど、子供の頃はとても優しい両親だった。

せめて、遺体を引き取って墓を建てるくらい、すべきだったのかもしれない。

年月が経つにつれ、生まれてくるのは迷いばかり。

けれど、両親が自分にしたことは、まだ許せない。

私は両親が死んだと知らされたその日から、心の中が止まったまま。

美しい桜とは対照的な私の心は、この季節になると不安定に黒く淀んでいく。

桜散りいこうとも　5

「お前の判断は間違っていない。一度、甘い汁を吸うことを覚えたあいつらは、お前に一生寄生する。親子の情で未練を引きずれば、お前の人生が破綻して、死んでたはずだ。間違っても後悔なんざするなよ？」

私の心の中を読み取ったように、院長はそう言う。
遺体を引き取るかどうかの話の時、彼が真っ先に反対をした。
引き取ったら、その遺体を検体にして埋葬させないとまで息巻いた。
院長なら、本当に法の目を潜って上手にやりかねないから内心ヒヤヒヤしていた。

「…院長は、時々、優しいですね」
「時々だから、価値があるってもんだろうが」

院長は鼻で笑う。
院長夫婦は、私が一番苦しいとき、そばにいて精神的にも助けてくれた。
当時、経済的に逼迫していたので、弁護士費用も肩代わりしてくれた。
その肩代わりの条件も、院長が立ち上げるクリニックに就職すること。
暗に、就職先まで用意してくれた。
手を差し伸べて、生きていけるように支えてくれた。
いつも、人に無茶な要求ばかりするのに、大事なところで優しい。
院長と美菜先生には、とても感謝している。

「紫苑に話す時期は、そのうちに来る。それまでは無理に言うことはねぇ。黙ってろ」
「…言ったら、彼に嫌われてしまいそうで…怖いです」
両親を見捨てた自分には、人から愛される資格など、本当はないのかもしれない。
だからずっと恋も愛も、触れないように生きてきた。
紫苑と出会い、愛されて、自分の想いが膨らめば膨らむほど、怖くなる。
自分が紫苑に愛されても良いのか。
私が彼を愛しても良いのか…不安でたまらない。
今の幸せが壊れてしまうことが怖い。
彼を失うことが、何より怖い。
だから、夜桜を見に行こうといった紫苑に、素直に桜が嫌いと最初に言い出せなかった。
言えば、彼の性格上、桜が嫌いな理由を絶対に知りたがる。
彼に嘘は言いたくない。だから、言えなかった。
代わりに彼の立場を利用して、彼の望みを諦めさせようとした。
狡い自分のせいで、紫苑を怒らせて傷付けてしまった。
謝りたいけど…家に帰っても、彼が口をきいてくれなかったらどうしよう。
考えれば考えるほど、心が不安になって、悲しくなって泣きたい気持ちになる。
突然、目の前に院長の顔が近付き、驚いて身を退かせる。
が、背に回された腕がそれを止め、強く引き寄せられる。
何事かと相手を見上げれば、院長は真顔で私を見下ろしている。
「紫苑と別れたら、俺の愛人にでもなるか？」

笑いもせず、冗談めかしででもなく、真剣な面持ちのままそう告げた院長に、思わず私は彼の鳩尾に、肘鉄を食らわせる。
院長は私から手を離し、表情を歪ませて片手で鳩尾を押える。

「阿保か、お前！食ったものが、戻ってきたじゃねえか！」
「縁起でもない冗談を言うからです！」

ぷいとそっぽを向いて、クリニックに向かって私は歩き出す。

「…紫苑も、この粗雑な女の何処がいいんだ…」
「院長、聞こえてますから！」

ぼそりと聞こえた嫌味に院長を振り返れば、院長は穏やかに笑う。

「お前はそのくらい元気なほうが、良い」

女性を口説いているときにしか見たことのない微笑を向けられ、私は目を疑い、目を瞬かせる。

「おら、とっとと帰って、夕診の支度するぞ」
「あ、はい」

皮肉めいた普段の表情に戻った院長に腕をつかまれ、引きずられるように、私はそのまま歩き出す。
歩きながら、再び花蕾のついた桜を見る。

花はまた咲いて散る。
心に残ったしこりはまだ消えない。
選んだ人生の選択も取り消せない。
だからこそ、いつまでも、あの頃のまま心を止めてはいけない。
私は生きているのだから。
歩き出さないと…。
この季節が過ぎても、また、春はやってくるから。

いつか、紫苑と満開の桜を笑いながら見られるように…

END

Ａｐｒｉｌ　ｆｏｏｌに嘘の花束を　１（前書き）

このお話は、「桜散りいこうとも」の続きのお話になります。

Ａｐｒｉｌ　ｆｏｏｌに嘘の花束を　１

クリニックの夕方診療が終わり、片づけと掃除を全て終えた頃には、四人出勤していたスタッフも、私一人だけになっていた。
更衣室で着替えを終え、まだ診察室で調べ物をしている院長を覗く。

「院長、お先に失礼します」

いつになく真面目な顔をして、百科事典ほど分厚い英文だらけの医学書を読んでいた院長榊健斗が顔を上げる。
人前で勉強する所を絶対に見せない院長が珍しいなと思いつつ見ていたら、怪訝そうな顔をされた。

「なんだ、帰るのか？」
「…帰りますよ。いけませんか？」
「帰りたくねぇって、顔してるぞ」

帰り辛いのは確かにあるけど、いつまでも紫苑と喧嘩したままでいるわけにもいかない。
朝は謝る気にもならなくて気まずかったから、紫苑の顔を見ないまま家を出てきたけど、時間を置いて冷静になれば、自分が悪かったって思えるから謝ろうって決めた。
お昼ご飯の後に家の固定電話に電話をかけたけど、紫苑は出なかった。
意図的に出なかったのか、家にいなかったのかはわからない。
下手をすれば、機嫌を損ねたままの彼が勝手に仕事を入れて、帰

ってこないことだって考えられるから、不安。
そうなると私は自分から彼に連絡を入れる事が出来ないから、喧嘩を引きずったまま何日も会えなくなる可能性だってある。

「帰りたくない。と、お前が一言、可愛く言えば、遠慮なく喰ってやるぞ？」
「院長に頂かれるつもりはありません」

いつもの他愛ない、軽いセクハラコミュニケーションを冷たくあしらえば、院長の双眸が、眼鏡の奥で皮肉げに笑う。

「昼間の話、ちゃんと考えておけよ？」

思い当たるのは、蕎麦屋の帰り道にした、紫苑との喧嘩話。
紫苑と仲直りをしろという話のことだろうか？
念のために、院長へ確認してみる。

「…仲直りする方法ですか？」
「違う。紫苑と別れたら、俺の愛人になるって話だ」
「だから、縁起が悪いこと言わないで下さい！しかも、『なるか？』が、『なる』に変わってます！」
「お前、細かいところを覚えてるじゃねえか」

院長は、にやりと笑う。
その色気を含んだ笑みが、どこか紫苑に似ていてどきりとする。
容姿はあまり似ていないけど、こういう一瞬の表情に、二人の間に従兄弟という血の繋がりを実感する。

「ま、あいつのほうがお前にベタ惚れだから、別れるとは言わねぇだろ。さっさと帰って、気楽に謝って来い」

「…そうします」

最終的に院長にフォローされて、少しだけ気分が楽になり、私はクリニックを後にした。

§

クリニックのあるビルから外に出た瞬間、肌を刺すような冬の冷気が襲う。

「いやぁぁぁっ！寒いっ！」

昼間はあんなに暖かかったのに。

桜が咲こうとする時期に、何で冬みたいに寒いの？

吐く息まで白い。

「うぅ…ダウンコート欲しい…」

スプリングコートの襟を寄せてみるけど、生地をすり抜けて冷たい風が肌に触れる。

電車で来たから、駅まで歩いて行かないと…

「はぁ…寒いの、いやだなぁ…」

寒がりな私は、寒い中を歩くのが苦手で、どうしても歩調がゆっくりになる。

「そうだ…買い物しないと…」

昨日の夜、冷蔵庫の中身がほとんど空だった事を思い出す。
冷凍庫には、冷凍保存したカレーとご飯があったけど。
紫苑が朝と昼のご飯を、ちゃんと食べたのか心配になる。
付き合う前は外食ばかりだった彼は、料理なんて全くできないどころか、インスタント食品の料理さえまともに作れない。
無難に、外に食べに出掛けたかな…もしかして、そのまま帰ってこないなんて…
なんだか、だんだんネガティブな方向に考えが廻り、私は頭を振る。
帰ったら、紫苑の好きなご飯を作って素直に謝ろう。
私は足早に、行きつけのスーパーに向かって歩き出した。

Ａｐｒｉｌ　ｆｏｏｌに嘘の花束を　２

§

マンションに戻ると、部屋には誰もいなかった。
紫苑は外に出てしまっているみたいで、人の気配はないし真っ暗。
帰り道によぎったネガティブな考えが不意に脳裏をよぎって、いけないと思う。

“とりあえず、作るだけ作って待ってみようかな”

紫苑と同棲するにあたって彼の事務所と私との約束で、私から彼に連絡をしないという約束事がある。
帰ってくるか確認が取れないけれど、何もせず待つのも嫌なので、普段と同じように、食事の支度をしながら、お風呂も沸かしておく。
今日のメニューは、『お子様ランチ』。
紫苑は美形でクールなイメージを売りにした俳優だけど、素の彼が好む食べ物は、子供が好きなメニューが多い。
特に、ハンバーグと海老フライ、から揚げ、プリン。
既製品は嫌いで、手作り限定というこだわりがある。
しかも同じプレートに、全部が乗っていないと絶対に駄目。
一品だけとか、別皿での盛り付けは不機嫌になる。
だから、お子様ランチ風に、白い大皿に盛り付ける。
栄養が偏るので、ミモザサラダとミネストローネも付けて。
食事の支度を終えて、待ってみても紫苑は帰ってくる気配がない。

もう、二十二時を回っているのに。
仕方がないので、先にお風呂へ入った。
お風呂から上がっても、紫苑は帰ってきた様子がない…。
リビングでＴＶをつけて見るけど、全然、内容は頭に入ってこない。お笑い番組が流れてテレビの向こう側は楽しそうなのに、全然、笑えない。
手に握りしめた携帯電話からは、彼からメールも電話も来ない。
紫苑の仕事の関係上、交際は内緒にするよう、事務所側から言われている。
同棲は紫苑が事務所の反対を押し切って強行してしまったけど、それがいかにハイリスクなことか、事務所の社長さんや紫苑のマネージャさんから懇々と説明をされた。
恋多き男なんて言われていた紫苑だけど、それでも、恋人が一般人でしかも同棲しているとなれば、彼の人気に大きな支障になると教えられた。
その上で、電話やメールは絶対に私からはしないという約束をした。何が原因で交際がばれてしまうかわからないから、出来る限りの紫苑にかかるリスクを減らす為に。
今となっては、その制約から自分から何も出来ないことが、もどかしい。
紫苑を待つことが、こんなに不安になるなんて初めてで…。
気を紛らわすために、ご飯を先に食べてしまおうかとも思ったけど、お腹もすかない。
待つ時間が長くなればなるほど、どんどん、気持ちが滅入ってくる。

“修復…出来ないのかな?”

紫苑はモテる上に、女性に執着するタイプじゃない。
上坂伊織の時はフェミニストとして振る舞っているけど、素の榊

紫苑は女性がどちらかと言えば苦手。
これまでの恋人も家に上げたことがないって言っていたし、上坂伊織として女性との交際の噂がひと月と続いたことはない。
一般人で、お世辞にも可愛いとは言えない身長と容姿で、しかも年上で、恋愛から逃げて仕事ばかりだった三十路目前の私を口説いてくれた紫苑。
不眠症が私と眠ることで落ち着くから一緒になったわけじゃないと、紫苑は言ってくれるけど、それなら私の何が彼の琴線に触れたのか、私には正直わからない。
自分の取り柄なんて、恋愛とは無縁の仕事関係スキルしか浮かばない。
だから、余計にこの状態が怖い。
もう、紫苑は私に飽きて嫌になってしまったのではないかと。
仕事も私生活も自由にならない事が、紫苑にとって苦しい事だと分かっていたのに、私は彼の気持ちを汲んで上げられなかった。
我慢して、花見へ一緒に行くと言えばよかった。
彼に不快な思いをさせるくらいなら…こんな苦しい気持ちになるくらいなら。
全ては、自分の狭量のせい。
私は両親を見捨てるような、冷たい人間だから…きっと知らないうちに、これまでだって紫苑をたくさん傷つけていたのかもしれない。
愛想を尽かされても、しかたないのかも。
知らず、頬に涙が伝う。
“駄目…どうしよう…私…紫苑のこと…すごく好き……”
別れることを想像するだけで、胸を引き裂かれるほどの悲しさが募る。
たまにしか戻らない紫苑を待つことは平気。

彼は一日に一度は連絡を入れてくれるし、必ず帰ってくるから。
紫苑に大切にされているのがわかるから、寂しくても我慢できる。
けど、本当に戻ってくるかも分からない不安、彼がいない日々への恐怖は耐えられない。
最初は、本当に仄かな気持ちだけで、強引な紫苑に翻弄されてばかりだったのに。
付き合ったこの半年で、いつの間にか紫苑は代えがたく大切な人になっていた。
もう一度、私に人を好きになる事を教えてくれた人。
こんなに人を好きだと思えたことなんて、一度もない。
溢れてくる涙を、零れ出そうになる声を必死に堪えてみるけど、止めることなんて出来なくて。
嗚咽が出そうになった瞬間、不意に家の鍵が開く音が耳に届いた。

紫苑が帰ってきた。
私はあわてて、肩にかけていたタオルで涙を拭う。
それでも涙は止まらない。
泣き顔を見られたくなくて、その場から逃げだそうとするけど、足がすくんでしまって、立ち上がりかけてすぐに膝が折れてその場にうずくまってしまう。
その時に床に膝をぶつけてしまって、音が部屋に響く。

「…吉良？」

音に気付いた紫苑が、リビングに入って来る気配がする。丁度、ソファの影に居るし、彼に背を向ける格好になっているから、まだ顔は見られていないはず。
彼が気付いて来る前に泣きやまないと。

「吉良？」
「来ないでっ」

訝しんだ彼の声がして、思わず反射的にそう答える。でも紫苑が、大股で近付いてくる足音がする。その足音が、少し荒っぽくて少し怖い。
紫苑と顔を合わせられなくて、身を縮めてタオルで顔を隠して俯いたままでいると、紫苑が私の前に膝を折る。
紫苑の大きな手が、私の手を握る。
タオルごと、強引に顔から私の手が引き離される。

強い男の人の力で。
スーツ姿の紫苑は、覗きこむように私を見ていた。
目が合った瞬間、紫苑の驚いた顔は、曇った表情へと変わる。それは、酷く傷ついた時に見せる苦しげで悲しそうな表情。
帰ってきてくれた彼の姿に安心半分、でも彼の表情に不安半分で、何だかさっき以上に涙が出て来る。
彼の両手が頬に触れ、新たに溢れる私の涙を拭う。

「何で、泣いているの？」

どう答えたらいいのか分からなくて、泣き顔を見られ続けるのが嫌で、首を何度も横に振って彼の手を解こうとした。
でも、彼の腕はびくともしない。

「やだ…離して…」
「泣きたいほど、俺のこと嫌い？…俺と別れたいとか、思ってる？」

予想していない言葉に、私はまじまじと紫苑を見る。

「全然、傍にもいない。普通にデートも出来ない。そんな俺に飽きた？」

問いかけている紫苑の表情は、徐々に険しくなってくる。

「し、紫苑…」

違うと言いたいのに、その言葉は阻まれる。
紫苑が強く私の身体を引き寄せた。
私はソファから紫苑の腕の中に落ちる。
まるで縋り付くように、彼は私を抱きしめる。

着やせして見える逞しい身体が、微かに震えている。

「答えてよ、吉良」

彼の胸からは、早鐘のように打つ拍動が伝わる。
何があったのか良く分からないけど、紫苑の精神状態が追い詰められていることだけは分かる。
どうしてそんなに不安そうに言うの？

「…どうして健斗に、俺と別れたいって言うんだ」

「はい？」

突拍子もない紫苑の言葉に、私も間の抜けた声で返してしまう。
あわてて彼を引き離し、紫苑を改めて見る。

「健斗から夕方近くに電話があった…吉良が俺と別れたがってるって…デートも満足にさせられない、我慢ばかり強いて我が侭放題で、吉良の気持ちをくんでない、吉良への労りが全然足りないって、散々、罵倒された…」

“院長！何て事を紫苑に言うのよっ！”

全く身に覚えのない話に心の中で絶叫し、涙も一気に止まる。

「ちょ、ちょっと待って…それ、何の話？」

紫苑は疑わしげな眼差しを、私に向ける。
その視線に、ちょっと腹が立った。
私より院長の言葉を信じているんだって。

「別れたいなんて、思うわけないじゃない！貴方が好きなんだから！」
「…本当に？」
「嫌いなら、紫苑の好きなご飯作って待ったりしないわよ」
「じゃあ、どうして泣いているわけ？」
「…そ、それは……紫苑が帰ってこないし…連絡ないし…嫌われちゃったかと……」

しどろもどろになりながら、最後の言葉は尻すぼみして小さくなってしまう。

「…別れたい訳じゃ…本当にないんだね？」

私が頷けば、紫苑が深く長い溜め息と共に、私の肩に顔を埋める。
彼の全身の力が抜けたのが分かる。

「ごめん…連絡しなくて…帰るの遅くなって…怖かったんだ…」
「怖い？」
「吉良が帰ってこなかったらって思ったら、家に居れなかった。もし電話して、そのまま別れ話切りだされたらって、訳わからない不安がぐるぐるして…気が変になりそうだった」

恋愛慣れしていそうな紫苑から、そんな言葉を聞くなんて思わなかった。
彼の職業である俳優“上坂伊織”は、女性とのゴシップに事欠かない人だから…
こんな喧嘩なんて、何回も経験していると思っていた。
恋さえままならなかった人生を過ごした私は、いつも彼との恋愛にいっぱいいっぱいなのに、紫苑はいつも余裕たっぷりに見えていたから…でも、本当は違うのかな。

「俺、ガキっぽいし…我が侭で…自分優先な事ばっかりするし…昨日は八つ当たりもしたから……ごめん」

先に謝られ、私は頸を横に振る。

「私こそ、ごめんなさい…桜の花が苦手だって、私が最初から言えばよかったのに…」

言葉を遮るように、紫苑の携帯電話が鳴った。

紫苑は短く息をついて、携帯電話をスーツの胸ポケットから抜き出す。

「…健斗？」

サブディスプレイを見て、紫苑は眉根を寄せて電話に出る。

「え？吉良？…あぁ、わかった」

紫苑は、何言か電話口で話をした後、私に携帯電話を差し出す。

「吉良、健斗が代われって」

何故、自分が指名されたか分からないまま、携帯電話を受け取り、耳に当てる。

「はい、吉良です」

『お前、携帯電話に何遍、電話したと思ってんだ！』

その怒声に、私は思わず耳から携帯電話を遠ざけて空いた手で耳を押さえる。キーンと耳の奥が変な金属音がして痛い上に、音が良く聞こえない。

そういえば、携帯電話をマナーモードにしたままだった。

ソファに投げ出された私の携帯電話は、着信ランプが点滅してい

た。
携帯電話をもちかえて、反対の耳に当てる。
「すいません…何か急用ですか？」
『…別に？』
思わず、紫苑の携帯電話だということを忘れて、投げそうになる。
用事もないのに電話をかけてきて、出なかったから怒鳴るなんて。
いつもながら、院長は自分の感情に自由すぎる。
どうして院長の下で三年も自分は働いているのか、自問自答したくなる。
怒りを飲みこみ気持ちを落ち着けて、私は彼に問うべき疑問を投げかける。
「院長、紫苑になんで変な嘘つくんですか」
『あぁ、あれか？Ａｐｒｉｌ　ｆｏｏｌだからに決まってんだろ』
「エイプリル…フール？」
無駄に素敵な活舌で言われた言葉を、私は復唱する。
そういえば、今日の日付は…四月一日。
紫苑は、もしかしなくても院長に騙された？
電話口から、愉快そうな男の笑い声が聞こえる。
「お前も気付かなかったのか？」
「笑い事じゃありません！変な波風立てないでくださいよねっ！」
『その様子だと、まんまと紫苑の奴、騙されたな？』
私は頭が痛くなって、額を押える。
もしかして昼の愛人になるかの話も、エイプリルフール絡みのネタだったのかしら？

いずれにしても…。

「嘘にしたって、性質が悪すぎます」
『当たり前だろ。紫苑は切羽詰まった状態にならねぇと、素直にならねぇ。ちゃんと、あいつからしおらしく謝ってきただろ?』

紫苑の行動をしっかり読んでいる。
もしかして院長、仲直りする手助けをしてくれたのかしら…。
そう思いかけて、即座に思考が否定をする。
恐らく院長の主たる目的は、己のドS嗜好を満たすため。
院長のそんな行動を渋々ながらも許せるのは、ちょっとした幸せの付加価値が必ずあるから。
これを計算してやっているから、院長は恐い人だ。

『お前にあんな顔をさせて悩ませたんだ。当然の報いだ』
「…院長、人をダシにしないで下さいよ?」

勘違い女子を量産しそうな発言を普段からさらりと言う院長に、私はそう釘を刺した。

『ばれたか』
「…で、仲直りしたのか確認するために連絡したんですか?」
『確認は必要だろ?礼を後できっちり徴収する為にはな』
「人をだまして礼をせびるって、貴方はどれだけ阿漕(あこぎ)ですか…」

こんな事を言われたら、素直にありがとうというタイミングさえ失くしてしまう。
突然、携帯電話を紫苑に取り上げられる。

「お前、何してくれてるわけ?喧嘩売ってるのか?」

電話口に向けて、紫苑がむっとした表情をして冷徹な声音でそう言い放つ。

普段、穏やかな喋り方しかしない紫苑の豹変に、耳を疑う。

熟睡している紫苑を起こした時のアレに似ている。アレは本当に怖いの。

しばらく無言で相手の話を聞いているらしい彼の額に、青筋が浮かぶ。

「あ？ふざけんな！この礼、きっちりしてやるから、首洗って待ってろ！くそったれ！」

紫苑はドスの聞いた声でそう言い放ち、電話を切った。

紫苑の悪態に、恐怖で心臓がドキドキする。

怒りをたたえた紫苑の表情は、逃げ出したいくらい怖い。

「ど、どうしたの？」
「吉良の耳が腐るようなこと言いやがった…」
怒りが収まらないのか、紫苑の口調は荒っぽいまま。
「健斗の奴、いつか殴り倒してやる」
「し、紫苑…お、落ち着いて…暴力は…駄目だから、ね？」
目の前に院長がいたら、殴りかかっているのではないかと思うくらい、紫苑は苛々していた。
だから宥めるつもりでそういったのだけど、紫苑は不機嫌そうな顔で私を見る。
鋭く睨まれ、思わず後ろに下がる。
でもすぐ後ろにソファがあって動けない。
「なに？吉良は、健斗の味方するわけ？」
「ち、違うわ…しょ、傷害沙汰になったら、紫苑の仕事が…」
「仕事なんて今は関係ない」
身を乗り出すように、紫苑が私に近づいてくる。
間近に迫った紫苑に、私は身を竦めて息をのむ。
「それとも、俺を捨てて健斗に乗り換える？」
私をじっと覗き込む灰青色の瞳の奥に、焦げ付いた怒りがゆらゆ

ら見える。
慌てて首を何度も横に振る。
「か、かかかかかかえません！し、紫苑が良いんです…」
肉食獣に狙われて食べられる寸前の、小動物の気持ちがわかる気がする。目の前の彼が怖すぎて思わずきつく目を閉じる。
「…吉良、俺の知らない所でもう泣かないで」
間近で嘆願するように呟く声が聞こえ、恐る恐る目を開けば、目の前の彼に凶暴性など無くて。代わりに居るのは自分に自信がなさそうな顔をした紫苑。
その落差に、私はどうしたらいいかわからない。
「喧嘩するより、口をきかないより、知らない所で泣かれるのが一番こたえる…」
「紫苑…」
「…昨日みたいに我慢せず怒って、もっと俺にわがまま言ってよ。健斗へ話すように、ちゃんと、思っていること俺にも言って」
私の頬に涙で張り付いた髪を、紫苑が指先で解いてくれる。
「でないと、吉良は俺より健斗のほうが好きなのかって、不安でたまらない」
言い辛そうに呟いて、紫苑は視線を逸らして伏せた。
遠慮しているわけではないけれど、紫苑のほうが年下だから、言いにくいことがあるのは事実で。
紫苑の反応が怖くて言えないことも、たくさんある。気付くと、

言いたいことを飲みこんでいる自分がいる。
よくよく考えると、紫苑に自分の事をあまり言った事がない気がする。

「ごめんなさい」
「違う。謝らないで…こんなの俺のわがままだよ…俺は全然、彼氏らしいこともできない、我慢ばっかり吉良にさせて。好き勝手で…いつも傍にいて吉良の相談に乗れる健人に嫉妬して…吉良を困らせているだけだ」

紫苑は戸惑いがちに、私を見た。
その表情には歯痒さと不安ばかりがあって、いつもの余裕なんて全然なくて。まるで捨てられてしまいそうな子供みたいな顔をしている。
付き合う前、唯我独尊なアタックをしてきた時も、紫苑は時々、この表情を見せる事があった。
その時の状況はまちまちだったけど、こうなるのは私が本気で怒って紫苑の行動を拒絶した時。『見限られる』ことを畏れている時。
今回はむっとはしたけど、付き合う前みたいな破天荒な事をされてマジギレになった訳じゃない…。

“あぁ、そっか…私、紫苑をずっと不安にさせていたんだ…”

仕事を頑張っている紫苑の邪魔をしたくなくて、何時も「大丈夫」とか、「平気」とか言っていたけど…もし私が彼の立場で、自分と同じ事を紫苑に言われたら、悲しいかも。
自分が居なくても全然平気ですみたいな顔をされたら、本当に愛されているか不安。
だから、紫苑はわがままを言って欲しかったんだ。素直な気持ちが知りたいから。自分が必要とされている、そう感じたかったんだ

…。

私が紫苑のわがままを許してしまうのは、率直な彼の言葉に必要とされているって実感できるから。

「紫苑…私ね、貴方が居なかったら、死ぬまで誰も好きになれなかったと思うの…」

言えることは、ちゃんと言おう。

紫苑のように。

言わないと、思いは伝わらない。

伝わらない思いは、相手を不安にばかりさせてしまうから。

「身近な人に裏切られて…誰かを好きになるのが…すごく怖かったの…」

言葉にしようとすると、心臓が握りしめられたように苦しくなって、息ができない。

過呼吸になってしまいそうな不安な感情の昂りを抑えるように、自分の両手をきつく握りしめる。

「…ごめん…まだ、気持ちの整理がつかないから…今は上手に話せないけど…」

ありのままを告げるのは…まだ苦しくて。

長い沈黙を作って、それだけ告げて、また言葉に詰まってしまう。

もしかしたら、紫苑との関係に溝が出来てしまうかもしれない。

そう思うと怖くて、ガタガタと手が震える。

院長はまだ時期が来るまで黙っていればいいと言ったけれど、その適切な時期なんて私にはわからない。

時間が経てば経つほど、紫苑が好きになればなるほど、自分はどんどん苦しくなって耐えられなくなりそうで。

今だって、黙っている事が紫苑を騙しているようで、申し訳なくて辛くて苦しい。

「…何年か前に…ものすごい借金が出来て…死んじゃいたいって思うくらい、精神的にまいってた時期があったの」

当時を思い返すだけでも、全身が震えてくる。
喉で息が詰まったようになって、声もか細く震えてうまく出ない。
でも、出来るだけ取り乱さないように、私は紫苑の目を見て話を続けた。

「そのせいで一時期…人に深く関われなくなったの…桜の花を見ると…そんな嫌な出来事も、死んでしまいたかった頃の自分も思い出しちゃうの…」

紫苑は何も言わずに、私の話に耳を傾けている。

「院長と美菜先生は、その苦しかった時に、いろいろ助けてくれた恩人だから…そういう意味では、特別な人たちなの」
「もう、いいよ。言わなくて」
「良くない…私は借金返すために、キャバクラで働いたし…両親が死んでも、遺骨も引き取らなかった酷い女なの…紫苑が思うほど、私はきっと綺麗な人間じゃない…だから…」

自分でも声が震えているのがわかる。
爪が食い込みそうなほど、自分の手をきつく握っていないと、自分が紫苑から逃げだしてしまいそうだった。
紫苑は黙っている。
先の言葉が出なくなってしまった私を、じっと見つめたまま。
その時間が、長いのか短いのか、全然わからない。
酷く息苦しくて、紫苑がどう思っているのか、知るのが怖い。
場違いに響いてくる、テレビからの笑い声が静かな部屋に響く。

「…ねえ、吉良」

紫苑はゆっくりと目を閉じるように瞬きをしながら、小さく息を

つく。

「だから、俺に相応しくないとか…言うつもりじゃないよね？」

伸びて来た彼の手に、反射的に体がびくりと震える。

一瞬、紫苑の手が止まったけど、そのまま、きつく握られた私の手の上に自分の手を彼は重ねた。

力のこもり過ぎた私の指を一つずつ丁寧に離してくれる。うっ血して真っ赤になった手を何度も優しく撫でてくれる。

「そんな話で俺が吉良の事、嫌いになるとでも思ってる？俺を見縊らないでよ？」

「でも」

「吉良」

きつく名を呼ばれて、私は身が竦む。

紫苑はアッシュブルーの双眸で、真摯に私を見据える。

「キャバクラで働いたことも、親の遺骨を引き取らなかったことも、そうせざるを得なかった理由があるからだろ？」

静かに、ゆっくりと紫苑はそう言ってくれる。

「倹約家で、贅沢も嫌いで、自分のことより人の世話ばっかりやくような吉良を見ていれば、やむにやまれない事情があるってわかるよ」

優しくそう諭すように語りかけてくれる紫苑に、止まっていた涙があふれてくる。

どうして紫苑は、そんなに優しいのだろう。

「…辛い事を教えてくれてありがとう、吉良。もう無理して言わなくて良いよ」

彼の大きくて温かいその掌の温もりが、言葉と共に私の心にしみこむ。

止まっていた涙がまた溢れてしまう。

紫苑は何度も私の頬を指の腹で撫でて、涙を拭ってくれる。

「そんなことで嫌いになるなら、初めから好きになったりしないよ」

「…呆れたり…嫌にならないの…？」

「どうして？いい所も悪い所も全部、吉良だろ？それとも吉良は、俺に同じような過去があったら、すぐに嫌いになって逃げるの？」

そんな訳ない。だから慌てて首を振る。驚いたせいで、涙もぴたりと止まってしまう。

紫苑は、そんな私を見て苦笑する。

「付き合う前に俺が告白した時は、吉良、思いっきり『大っ嫌い』って言ったの覚えてる？」

言われて、不意に思い出す。

そういえば、私そんなことを言っていた気がする。

好きになるなんて思えないくらい、あの当時は紫苑が大嫌いだった。

Ａｐｒｉｌ　ｆｏｏｌに嘘の花束を　７

初めて好きだって言われた時は、正直、その言葉を信用していなかった。

当時の彼が遊び慣れしているのは、何となく言葉の端々に現れていたし、女を口説くのが挨拶みたいな榊一族の人間の言葉を、いちいち真に受けられるほど若くもなかった。

そもそも、私を口説くなんて冗談半分か、暇つぶしの為だって思っていたし。

でも毎日毎日、『愛してる』、『好きだ』のメールに電話、高価な花束のプレゼント攻撃がセットで来るようになった時には、嫌がらせかと卒倒しそうだった。

それでなくても当時、紫苑には私の電話番号も、メールアドレスも教えた覚えはないのに…。結局、情報を横流ししていたのは院長で、院長は『おもしれぇから、そのまま付き合え』とか、意味不明なことを言い出す始末。

困った挙句、美菜先生経由で院長を嗜めてもらって、紫苑の行動を止めてもらった。

静かになったと安心した矢先に、紫苑は勝手に人のアパートを引き払って、自分のマンションに住まわせる暴挙に出た。

ずっと私の気持ちなんて無視で、ずっと振り回されていた。もう、その頃には怒る気力もなくなるぐらい性質が悪かった。

両親の事があって、自分の中に踏み込まれたくなかったのに、無神経にずかずか踏み込んでくる紫苑が、大っ嫌いだったのに…今みたいに、本当に辛い時に私の心を拾ってくれる彼が、いつの間にか

好きになってた。

「…覚えてる……あの頃の紫苑、すごく嫌な人だったもの」

「普通に口説いたって、吉良は全然、気にも留めなかっただろ？だから、形振りなんて構っていられなかった…」

「無茶しすぎよ？」

「分かってる。完全に拒絶されるか、俺の事を好きになってもらえるか、どちらしかないと思った…だから、吉良に見て知ってもらいたかったんだ。ありのままの俺を」

紫苑は、自嘲気味に笑って見せた。

遠慮なく私の心に踏み込んで、いつの間にかそこに住み着いていた紫苑。

彼がただ強引で身勝手なだけなら、絶対に好きにはならなかった。

ただ優しく節度のある人なら、私の心は死ぬまで紫苑に向かなかった。

彼だから、きっと好きになった。

一年も経っていないのに、それがもう何年も前のことみたいに懐かしい。

「無理してくれてありがとう。貴方を好きになって幸せよ」

本当に、心からそう思う。

貴方を好きになる幸せをくれて…貴方に愛される幸せを教えてくれて…ありがとうって。

紫苑は嬉しそうな、困ったような複雑な顔をした。

「恰好悪い所しか見せてない、満足に連絡も取れない、恋人らしいことなんて全然できない俺だけど、それでもいい？」

「紫苑だからいいの。他の人じゃ駄目なの」

整い過ぎた綺麗な紫苑の顔が、驚いたような表情に変わる。
わずかに、彼の頬が朱に染まる。

“あ、ちょっと照れてる”

彼がそんな顔をするのは珍しくて、意外に純粋な反応をしてくれる所に、胸が甘く締め付けられる。

「…今日の吉良、なんだか素直だね？」
「口にして、言いたかったの」
「これからは、文句も遠慮なく言って。我慢なんてしないで」
「…嫌いにならない？」
「ならないよ。俺、吉良が滅茶苦茶わがままになっても、愛し続ける自信あるから」

その言葉に、自然と笑みが零れる。

「そんなこと言って、私のわがままが過ぎて困っても、知らないわよ？」
「吉良が泣かないなら、それでいい」

ようやく紫苑は安堵したように微笑む。
彼の言葉に、心が軽くなる。
どちらからともなく重ねあった唇は、優しく幾度と離れては触れる。
が、不意に口付けが止まり、紫苑が私を見下ろす。

「…どうしたの？」
「吉良…ご飯先に食べて良い？腹減りすぎて、このまま最後まで吉

良を食べられない…」

紫苑が真面目な顔をして、突然、そう言う。
どうしてそういうことを、紫苑は平気で言えてしまうのだろう。
ちょっと前まで、胸にじんとくるような言葉を紡いだ同じ口で。
聞いたこちらが、とても気恥ずかしくなる。

「わ、私を食べなくても、いいの！ご飯を食べて、お風呂に入って、大人しく寝なさい！」

動揺して、お母さんみたいなことを言ってしまった私を見て、紫苑は嬉しそうに笑う。
それに文句を言おうと思ったけど、『ぐぅっ』と、私のお腹が鳴る。

「もしかして、俺の帰りまでご飯、待っていてくれたの？」

タイミングの悪さに、恥ずかしすぎて顔が熱くなり、下にうつむきながら頷く。

「実は俺も、朝から何も食べてなくてさ…」
「何も食べてなかったの？」

驚いて顔を上げれば、紫苑が穏やかに笑っていた。

「喧嘩して、食べる気分じゃなかったから」
「じゃあ、スペシャルプレートは胃もたれしちゃうかも…」

スペシャルプレートの言葉に、紫苑の目にきらりと光りが走る。

「プリンも作ってくれた？」
「紫苑の好きなカスタードプリンにしたわ」
「マジで？早く食べよ！」

子供みたいにウキウキしだした紫苑に、手を掴まれ引っ張られる。
私は彼の手を握り返し、紫苑と共に遅い晩御飯を食べに向かう。

その温かい手を、いつまでも離さずにいられますようにと、祈りながら。

ＥＮＤ

貴女が隣にいる幸せを　1（前書き）

「Ａｐｒｉｌ　ｆｏｏｌに嘘の花束を」の続きで、紫苑視点になります。

貴女が隣にいる幸せを　1

ランプシェードが淡い橙の光を放ち、寝室を染める。
部屋に広がるラベンダーとクラリセージの仄かな香りが、心地好い。

“うわっ、速攻で寝てるし…”

風呂から上がり寝室に入った瞬間、視界に入った吉良にがっくりとうなだれる。
日付の変わったベッドの上で、吉良はすやすやと眠っている。
俺が風呂に入っている間に、吉良は一人で勝手に眠りに落ちてしまったらしい。
最初の頃、吉良は俺が眠ると他のベッドに逃げていたけど、最近はそれが嘘のように俺より先に彼女は寝てしまう。
元から吉良は寝つきがとても良いのに、同棲当初は俺と一緒に寝るのが恥ずかしくて眠るにも眠れなかったらしい。その所為でしばらく寝不足だったと、ようやく一緒に寝てくれるようになってから、吉良は教えてくれた。
ようやく気を許してくれるようになったとも取れるし、無防備な彼女の寝顔を、こうして見るのは悪くない。
俺はベッドに腰を掛け、吉良の紅茶色の髪を梳く。
さらさらとして、短く癖のない髪はするりと俺の指をすり抜けていく。

“幸せそうな顔して…これじゃあ、起こせないな”

思わずため息が出る。

吉良は、俺の想定外のことばかりする。
俺の目論見を、悉く見抜いてかわすかのように。
俺は、ガウンのポケットに入れていた小さな箱を取り出す。
それは指輪のケース。
開けばそこには、ティファニーのリングがある。
ダイアモンドとピンクサファイアをあしらった、プラチナの指輪。
指でつまむように指輪を取り出して、掌に置いてそれを眺める。
ずいぶん前に、寝ている吉良から指輪のサイズをこっそり測って、発注したものだ。

“何やってんだろ、俺”

たかが指輪一つ贈ることに、こんなにも苦戦するなんて、冗談にもならない。
いや…初めてだから、勝手が分からないのかもしれない。
自分から誰かを真摯に愛していくことも、ずっと傍に居てほしいと願ったことも、初めてだから。
吉良を好きになって、自分が本当に誰かを好きになったことがなかったのだと、俺は思い知った。
プレイボーイだとマスコミが騒ぎ立て、週刊誌のゴシップ記事の常連になれる程度には、話題性のある芸能界関連の女と何人も付き合ってきた。
それでも、己のテリトリーでもある家に入れた事はない。まして、一緒に暮らしたいと思う相手も、指輪を渡したいと思う相手もいなかった。
自分の心が揺らいで不安になるほど好きだという感情も、誰にも芽生えなかった。
上っ面だけの恋愛を、ゲームのように繰り返していたから。
互いに割り切った関係として付き合っても、本気になる相手も居たから短い期間しか付き合わない。俺の嫉妬を煽ろうと他の男と戯

れに付き合った相手もいたが、俺には嫌悪の対象でしかなかった。
それを理由に簡単に切り捨てて別れた。
失って怖いと思う女なんて、何処にもいなかった。吉良に出会うままでは。
だからこそ怖いもの知らずで、奔放で身勝手な生き方ができた。
今は、吉良にそんなろくでもない恋愛をしてきた自分を吉良に知られてしまうのも怖い。
吉良に嫌われる事が酷く怖い。

“まさか吉良を泣かせるなんて…”

泣かせるつもりなんて、一切なかった。
ただ、まとまった休みが久しぶりに取れたから、いつも待たせてばかりの吉良と、一緒にどこかに出掛けたかっただけ。
それに、この指輪を渡したかった。
でも、吉良に休みを取って欲しいとは言えなかった。
彼女は普通の社会人で、好き勝手に休みが取れるわけではない。
いくら吉良の雇用主が俺の従兄弟でも、無理を通せば職場での立場がなくなる。
看護師として生きる事を生きがいにする彼女の大切なライフワークを奪う事だけは、したくなかった。
だから吉良の負担にならず、人の目をあまり気にしないでいける場所を探した。
結果、夜の花見に誘ったのだけど…それでまさか喧嘩になるとは思わなかった。
桜が大嫌いだなんて、思いもしなかった。
日本人は、美しい桜の花が好きなものだとばかり思っていた。
桜が嫌いなんて言うのは、ひねくれた従兄弟の健斗だけじゃなかった…。

いつもなら、文句を言いながらも俺のわがままを聞いてくれる吉良が、いつになく自分の主張を曲げなかった。

それをおかしいと思いながらも、俺は折れてくれない吉良に、苛立ちを抑えられなかった。彼女は俺の言う事を必ず聞いてくれるという、過剰な自惚れがあったから、彼女の反発が許せないと思った。

あまつさえ、仕事のストレスを八つ当たりまでして。

吉良が怒るのも当たり前だ。

俺の仕事に関する心配をしてくれた彼女の言い分はもっともで、吉良は盲目に俺を甘やかすような自分の無い女でも無い。

生真面目で、駄目な事は駄目だと諭し、一度決めた事を容易に曲げない。そんな頑固な面もしっかり持っているのに、普段は俺の願いを殆ど飲んでくれるから、すっかり失念していた。

俺のしたことは、自分のわがままな希望を押し付けて断られ、それにキレて不貞腐れただけ。

自分本位なガキそのもの。

せめて、彼女が桜の花が好きかどうか、好みのリサーチはするべきだった。

一人で考えて、朝には冷静になって謝ろうとしたけど、吉良は俺を避けるように仕事に出掛けてしまった。おまけに、何時もなら作ってくれるはずの朝食もない。

怒ったままの吉良に、言い様のないショックを受けてしばらくその場から動けなかった。

しかも狙い済ましたように、エイプリルフールで、健斗から喧嘩に絡んだ洒落にならない嘘をつかれ、騙される破目になった。

普段なら騙されるはずもない嘘なのに。

吉良の心が離れたと思った瞬間、魂を引き千切られるほど、苦しかった。

柄にもなく動揺して、何も考えられなくて、何も手につかない。

彼女と面と向かって話をする覚悟ができるまでに、何時間もかかった。

やっと出来た覚悟を抱えて戻ってみれば、吉良が泣いていた。

思い出すだけで、胸が痛い。

花見を拒否された事も、喧嘩したことも、どうだって良かった。

ただ、吉良を泣かせた罪悪感に打ちのめされた。

“俺、吉良のことになると、どうしてうまく出来ないんだろ…”

自分が自分でなくなるほど、好きだと思える女性。

彼女に、一番言いたくなかったであろう過去の事まで喋らせて。

『吉良を花見に誘っただと?…お前は救いようのない莫迦だな。あいつは、桜の花がこの世で一番嫌いなんだぞ。人の古傷を無造作に抉るな』

怒った吉良の事が気になって、彼女と付き合いの長い健斗に話をした時、従兄弟は珍しく本気で呆れて怒っていた。あの皮肉屋で毒舌の癖に、怒りだけは内側に秘める男が。

健斗の態度と言葉の意味が、今なら痛いほどわかる。

青ざめた顔で泣きそうになりながら、必死に桜が嫌いな理由を喋る吉良の姿に、彼女の心の傷が深い上に、今も全く癒されていないと思い知らされた。

なのに、吉良は笑って俺を許してくれた。俺が良いと、言ってくれた。

俺は、彼女に出会っていなければ眠ることを忘れたままで、愛する事も拒絶したままだっただろう。

俳優上坂伊織でも、榊の人間でもなく、紫苑という、ただの俺を見て必要として、愛してくれる愛しい女性。
もう手放すなんて、考えられないくらい俺は彼女に依存している。
吉良が不意に寝返りを打つ。
布団から出た左手が、考え事をしていた俺の手に当たる。
まだ手の甲には、爪が食い込んだ跡が赤くうっすらと残っている。
ゆっくりと目を開いた吉良は、とろんとした目で、俺を見上げた。

「…紫苑？」

寝ぼけているのか、少し、舌足らずな発音で俺を呼ぶ。
俺はそんな彼女の左手を、そっと取る。
本当は、夜桜を見ながら渡そうと思っていたリングを、吉良の左手の薬指にはめる。
事前に測っただけあって、ぴったりと吉良の指に納まる。
もっと、気の聞いた場所で演出を凝らして贈りたかったけど、正直、そんな心の余裕はもうない。
俺は吉良の傍に何時も居られない。それに、吉良の傍には危険な男が居る。
余計に不安なんだ。
だから、見える形で俺という存在を見せ付けたかった。
自己顕示欲だろうと、嫉妬だろうと、何と言われてもいい。
普通の恋人のようにデートをして吉良を楽しませる事もできない。
彼女の友人に恋人である俺の話を自由にすることさえ我慢させている。
なのに俺は、吉良に望んでばかりいる。
“あの女のように、他の男を選ばないで”
突然、俺の前から消えてしまわないでくれ。

息子の容姿だけを愛して、夫より金を愛し、自由を愛して出て行った俺の母親のように。

病気がちだった俺を捨てて、消えてしまった母親。

俺の母は容姿だけは極上、性格は他に類を見ないほど底辺を這う女性だった。

何処までも『雌』としての本能のまま生き続けていた、あの女の影がいつもちらついてしまう。

吉良を好きになればなるほど、不安になる。

彼女は俺の母親とは、全く別の個人だと分かっている。

それでも、幼少期に手酷くあの女に拒絶された過去が、女という存在に猜疑を抱かせる。

吉良が優しさを俺に差し出してくれる度、その優しさに、いつか掌を返したように裏切られてしまうのではないかと、怖くなる。

俺は人を愛することも、人に愛されることも不慣れで、どうしたらいいのか、いつも手探りばかり。

人の想いが目に見えたら、どれだけいいだろうと思う。
想いは口にしないと分からない。
態度だけでは、心細い。
吉良は感情表現が豊かなのに、肝心な自分の気持ちは表にしないで隠してしまう。
特に不満とか、淋しさはほとんど口にしない。
我慢しているのかもしれないけど、それが余計に不安になる。
吉良は、俺のこと何処まで好きなのか。
俺に無理して合わせているだけではないのか。
自分に自信がなくて、吉良を名前で呼ぶことさえ躊躇われて。
もっと、吉良の心が知りたい。話してほしい。

「…指輪？」

吉良が左手を自分の顔の上にかざしながら、呟いた。
まだ眠そうな目で、指輪をじっと眺める。

「可愛くて綺麗ねぇ…紫苑に指輪、貰っちゃった。しかも左手薬指」

不意に吉良は小さく笑って、自分の左手をそっと右手で包むように握る。

「目が覚めても、消えないようにしないと」
「喜んでくれるの？」

俺に視線を向けた吉良は、はにかむように笑う。

「当たり前じゃない」
「どうして？」
「誰でもない貴方がくれたから。大事にするわ」

その言葉に、俺の頬は緩む。
どうして彼女は、どうしようもなく臆病な俺の心を、容易に救い上げてくれるのだろう。
こんなもので吉良が喜んでくれるのなら、幾らだって贈るのに、吉良は俺に贅沢を求めてはくれない。
俺をじっと見ていた吉良は、不意に俺の頬に手を伸ばした。細くやわらかい指で、俺の頬をなぞり滑るように撫でる。

「…夢でも嬉しい。ありがとう」

どうやら吉良は、これを夢だと思ってるようだけど、今はそれでもいい。
普段なら、きっと高価だからと遠慮して絶対に受け取らない。こんなに素直に喜んでくれる事はなかったはずだ。
それに目覚めれば、これが現実だと気付いてくれるから。

「吉良…俺も…吉良に黙っていることがあるんだ……」

ずっと、吉良に言い出せずにいる俺の家族。
人生で初めて好きになって、一番最初に俺を裏切り捨てた女にして、俺が最も嫌悪する相手でもある母親の事。
芸能活動を反対されて喧嘩別れのまま絶縁状態になった父親。吉良の看護師としての生き方に大きく関与するかもしれない相手。
日本有数の医療法人『聖心会』会長にして、俺の父親でもあるその男は、医療界に於いて絶大な支配力と影響力をもっている。一看

護師の処遇など、容易く決められるほどに。
失踪した母親はともかく、俺を疎む父親から今後、吉良に何かしら横やりが入る可能性がある。本来なら、早く彼女に伝えなければならない事なのに、医療界の首領のような親父に委縮して俺の傍から吉良が離れていくのではないかと思うと、口に出せない。
長い沈黙が続く間、吉良は俺を黙って見つめる。俺が言い出すのを静かに待ちながら。
でも結局は言い出せなくて、俺は彼女から視線を逸らしてしまった。

「ごめん…やっぱ、まだ言えそうにない…」

彼女には、言わせてしまった癖に。我ながら、自分は卑怯で臆病者だ。

「…無理しないで。紫苑が自然に言えるようになったら教えて」

少し視線を吉良に向ければ、吉良は困ったように笑う。

「…紫苑が困った顔は苦手なの。悲しくなるから」

俺はそっと、体を吉良に寄せる。
彼女の肩口に顔を埋めれば、仄かにラベンダーと石鹸の仄かな匂いが鼻梁を突く。
優しくて心地良い感覚を与えてくれるその香りは、吉良の存在そのまま。

「吉良は、俺を甘やかしすぎだよ」
「そう？」
「そうだよ。文句くらい言えば良いのに」

俺の髪を、吉良がそっと梳くように撫でる。
「文句ねぇ…一つだけ、あるかしら」
「何？」
そっと顔を上げ、吉良の顔を覗き込めば、吉良は首をすくめる。
「何時になったら、あげはって、呼んでくれるの？」
そこをあえてピンポイントで押えた吉良に、俺は降伏したい気分だった。
なんだか、彼女には見透かされているみたいだ。
ずっと、『あげは』って名前で呼びたかった事。
しかも、おねだりされているみたいで、ちょっと嬉しい。
「それ、文句っていうより、おねだりだよね？」
「もう、夢の中でも、紫苑は意地悪ね。自分は、私にむりやり名前を呼ばせたのに…私だけ呼ばれないのは不公平だわ」
吉良は抗議するように俺の頭を、軽くポンポンとたたく。
「吉良の目が覚めたら、呼ぶよ」
「ケチ」
拗ねたように言う吉良が可愛くて、俺は思わず噴き出して笑う。
俺を心から笑わせてくれる吉良が愛しくて、俺は吉良の体を抱きしめる。
顔だけの俳優だなんて、言わせない。
吉良がテレビから視線を逃せないほど、うまい演技の出来る役者

になるから。
離れていても、吉良がいつも俺に心を奪われてくれる程、魅力的になるから。
今日も明日も、その先も、吉良が俺に毎日惚れたくなる男になるから。
ずっと、俺だけ見ていて？

「吉良、好きだよ。吉良の全部」

愛しい人。
貴女の傍に居られる幸せを、今日も明日もその先も得られるのなら、俺はどんな努力も厭わない。
ずっと、ずっと傍にいて。

ＥＮＤ

貴女が隣にいる幸せを　3（後書き）

閲覧・お気に入り登録・評価ありがとうございます。
甘さ控えめなお話が続きましたが、次回は少し甘いお話になります。
どうぞ、これからもよしなに。

蜘蛛の糸に絡まれて　1

あるはずの温もりと香りが感じられなくて、急速に眠りから引きずり戻される。

間接照明の淡く穏やかな明かりに映し出される、閑散とした俺の隣側。

居るはずの人は其処には居ない。

慌てて俺は体を起こす。

彼女が居たはずの場所を触れても、既に温もりもない。

一人では、異様な広さを感じるキングサイズのベッド。

忘れ始めていた孤独への恐怖感が触りと俺の胸を撫であげ、指先が一気に冷えて震える。

「っ…」

一人で眠る事がどうしようもなく怖い。発狂しそうになる。

この年で一人寝すら出来ないのは、薬品くさい白い牢獄の様な部屋で、一人いつも病気の苦しみと向かい合っていた子供の頃の恐怖を思い出すから。

ゆっくりと深呼吸を繰り返せば、部屋に残るラベンダーの香りが、彼女を想像させて気分を落ちつけてくれる。

指の震えが止まってから、ゆっくりと時計に視線を向ける。

時計の針は、午前三時を少し回ったところ。

ベッドに入ったのは、確か午前零時になるかどうか。

少しは眠れたけれど、眠っている間に吉良の姿が消えた。

「…またか」

今回で三度目だ。吉良が俺のベッドから抜け出してしまうのは。

俺は掌で額を抑える。

無意識に零れ出るため息は、受けた精神的ダメージが思った以上に大きいからだ。

彼女は自分の部屋に、また戻っているのだろう。

強引に俺の家に彼女を連れて来て、ようやく口説き落として、晴れて恋人になれたと言うのに、俺と吉良はまだ肌すら重ねてはいない。

それどころか、キスもままならない。

少なくとも、俺は小学生のような子供でもなければ、女性に奥手なチェリーボーイでもない。世間的には、女性関係のゴシップ記事を幾度となく週刊誌の表紙に飾る様な、女遊びの激しい男だ。

吉良に惚れるまでは。

彼女に惚れてから、他の女になんて遊びでも目が向かない。

少しでも長く彼女と一緒に居たいのに、俺の仕事がそれを許さない。

一応、俺は『イケメン』で名の通った俳優だから。数年前に役が当たって、年々、仕事の数も増えてプライベートの時間もずいぶん減った。

役者として生きる覚悟をしてこの業界に入ったのだから、仕事が順風なのは良い事だと思う。

だが、それと引き換えに、吉良との時間が少ないのだけが難点だ。

同じベッドで眠ることさえ、俺の仕事が不規則過ぎてほとんどないのに、たまの逢瀬でも、吉良はどうしてか俺の腕から逃げていく。

俺が俳優、上坂伊織だと知った日から、吉良は起きている時すら俺によそよそしい。

女遊びが激しいイメージがついている俺を、快く思っていないのだろうか。

吉良は真面目な性格だから。
それとも、俺にまだ心を開いてないのか。
そう思うと、気が滅入る。
これまでだって、正直、何度か強引に吉良を抱いてしまいたいと思った。
だけど、俺の腕からエスケープしてしまう吉良に無理強いをしたくもない。
惚れた女には、簡単に手が出せない自分がもどかしい。

“せめて、おとなしく隣で眠ってくれたら…”

俺は体を起こし、吉良用の部屋へ彼女を迎えに行くことにした。

蜘蛛の糸に絡まれて　2

§

寝室から出、吉良の部屋に行こうと、通過点になるリビングへ向かう廊下に出た。
リビングの方へ視線を向ければ、リビングが少し明るく、時折、光が色を変えて点滅しているのが、扉にはめられたガラス越しにわかる。
テレビがついていると、すぐに察しがついた。
“俺、消し忘れたか？”
覚えがなくて、リビングに足を進めた。
半開きのリビングの扉から、小さな声が漏れ聞こえる。
そっと扉を開いて、部屋の中を覗き見る。
二十畳ほどのリビングで、ソファに座っている吉良の後ろ姿が見える。
吉良の正面にあるテレビには、見覚えのある映像が流れている。
“あれは去年、俺が出演した映画？”
もう、エンディングに近い所だ。
確かあれは、病魔に侵された恋人を支え、最後まで看取る役どころだ。
原作は、発行部数をかなり伸ばした恋愛小説。

俺としては、演じた役の男が出来過ぎていて、甘過ぎる話しであまり好きじゃない。
けど、この映画の興行収入は去年公開された映画の中で第三位。
俺の代表作のひとつになったものだ。
でも、どうして吉良が見ているのだろう。
こんな夜中に、こっそりと。
俺は吉良のそばに歩み寄って、背後からそっと吉良の横顔を見る。
ワンピースタイプのナイトウエア姿の彼女はショールを羽織って、映画を食い入るように見つめている。
真剣に見つめている吉良の眉根が、僅かに歪んでいる。
今映っている映像シーンは、泣きどころと言われる場所になるけれど、吉良は涙を堪えている感じではない。どちらかと言えば、険しい顔をしている。
…何故だ？
何か不機嫌になるような演出の拙さでもあったのか？
それとも演技か…主演の女の子は女優が本職ではなく、アイドルタレントだったから、お世辞にも演技は上手いとは言い難かったが。
もしくは俺の演技に何か気に入らない所があるのか？
吉良は俺が俳優であることすら知らない程の、芸能界音痴。芸能人のほとんどがわからない上に、俺の出ているドラマも職場の人に言われて一緒に数回見た程度だと言っていた。
じっくりと見て、俺の演技が嘘くさいとかそんな事を考えていたら。正直、ショックで数日は立ち直れそうもないのだけれど。
どうしようか。
ＤＶＤに夢中で、吉良は近付いた俺の事など、まったく気付いてはいないようだった。
そっと、知らないふりをして戻るか。

「…はぁ…」

気落ちした様な溜め息を漏らした吉良に、俺は思わず反応してしまった。

「何で溜め息？」

「わっ！？」

吉良は飛び上がるように身を跳ね、後ろにいる俺に振り返る。

俺も吉良の声に驚いて、思わず身を後ろに僅かに引いてしまった。

俺の姿を見て、吉良は困ったような顔をする。

「い、いつから…居たの？」

「少し前」

吉良はバツの悪そうな顔をして、苦笑いする。

「ごめん、起しちゃった？ヘッドフォンがなかったから、音小さくしたんだけど」

「勝手に目が覚めただけだから。音は気にならなかったよ」

俺はソファの上で正座して座る吉良の隣に行き、腰を下ろす。

吉良は俺が隣に来る前に、自分の横に積んで置いてあった、幾つかのＤＶＤのケースを慌てて抱える。

「何で隠したの？」

俺は吉良のストールをめくり、腕の中に抱えられたものに手をのばす。

「あ、駄目っ」

吉良は身をよじって、それから逃れようとする。
俺は吉良の腰に腕をまわし、逃げられないように体を引き寄せる。
そして俺と吉良の間を阻むようにある、彼女の腕に大事そうに抱えられたものを取り上げる。

「あぁ…」
まるで、見つかってはいけない物を横取りされた様な声を上げた吉良は、困ったように視線を泳がせる。
ＤＶＤを見れば、そのタイトルはどれも俺が出演しているものだった。

蜘蛛の糸に絡まれて　２（後書き）

累計ＰＶが２００００を超えておりました。お気に入り登録も４０件を超え!?
自分でも予想もしない数字に、心臓バクバクです。
閲覧、本当にありがとうございます。
重ねて、ランキングサイトへのクリックもありがとうございます！

今後ともよしなに。

「…どうしたの、このＤＶＤ。買ったの？」
「あ、あの、ち、近い…」

視線を逸らす彼女を覗きこめば、吉良は頬を赤くして慌てて俺を引き離そうとする。
未だにこの程度で照れる初心な年上彼女が可愛すぎて、つい意地悪をしたくなる。
ＤＶＤを横へやり、俯いた吉良の顎を捕えて上に向け、耳元に唇を寄せる。

「欲しいって言ってくれたら、いくらだってあげるのに」

吉良の苦手な低音で囁けば、吉良はびくりと身を跳ねた彼女の体が縮こまる。
軽く吉良の耳朶に口づけて少し顔を離せば、吉良が耳を押さえて恨めしそうに俺をちらりと見ている。真っ赤な顔をして。

「うぅ…な、何で、耳元で言うのよっ…そんなエロい声と言い方で」
「本人を置き去りにして、ＤＶＤに見蕩れる吉良が悪い。それで、これはどうしたの？」

冷静に考えれば、節約家の吉良が彼女にとっては『高額』になる量のＤＶＤを買うなんて事はまずあり得ない。
だからと言って、レンタル品でもない。真新しい新品そのものだ。

「…少し前に、院長がくれたの」
「健斗が？」
なんで従兄弟の健斗が、こんなものを持っているのか、理解に苦しんだ。
「私、芸能界の事も詳しくないし、何年もドラマとか映画も見てなかったから…紫苑が出ている映画とかドラマとか、全然わからなくて…、仕事が俳優さんって言われても、まだなんだかしっくりこなくて…」
恥ずかしそうに告げる吉良は、視線を下へ向ける。
そう言えば、吉良を俺の家に連れてきた時、引越しの荷物の中にはテレビもＤＶＤの類も一切なかった。
今時、テレビも見ないなんてどんな生活をしていたんだろうって、その時はとても不思議でならなかったな。
「紫苑の仕事が役者さんだって聞いた日に、絢子さんに‘上坂伊織’のお勧めＤＶＤを聞いてみたの」
この絢子さんと言うのは、吉良の職場の医療事務員。俺のフリークで、折に触れて吉良に俺の良さを懇懇と説いてくれていると、健斗が言っていた。
絢子さんと言う人は、吉良の職場の仲間の中で、直接会ってはいけないハイリスキーな要注意人物だけど、俺の良さを伝えてくれる人だから、俺の中では好印象人物だ。
「とりあえずレンタルＤＶＤでも借りようかなって思ったんだけど、院長がその日の帰りに紫苑が出演しているＤＶＤを全部くれたの」
「全部？」

「映画だけじゃなくて、ドラマの分も…私の部屋にしまってあるわ」

大方、話を盗み聞きして速攻で吉良に買い与えたと、従兄弟の行動は容易に想像がつく。

自分の妻と、吉良に対する溺愛ぶりが甚だし過ぎて、本当に性質が悪い。

一時期は、吉良が健斗と付き合っていると本気で思った程、健斗の彼女への接し方は仕事上の上下関係からは逸脱した寵愛ぶりだった。

もっとも、健斗は皮肉屋でひねくれているから、傍からは冗談か本気かは分かりづらいが、俺には分かった。

「院長が、今後の為に紫苑の仕事をちゃんと見ておけって」

「…健斗がねぇ」

俺が知る限り、あの従兄弟は単なる優しさで、こんな殊勝な真似をする人間ではなかったはずだけれど。

何を企んでいるのやら。

「それで、紫苑の居ない日に、一本ずつこっそり見ていたの」

「別にこっそり見なくても良いのに」

「紫苑は家に帰ったら、仕事のことは忘れたいって思わない？」

「…まぁ…家で仕事のことは、考えたくはないかな」

「だから、貴方の前で見るのは嫌だったの。仕事の事を思い出したら、お休みの気分が台無しでしょ？」

そんな事まで気を遣っているのかと、彼女に驚かされる。

「だから今日はわざわざ、こんな夜中に？それなら俺が、朝出かけてからでも良いのに」

「それは…その……役者をしている貴方を…早く見たくて……」

ちらりと上目遣いで、消え入りそうな声で吉良はそう答えた。

薄暗がりでも分かるほど、真っ赤な顔を恥じ入るような表情に変えて。

思いっきり、心臓を鷲掴みにされた。

“これ、好きって言われるより、くるかも…”

この年上の彼女は、極度な照れ屋で、『好き』とさえ、満足に言ってはくれない。

それが不満の種だけど、それを吹き飛ばすように、時々、虚を突いて、恥ずかしくなるくらい率直な言葉をくれる。

柄にもなく心を揺さぶられて、嬉しくて、でも照れくさい気分になる。

こういう気分にしてくれるのは、吉良が初めてで…でも悪くない。

「それに…」

「それに？」

「知っている人に演技している所を見られるの、恥ずかしかったりするのかなって…」

面白い発想をする。

そんなことを考えていたら、役者なんて出来ないのに。

「恥ずかしくないよ。モデルも役者も、長くやっているし、見られるのが仕事だから」

俺の言葉に、吉良は何かに気づかされたように、目を見張る。

「あ…そっか…」
「むしろ俺は、吉良がどういう感想を持ったか、聞いてみたいな」
「か、感想？」
「そ。何かしら、思うことはあるよね？」
吉良は少し視線を伏せて考える。

「そうねぇ…原作の小説がそうだから…かもしれないけど、『死』が希薄よね」

苦笑した吉良は、テレビ画面に視線を向ける。

「どこかお話が滑稽なの。病気の進行状況と、患者の残存能力が伴ってないのは一番気になるかしら…死を看取る主人公と死んでいくヒロインのやり取りも、どこか死に酔いしれていて、綺麗事みたい」

仕事の時に見せる、真摯で隙のない表情で吉良はそう呟いた。
彼女は根っからの看護師なのだなと、その言葉で気づかされる。
普通の人と、見ている視点も感性もまるで違う。
そして、「綺麗事みたい」と言った、吉良にゾクリとする。
泣き所と言われたその場所を感動したと泣いた人間は多く居る。
でも、彼女の様に作品を冷静かつ客観的に見る人間の感想の方が、役者としてはよほど怖くて、重要なのだ。

「…あ。これじゃあ、作品の感想よね」

俺を見て、困ったように吉良は苦笑いする。

「職業病かな…医療系のことにすぐ目が行って、差異点が気になっちゃうのよ」
「なんだ。俺のこと良く見てくれなかったの？」

意地悪く、低く囁くように吉良に問えば、彼女はわずかに身を後ろに引いて固まる。
俺は身を乗り出すように、吉良に近づく。

「俺の演技も、まだまだって事だね」

俺の演技は、吉良に他所見をさせてしまうほど、彼女の心に楔をつけられなかった。
そういうことだ。

「ちょ…し、紫苑、さ、さっきより、近いっ…」
「恋人なのに、距離感に何の遠慮が居る訳？」

吐息がかかるほど近くに顔を寄せれば、吉良は俺の肩に手を置いて押し下げようとする。

「し、心臓に悪いの…」
「俺の何が気に入らないの？」

一応空手の有段者で、それなりに今も鍛錬は続けている俺を、華奢な吉良が退けることなんて無理なんだけど。

「やっ、わっ…」

結局彼女は俺に押し負けてバランスを崩し、俺が彼女を押し倒す形になる。
上からのしかかるように見下ろせば、彼女は身を強張らせる。
きっと吉良は、初めてではないにしても、男経験は浅いはず。
彼女の反応は、確実に男慣れしていないそれだ。
だから余計に、無理強いは出来ないのだけれど、少しずつ俺に慣

れてもらわないと、そろそろ俺が本格的に困る。
本当に、色々限界なんだ。

「ねえ吉良、教えてよ。俺の何がいけないのか」
「そ、そうやって、無駄にエロフェロモン垂れ流しな所…」
「エロフェロモン？」

そんなものを出している覚えはないのに、吉良は何度も頷く。

「上坂伊織になっている時の紫苑みたいで…ちょっと、苦手と言うか…やなの」
「…それは、上坂伊織が嫌いって事？」
「そうじゃなくて…どっちも紫苑なんだけど…でも、上坂伊織は紫苑なんだけど紫苑じゃなくて…見慣れないし、お色気ムンムンで別人みたいだから…とにかくどうしたら良いのか解らなくて困るのっ！」

つまり、上坂伊織になっている俺は、接し慣れていないからどうしていいのか分からないってことなのか？

「慣れてもらうために、上坂伊織ヴァージョンで口説き直そうか？」
「だ、駄目！やだっ！見たくないっ！」

本気で抵抗されて、冗談抜きで凹む。見たくないって、明らかな拒絶だろ、それ。
やはり、俳優の俺を吉良は受け入れられないのか？
そう思うと、ショックより怒りの方が湧いてくる。

「だって、貴方全然違うんだもの」
「？」

怒りが口をつくよりも早く、吉良が泣きそうな声でそう言う。吉良は、俺の視線から逃れるように、視線を泳がせながら顔を逸らす。

「…私の知らない人みたいで…その…役なのに、なんだか相手の女優さんと本当の恋人同士に見えちゃうし…ちょっと、やだなって…大人気ない自分も、すごくやだなって…」

恥ずかしそうに両手で顔を隠した吉良は、ぼそぼそとそう言い辛そうに話す。

“つまり、共演した女優に嫉妬したってこと？吉良が？”

なんだろう。この胸を締め付けるような甘い感覚。

嫉妬なんて、縛り付けられるみたいでウザったかったのに、吉良の口から言葉として聞くと、もっと聞きたいと思う。俺の心を縛る甘く危険な楔のようだ。

「演技だって分かっていても…上坂伊織はテレビの中で私じゃない人を口説くから…上手く言えないけど、急に紫苑が紫苑じゃないみたいに見えて…ＤＶＤは見たいけど、見るとなんだか、ずっと気持がモヤモヤするの」

「…それで最近、俺への態度が変になってた？」

「ごめんなさい…紫苑じゃないけど、紫苑だから…上坂伊織を気持ちが理解するのは、まだ時間がかかりそう」

恐らく吉良は嫉妬とは別に、嘘榊紫苑と上坂伊織が同一人物だと頭では分かっても、虚構と現実が混在した上坂伊織と言う存在を、気持ちがまだ受け入れられないのだろう。

それでも努力して、ＤＶＤを見ながら努力している段階なのか…。

それならば、時間をかけるしか仕方がない。

「わかったよ。上坂伊織が俺だって分かってもらえるのは、ゆっくり待つよ…でも、吉良が嫉妬してくれるなんて意外だったよ」

吉良は顔を覆った手を少し下ろし、恨めしそうに俺を見る。

「せっかく、オブラートに包んで言わなかったのに…はっきり言われると、余計に恥ずかしくなるじゃない！莫迦」

一応、嫉妬していると言う自覚があったらしい吉良に、真っ赤な顔のまま潤んだ瞳で睨まれ、そう悪態をつかれた。

でも、その声も弱々しくて、羞恥心に震えている。

そんな逆効果の可愛い真似されると、理性の箍が一瞬にして灰になる。

何のために、俺が我慢してきたと思っているんだろう、吉良は。

吉良の耳元に顔を寄せ、唇が耳朶をかすめるほどの距離で、耳打ちする。

「可愛いね、吉良」

「！！！！！」

薄い彼女の耳朶を優しく甘咬みして、そのまま細く白い首筋に口づけを落とす。

「ちょ、ちょっと紫苑？」

「吉良に避けられたのかと思って、怖かったよ」

「…ごめんね」
「いいよ。吉良がもっと好きになったから」
「っ！…ひゃっ！」

鎖骨の窪みに口付け痕を残すように首筋を吸い上げた後、痕を確認するように其処を舌で撫であげると、吉良は驚いたのか、変な声を上げてびくりと身を竦める。

「これから先も、上坂伊織は物語の中で多くの人間を演じる。吉良ではない誰かを愛する別の人間になる…濡れ場だってある」

だから、吉良には知っておいてもらわないと困る。

「それを吉良が目にする事も、耳にする機会も増える。見たくなければ、俺の作品を見なくても良い。…でも、吉良がどれだけ願っても、俳優を止めることはできない」

顔を上げれば、吉良がじっと俺を見つめる。

「紫苑…」

不安げに俺を呼ぶ吉良の頬を、そっと撫でる。

「俺に仕事か吉良を選ぶことはできない。この先、きっと何度も吉良を仕事の所為で傷付ける…分かっていても、傷付けたとしても、俺は吉良を手放すつもりはない…俺は欲張りで自分勝手だから」

身勝手だと怒っても、文句を言っても良い。呆れてもかまわない。頬の一つ叩かれても。でも逃がさない。傍に居て欲しいのは吉良だけだから。

なのに、吉良は小さく笑い俺の頬に手を伸ばす。

「紫苑が自分勝手なのは初めからだもの…今更だわ…」

「…吉良」

「大丈夫、仕事をやめてなんて言わないから。俳優をしている貴方も、紫苑、の一部だもの。干渉もしないって約束するわ。だから、紫苑も私から仕事だけは取り上げないでね？…嫉妬は…しないように頑張るけど…少しは許してね？」

こういう所が敵わない。

吉良は無自覚のままに、俺の心をどんどん魅了して優しく心を縛り付けていくのだから。

「しない。仕事をしている吉良も好きだから」

「ありがとう…って、紫苑!?な、何してるの!?」

吉良のナイトウエアの肩ひもをするりと外せば、吉良は驚いて、抵抗しようとする。

それよりも早く吉良の腕をつかんで、そのままソファに押しつけ、唇を塞ぐ。

「んっ…しぉ…」

吉良は目いっぱい抵抗するけど、俺の力に勝てるはずもない。

そもそも、解放する気なんて更々ない。

こんなに煽られて、吉良が欲しい気持ちを我慢なんて出来る訳がない。

柔らかな唇を強引に開き、臆病に逃げる舌を絡め取り、ゆっくりと口腔内を侵食する。

幾度も深く口づけを交わせば、次第に吉良の抵抗は失われていく。

時折苦しげに、吉良が切なげな吐息を零し、俺の耳朶を犯していく。

もっと吉良に触れたくて、素肌が露わになっている首筋に、肩に口づけを落としていく。

「やっ…待って…」

触れる度、小さく身をすくませる吉良は、身をよじりながらまた抵抗を始める。

「お願い」

「待てないけど、何？」

最後に残っていた理性で踏みとどまってみるものの、少し苛立った自分がいる。

今の俺は、恐らく不機嫌極まりない顔をしているはずだ。上っ面を誤魔化せないほど。

俺は顔を上げ、吉良を覗きこむ。

柔らかな唇から、熱を孕んだ吐息をもらす吉良は、ゾクリとするほど色気のある表情を浮かべている。

長い睫毛を震わせ、わずかに潤んだ瞳で俺を見る吉良が、愛しくてたまらない。

「紫苑は…本当に私でいいの？」

今更な言葉に、俺は鼻で笑う。

「こんな時に、俺の愛情試したい？」

「そうじゃなくて…」

「だったら何？」

思わず冷たく言い放ってしまう。
馬鹿みたいに吉良が欲しくて、欲望がせりあがるばかりで、吉良の言葉がもどかしい。
これまでだって、焦らす相手はいたけど、別段焦りもいら立ちもなく余裕で話を聞いていた気がする。
我慢できないほど抱きたいと思ったのは、これが初めてかもしれない。

「私…色気もないし、平凡な顔で…貴方より年上で…おまけに……その…」
「その？」

吉良は何度も視線を逸らしては、俺を見る。
難しい顔をして、口を開きかけては口を噤むのを繰り返し、次第に彼女の表情がこわばっていく。
酷く深刻そうな顔になり、何か、よからぬカミングアウトでもするつもりなのだろうかと、俺の方が不安になって来る。
努めて平静を装ったけれど、心臓は早鐘を打ち、得も言われぬ緊張感に縛りつけられる。

「私…その…全然、経験豊富じゃなくて…その……ご期待に添えるか…」

ひどく言い辛そうに、ぼそりと答えた吉良の頬は紅潮している。
その一言に、俺は溜息とともに、吉良の首筋に顔をうずめる。
吉良は思いつめた顔をしていたから、どんな爆弾発言をするのかと思っていたのに、可愛すぎる発言にほっと安堵する。
それと同時に、おかしさがこみ上げる。

「なんだ、そんなことか」

笑ってはいけないと思いつつ、必死で声を押し殺すけど、肩がふ

るえる。
しかし、どうにもたまらず噴き出した俺は、吉良に悪いと思いながらも遠慮のない笑いが止まらなかった。

「わ、笑う所じゃないでしょっ！」

恥ずかしさで声の上擦った吉良に、答えようにも笑い過ぎで声が出ない。
ひとしきり笑い続けた俺は、息を整え、顔を上げる。
吉良は恥ずかしさ半分、怒り半分の表情で俺を睨んでいる。
彼女は、自分の言動がいかに、甘い誘惑を孕んでいたかなど理解していないだろう。
この状況下では、『ご期待に添えるか…』などという言葉は、淫靡な誘い文句だ。
吉良自身が、俺を受け入れる気があるということを自白したも同じなのだから。
可愛い事を、無意識に言えてしまう吉良が、愛しくてたまらない。

「私は、真剣に悩んでるのに！」
「俺からしたら、そんな経験は豊富じゃない方が良いよ」

怪訝そうな顔で、吉良は俺を見る。

「どうして？」
「吉良が俺の腕の中で、どんどん淫らになっていく過程が楽しめるだろ？」

蠱惑的に囁けば、吉良が固まる。

「な、なななな、何てこと言うのっ！？」

激しく狼狽する彼女の細い腕をとり、手首にそっと唇を寄せる。

「っ…」

きつく、跡が残るように口づければ、吉良が腕を思わず引っ込めようとする。

俺はその手を離さない。

その白いやわ肌に、真新しい赤い痣が残る。

ベルトの太い時計をすれば隠れないこともない、けれど人目にさらされる際どい場所に。

「上坂伊織の全てを吉良に向けられない…でも、榊紫苑の全ては吉良にだけ受け取ってもらいたい…貴女以外の誰にも、渡したくない」

こんな言い方は狡いだけだって分かっている。俳優の俺も俺の一部なのに。詭弁だと言われても仕方がないことも、分かっている。

それでも、矛盾していようともこれは俺の嘘偽りの無い気持ち。

最初から俺の容姿に惚れる事もない、口説き文句にもほだされず、贈り物にさえ心を動かされず未だにプレゼントを拒む吉良が受け入れてくれたのは‘榊紫苑の心’だけ。

形の無い物しか受け取ってくれない吉良だから、これまでの女とは全く違うから、どうやって彼女の心を繋ぎ止めていいのか分からない。

俺の最大の魅力であり武器であるものが通用しない吉良に捧げられるものは、嘘偽りの無い気持ちと、人間として欠陥だらけの俺自身しかない。

「ありがとう、紫苑」

そう言って、吉良は俺の頬に軽く口づけを落としてくれる。

「上坂伊織の心はファンの人たちの為に、大事にして。でも、此処に帰ってきたら私の紫苑でいてね」

いつもひらりと俺の思惑をすり抜けて飛んで行ってしまうのに、どうしてこうも容易に吉良は俺を絡め取ってしまうのだろう。

「…貴女が好きだよ、吉良」

「私もよ」

そういって、はにかむように優しく笑ってくれる吉良がたまらなく好きで。どんどん吉良にはまっていく。

「吉良が欲しい。心も体も、すべて…俺のものにしたい」

吉良は呼吸さえ忘れて俺を見つめていた。

少し大きめのダークブランの瞳には、俺しか映っていない。

「…ここじゃ…嫌…」

恥じらいながら呟かれた声に、背筋が甘い疼きを覚える。

彼女が欲しいと、体が餓えて欲する。

「ベッドに行こうか」

俺は吉良から体を離して、ソファから立ち上がると、そのまま吉良の体を横抱きにして抱きあげる。

「う、嘘っ！私、重いよっ?あ、歩くから」

「今、理性ないから、下ろしたらそのまま襲うよ？」

そのまま、吉良を抱いて寝室へ向かって歩き出すと、吉良は俺の首に腕をまわし、ギュッとしがみつく。

そっと身を寄せてくる、そんな小さな吉良の行動が、可愛くて、愛しくて。

誰にも貴女を奪わせはしない。

やっと手に入れた、俺だけの蝶（あげは）。

その細くしなやかな体を、俺から逃げられぬように、快楽という離れがたい糸でもっともっと貴女を縛り付けてあげるから。

ＥＮＤ

蜘蛛の糸に絡まれて　６（後書き）

閲覧ありがとうございます。主人公の年齢が２０歳代なのに、Ｒ１５までしか書けないのは私の技量不足…それでも楽しんで読んで頂けたら幸いです。

Ｃａｌｌｉｎｇ　前篇（前書き）

今回は、三人称表記の小説です。

Ｃａｌｌｉｎｇ　前篇

空が白み始めた頃、榊紫苑は自宅に戻った。
ドラマの撮影が押して夜通し収録が続いた紫苑は、静かに玄関を閉じて鍵を閉じたと同時に、欠伸を噛み殺した。
それがマンションに戻って気が抜けたからだと気付き、紫苑は苦笑する。

“吉良のおかげかな”

一人で暮らしていた頃はマンションに帰ることすら考えられず、帰宅するのも月に一度、あるかないか程度だった。それが今は少しでも早く吉良の待つこの家に帰りたいと思い、仕事が終わると真っ直ぐ帰るようになっていた。
そんな変化も紫苑としては驚きだったが、それ以上に自身の体が眠気を感じるようになった事が最大の変化だった。
長い歳月、眠りを拒絶していた紫苑の体は、専門医に十年以上もの間、治療を受けても不眠症が治らなかった。
従兄弟の榊健斗の治療も受けたが症状は捗捗(はかばか)しくなく、『お前に必要なのは心身ともに癒される場所だ』と、彼から説明を受けた時、榊紫苑はその言葉を治療が遅々として進まない言い訳だと一蹴して聞き入れなかった。
しかし、その‘心身ともに癒される’吉良との生活を手に入れ、不眠症がまるで嘘のように体が眠りを欲するようになり、紫苑はようやく従兄弟の言葉の意味を理解した。
彼女と言う存在の大きさを紫苑は日々、気付かされる。

“…この時間だと、あまり吉良の傍に居られないか…”

曜日感覚の無い上に、昼夜も関係の無い仕事をしている紫苑と、カレンダーに沿ったごく普通の時間スケジュールで仕事をする吉良では、なかなか時間を共有して過ごすことはできない。

彼女の寝顔を見る事が出来れば、まだ良い方だ。

眠っているであろう恋人を起こさないよう、淡い光の中、廊下を静かに進み、寝室に入るが、そこにいるはずの人間が居ない。

「…」

吉良の靴があり、彼女用の室内スリッパがないので、無断外泊をしているとは思い難い。恐らくは、最近は仕事部屋になっている吉良用の部屋に、彼女が居るのだろうと紫苑は推察する。

一緒に暮らし始めたばかりは、よく、こうしてベッドがもぬけの殻になったと邂逅していた紫苑は、その頃のショックを思い出して短く息をついた。

踵を返した紫苑は、真っ暗なリビングの横にある吉良用の部屋に行く。

部屋の光が、扉の足元から僅かに漏れているのが見える。

珍しく電気を消し忘れたのかと思っていたが、閉ざされた扉のさきから、パソコンのキーボードを打つような僅かな音が聞こえ、紫苑はそっと扉をあける。

机の上にあるノートパソコンに向かい、床に座布団を敷き正座をしてキーボードを弾いている吉良が、そこにいる。

“相変わらず、姿勢が良いな…”

足も崩さず、背筋も伸びた凛とする座り姿は、黄色の花柄パジャマ姿でなければ惚れ惚れする所だった。

周囲には多くの医療用の書籍と、束になった書類が乱雑に積み上がっている。
几帳面な吉良にしては、珍しい部屋の汚れ方だった。
紫苑が部屋の中に入って近づいても、吉良は作業に夢中だった。
集中すると、周囲が全く気にならなくなってしまう困った恋人の背後に、紫苑は腰を下ろす。それでも彼女は全く気付いた様子がない。
おもむろに、彼が吉良あげはの腰に腕を絡めた瞬間、彼女は「うひゃっ」と奇妙な声を上げて、びくりと身をすくませる。

「色気ないなぁ」

紫苑は小さく笑って、吉良の体を自分に引き寄せると、ギュッと抱きしめる。
温かなぬくもりと、柔らかな彼女に触れる心地よさに紫苑は安堵する。
鼻梁を突くシャンプーの香りが、彼女の愛用のもではない事に紫苑は気付く。吉良の匂いは、紫苑が愛用しているシャンプーのものと同じ。
驚かされた吉良は、自分の肩に顔を乗せている紫苑に視線を向ける。

「びっくりしたぁ…お帰り、紫苑」
「ただいま。シャンプー変えた？」
「え…っと…ごめんね、勝手に使っちゃった…」

気付かれた事をバツが悪そうに謝った吉良だが、紫苑は別に怒ってはいなかった。ただ、いつもの方が彼女に合った良い匂いだったから、今の匂いに少しがっかりした気分になり表情が無意識に硬くなっただけ。

「…紫苑、三日お仕事で帰ってこれなくて、昨日も『今日は無理』って、言ってたから…だから…ちょっと、淋しかったと言うか…シャンプーの匂いだけでも、ちょっと紫苑を感じたいなぁ…とか、思っちゃいました……変態みたいだよね…ごめんなさい」

紫苑の難しい表情に、吉良は彼が怒っていると勘違いし、恥ずかしさでしどろもどろになりながらそう釈明して謝罪する。

もっとも、紫苑にしてみればそんな可愛い理由で使われたら、余計に怒る気など起きない。紫苑は小さく笑みを浮かべて吉良の頬に口付ける。

「そう言う理由なら全然いいよ。いくらでも使って…でも、俺は抱きしめた時に何時もの吉良の匂いがする方が良いかな」

「それは…今度から気をつけるね」

「で、何しているの？」

「今日…じゃなかった。昨日、不眠治療の研修会に参加してきたから、それのレポートを書いているの」

「ふーん」

紫苑はパソコン画面に打ち込まれている文面を見るが、専門用語が多すぎて意味が分からなかった。

「終わりそう？」

「あと、少しかな」

「今日、月曜日なのに、徹夜なんかして大丈夫なの？」

「昨日の研修が出勤扱いだから、今日は代休なの。紫苑こそ疲れたでしょ？休まなくて良いの？」

「うん。少し眠いよ…」

吉良の肩に顔をうずめ、紫苑は欠伸を噛み殺すように答える。

「寝室で休んできたら？」

「やだ…」

子供の様に答えた紫苑に、吉良が苦笑する。

「風邪ひくわよ？」

「…あげはの傍が良い」

一呼吸置き、吉良の頬が一気に朱に染まる。

いつも『吉良』と名字で呼ぶ彼に、名前で呼んでもらいたくてお願いをしてから、もう半月が経っていた。
ずっと呼んでもらえなかった自分の名前の響きに、吉良は胸が高鳴る。

「い、今、あげはって呼んだ？」

相手の手を解いて振り返ろうとしたけれど、紫苑の手はびくともしない。

「な、なんで力入れてるの？」
「顔見られたくない…」
「どうして？」

紫苑は自分の腕を外そうとしている吉良の左手を、逆に掴んで握る。
その左手薬指には、紫苑が贈ったピンクサファイアの指輪がある。

「…照れくさくて恥ずかしいから、見ないで」

意外な所で純情な一面を披露する紫苑に、吉良は噴き出す。
好きだと告白するよりも前にキスをして迫ってきた相手と、目の前の相手が同一人物とは到底思えなかった。
色事が平気で出来るのに、ただ名前を呼ぶことがどうして恥ずかしいのか、吉良には分からない。

「キスは平気なのに、変なの」
「手が早くて悪かったよ…」
「悪すぎよ?私、貴方に会う度に貞操の危機だったもの」
「何で今日はそんなに意地悪な訳?」

不貞腐れたように答えた紫苑の腕が緩んで、彼の体が少し離れる。
吉良は体を捻り、俯く紫苑の顔を覗きこめば、年下の彼は僅かにむっとした顔をして吉良を見ていた。
年上彼女は、そんな紫苑に微笑みながら自分の指にある指輪を撫でる。

「…ホントはね、ずっと紫苑が名前を呼んでくれるのを待ってたの…約束したのに、ずっと呼んでくれなくて…そう言ってくれたことは夢だったのかなって、心配だったの」
もし夢だったらと思うと本人には直接聞く事が出来ず、吉良はこの半月、ずっとモヤモヤしていた。
そんな吉良の性格を悟った紫苑は、吉良の髪を梳くように撫でながら、彼女の額に口付けを落とす。

「待たせてごめん」
「ううん。すごく嬉しかった。呼んでくれてありがとう、紫苑」

恋人の素直な礼に、照れと恥ずかしさがよみがえった紫苑の頬は赤く染まり、彼は思わず視線をそらした。
吉良はそれを見て思わず胸がキュンとなる。
成人男性に可愛いなんて言葉は不相応だと分かりながらも、思ってしまう。
いつも、恋愛絡みは年下の紫苑にばかりリードされて、こんな風に彼が照れる場面なんて吉良は滅多に見られない。

だからこそ、紫苑が自分と同じように照れたり恥ずかしかったりするのだと、わかって一層に嬉しくなる。

「…紫苑、もう一回、名前で呼んでくれる？」

そう問えば、年下の彼氏はちらりと吉良を見る。

自分を上目遣いで見る彼女の瞳は、期待できらきらしている。

ただ名前を呼んだだけなのに、それほど嬉しいのかと一瞬、紫苑は考える。

“…あの時は、すごく嬉しかったな”

自分が吉良から名前を呼ばれた時の事を思い返し、小さく笑った。

今の吉良の心境は、過去の自分と同じなのだと、紫苑は感じる。

あの時の自分が、吉良と同じような表情をしていたのかと思うと、紫苑はものすごく恥ずかしい気分だった。だが、吉良が喜んで笑ってくれるのなら、何度だって彼女を名前で呼びたい。そうも思う。

「あげは」

少しぎこちなく、照れ混じりに紫苑は彼女の名を呼んだ。

彼女の目を見て。

普段の彼にして見れば、驚くほど頼りの無い声で。

自己嫌悪に陥りそうになった彼に、吉良は紫苑の首に腕を絡め、ぎゅっと抱きつく。

突然の予想外の抱擁に、紫苑は後ろに倒れそうになるが、床に手をつき片腕で体を支え、もう片方で吉良を抱えて支える。

「な、何？」

「う、嬉しいけど、み、見つめられて呼ばれるのは、刺激が強すぎ

て、まだ無理…かも…恥ずかしくて…倒れそう…」

消え入りそうな声でそう答える吉良が、紫苑の理性の壁を大きく揺さぶる。

自分以上に照れ、その顔を隠そうと抱きついてきた相手を、紫苑は床に組み伏せる。

「そんな可愛い事言うと、このまま食べちゃうよ？」

びくりと吉良の体が大きく揺れる。

「よ…四日前にしたじゃない…」

「三日もしてないだろ？」

「だ、駄目よ…今日は、紫苑も仕事で疲れてるし、私も徹夜したから…ね？」

体に障ると丁重なお断りを入れた吉良に、紫苑は小さくため息をつく。

「…わかった。それなら、今から添い寝してよ。あげはが居ないと、良く眠れないんだ」

いやに潔く諦めた相手を、吉良は疑いの眼差しでしばらく見ていたが、小さく頷いた。

「俳優がクマを作ったら駄目だものね。片づけるから先に行っててね」

紫苑の眼の下に出来た薄いクマを指先で撫でた後、吉良は紫苑から逃げるように身体を起こし、ノートパソコンの電源を切るために

紫苑に背を向けた。
だから吉良は変化した紫苑の表情に、気付かなかった。

“大人しく寝かせる訳ないだろ？”

それは、さながら獲物を狙う獣の様で、吉良が見ていれば絶句し身の危険を感じる程の、艶めいた色気を纏う笑顔だった。

ＥＮＤ

とある日の光景…　1（前書き）

院長と吉良の職場での一コマ…ちょっとした閑話な感じです。

とある日の光景…　1

その日、いつも通りの時間に出勤した吉良あげはは、クリニックに自分よりも早く出勤した人間が居る事を、室内に広がった香りで気付く。

上質なブルーマウンテンのコーヒー豆で点てられたコーヒーの香り。

それは吉良の雇用主であり、このクリニックの院長である榊健斗がお気に入りのコーヒー豆で、彼が既に出勤したと言う証しでもある。

普段は、吉良の方が早く来るのだが、時々、榊健斗は彼女よりも出勤している事がある。

「おはようございます」

私服姿のまま、吉良は診療室を覗く。

均整のとれた長身に、すこし彫が深い甘い顔貌。

イタリア製のスーツを着こなし、診療室の革張りの豪奢な椅子に腰をかける姿は、医者には到底見えない。

モデルの様に一枚の絵になり、大企業の役員のような威厳の様なものも感じる。

長い脚を組み、優雅に自分で点てたコーヒーを飲んでいた健斗は、声の主に視線だけを向けた。

健斗の右手とも言える看護師は、淡いブルーのシャツに、白のパンツ、パンプスというラフな格好で出勤していた。

ラフだが手抜きと言う訳でもなく、ＴＰＯを弁えた上で、均整がとれ女性らしい曲線を描く吉良の肢体に似合った、清楚な色気を添える。

黒縁のメガネ越しに吉良を見、健斗はおもむろに携帯電話を彼女に向ける。
カシャッと電子音がし、彼は何事もなかったかのように携帯電話を操作する。
健斗が先に出勤している時は、挨拶もなしに写メをとられる事が、何年も出勤の度に繰り返されているので、吉良も今更、文句を言う気もない。
その写真がメール添付され、どこへ送られているのかも知っているので、余計に何も言わない。
健斗流の妻への愛の日課だと知っているから。
長い付き合いの医師の前に歩み寄り、吉良は持っていた紙袋を机の上に置く。

「お弁当です」
「今日のメニューは？」
「筑前煮と、鮭の塩焼き、ほうれん草のお浸し、出し巻き卵。あとハンバーグです」
「ハンバーグ？」

片眉の眉尻を吊り上げた健斗は、形のよい唇の端を不機嫌に歪める。

「俺の弁当に、昨日の残りものを入れやがったな？」
「違いますよ。ハンバーグは、紫苑のお昼ご飯用に作った残りです」
「結局残りものか」
「わがまま言わないでください」

呆れたように、長身の看護師は腕を組む。
週に二度、吉良は彼の昼の弁当を作る。和食党の健斗の為に、基本、和食料理で。

無論、自発的ではない。健斗の妻、榊美菜に頼まれているからだ。

「給料に手間賃を加算してやってるだろうが」

「…そんなもの、材料費で相殺されます」

舌の肥えている健斗は、吉良が安い素材で料理を作ろうものなら、容赦ない文句を言う。

味付けだけでは誤魔化されない、ハイソサエティーでエリートな舌の持ち主だった。

必然的に、良い素材を選んで調理しなければ、料理に満足しない。

一方の吉良は、極貧生活を乗り切るために安い素材をおいしく調理することに心血を注いでいたため、腕前に対して、健斗が文句を言ったことは一度もない。

「特売品なんざで、俺を満足させられると思う方が間違いだ」

「それなら、ご自分の家にいる料理人にお弁当を作らせたらどうです？」

健斗の妻、美菜は料理など一切作らない。いや、作れない。

社長令嬢として、蝶よ花よと育てられた美菜は、料理をはじめ家事の一切をしたことはない。華族の血筋である彼女は、生粋のお嬢様として身の回りの一切は使用人が全て行っていた。

故に、彼女が健斗と結婚する際には、執事とメイドが数人オプションで付いてきている。

過去に一度、美菜がキッチンに立った際、リフォーム必須の壊滅状態になり、健斗も彼女をキッチンには絶対に立たせない。そもそも、彼女に家庭的な能力は期待していないし求めても居ない。

代わりに専属の料理人が、健斗の家にはいる。

「あいつらは、美菜の嗜好に合わせて洋食専門だ。和食は作らない」

「それなら、外食すればいいじゃないですか」
「毎日毎日、外食なんざしてたら、栄養の偏り過ぎで成人病になるだろうが。塩分と脂肪分の過剰摂取をさせて俺を殺すつもりか」
普段からして医者らしからぬ男の、ここぞとばかりの医者らしいセリフに、吉良は苦笑する。

とある日の光景…　2

「まぁ、院長にぽっくり逝かれても困りますし、美菜先生に頼まれているので作るのは構わないんですけど…」
「けど、なんだ？」
「私が院長のお弁当をずっと作っているって知って、紫苑が不機嫌なんですよね」
「あいつは悋気（りんき）だな」
「だから、今日はオフだった紫苑にも洋風のお弁当を作って置いてきたんですけど…昨日の夜の下準備からずっと機嫌が悪くって…」

何故だか榊健斗に対して異常なライバル心を燃やす紫苑の心情を、吉良は良く理解できない。格別仲が悪い訳でもないのに、時々、子供の様に敵意をむき出しにすることがある。
そんな年下の従兄弟の嫉妬心を、健斗はからかって遊ぶので、時々、周囲を巻き込んで騒動になるのだが、巻き込まれた当事者の吉良があまり分かっていない事も多い。

「だから、今日の朝も犯られた訳だ」
「…やられる？」

言われた事がすぐに理解できず首をかしげた吉良に、健斗が自分の左の首を軽く触れる。

「ついてるぞ、キスマーク」
「！！！！！」

吉良は慌てて両手で首を押さえる。

「う、うそ、来る前に確認したのにっ！」

「…あぁ、嘘だ」

しれっと、健斗はコーヒーを飲む。

カマをかけられて、まんまと引っ掛かった吉良は真っ赤な顔をして上司を睨む。

「セクハラ罪で訴えますよっ！」

「お前こそ、そんなエロフェロモン出して出勤するな。猥褻物陳列罪だ」

「そんなの出すのは、院長と紫苑だけですっ！」

最近になって殊更女性としての色気をましている事を、全くと言っていいほど理解していない女を暫し眺めた健斗は、深い為気を漏らす。

「何にせよ、お前はあいつを甘やかしすぎだ。残りものでも食わせておけ」

吉良は、曖昧に「はぁ…」と答える。

『健斗を甘やかしすぎ！昨日の残りのおかずでも適当に入れておけばいいんだよ』

と、紫苑が昨日、似たような事を言って怒っていたことは内緒にしようと吉良は思う。

『目を喰いしばれぇぇぇぇっ！』

突然、健斗の携帯電話から、低い男の声で絶叫が聞こえる。
ある人限定の、メール着信のコールだ。

「…院長。その着信、やっぱり何度聞いても怖いですよ…」
「あ？お茶目の間違いだろ？如実に、あいつを体現してる台詞だ」

どこからその着メッセージをダウンロードしたのかも謎なら、メールの主に対する健斗の評価も吉良にはいまいち謎だった。
健斗はメールを確認すると、おもむろにその画面を吉良に向ける。

＊＊＊＊＊＊＊

今日も可愛いわっ、あげはっ！
何をお召しになっても、素敵！
でも、そのシャツ、確か二週間前に着ていましてよ？
あたくしの大事なあげはが、同じ服を着るだなんて、
断じて許しませんことよっ！
しーちゃんも、貴方も、何をやっているの！
健、今日の昼休憩、吉良を連れて彼女の服を何着か新調して頂戴。
絶対に、あげはに似合うものを選ぶのよ。
よろしくて？

＊＊＊＊＊＊＊

そのメールの主は、健斗の妻、美菜だった。
吉良は美菜から、抜き打ちで洋服チェックをされている。
健斗が出勤した吉良の写真を撮って、メールに添付するのはその

ためだ。
吉良は、メールのメッセージを見て、苦笑いする。
「着回し、ばれてましたか…」
「そんな小手先で、美菜を騙せるわけがないだろうが」
携帯電話を机の上に置いた健斗は、腕を組み、吉良を睨む。
「だって一回しか服を着ないなんて、どう考えても不経済ですよ」
「だからと言って、服の質を落とすな。最近、お前の服の安っぽさが目に余る」
「私は安くても良いんですけど…」
「性根が貧乏くさいだろ。外面ぐらいそれ相応に着飾れ」
その一言に、吉良は頬がひきつる。
「貧乏って…どうせ、特売品しか買いませんよ。湯船にペットボトルいっぱい浮かべて、お湯の節約をしたり、節電で蛍光灯の数を減らしたりしたら、紫苑にそれだけはやめてくれって、ものすごい勢いで泣きつかれましたよ」
やけくその様にカミングアウトされ、今度は健斗の顔がひきつった。
「お前…そこまで貧乏が板についてたのか」
「院長も紫苑も、お金に頓着しなさすぎなんです。お金がないって、ホントに怖いんですからねっ！」
力説され、健斗は深いため息を漏らす。

「紫苑は、服を買い与える道楽がないんじゃなくて、お前に怒られるから、服が気になっても買わずに耐えているわけだ」

図星だったのか、吉良は目を泳がせて健斗の視線から逃れる。

“こいつ、紫苑が榊の本家筋の人間だと知ったら、卒倒してそのまま死ぬな”

医療業界のトップに君臨する、医療法人『聖心会』グループを経営する榊一族の人間であることは知っていても、現総帥が紫苑の父であることを、吉良は知らない。

紫苑がそれを意図的に隠しているので、健斗も彼女に教えるつもりは毛頭なかった。

とはいえ、紫苑が普通に生活する程度の羽振りを吉良に覚えさせなければ、従兄弟が不憫でならないと、健斗は妙に紫苑に同情してしまった。

とある日の光景…　3

「昼休憩、飯食ったら出かけるぞ」
「…何処にですか？」
「お前の服を買いに行く」
「え～」

露骨に、吉良が不満の声を上げる。
それを見て、健斗は片眉を吊り上げた。

「誰のせいだと思っている」
「だって、そんな金銭的余裕はありませんから」

一流思考の健斗が付き添うということは、洋服の値段も至極当然と張る。
庶民で、廉価な服を好んで着る吉良とは相反する上に、値段もゼロがひと桁変わる。
一日で、吉良の給料など容易に吹き飛んでしまう。

「俺の時間を奪った癖に、口答えするな。お前に拒否権はない」
「お、横暴です」

いつになく、有無も言わせぬ圧力で言われ、吉良は怯む。

「お前、俺の結婚生活に亀裂を入れるつもりか」
「そう言うつもりはありませんけど…」

美菜のお願い（命令とも言う）は、健斗にとっては絶対遵守事項。まして、妻が溺愛して女絡みであれば尚の事。

余計な事で夫婦仲に荒波を立てたくない健斗としては、余程でなければ妻の願いを聞き入れる。どれだけ面倒くさかろうとも。

一方の吉良は、自分の所為で二人が要らぬ喧嘩をするのは絶対に避けたい。

しかしながら、財布事情との兼ね合いが些か難しいのも事実。

「安心しろ。安月給のお前に買えとは言わん」

その安月給を支払っている男は、悪役候な不敵な笑みを浮かべる。

「ただし、俺の選んだ物は絶対に着ろ」

以前、この流れで何度か、吉良はダイアンのラップワンピースを院長に着せられた。

このワンピースは、体のラインをセクシーに魅せる。

デザインは吉良も気に入っているし、美菜も好んでいるブランドだ。

しかし、紐を一本解くだけですんなり服を脱がせられる、男心をくすぐる代物。

付き合う前の紫苑に『誘っているの？』と、吉良は脱がされかけてラップワンピースの危険な魅力を、文字通り身を以て教えられた。

健斗は口ではからかうが、手を出してきたことは一度もない。

けれど、恋人でもない相手からそれを着せられるのは不味いと、鈍い吉良でも危機感を抱いて、それ以後は服のやりくりをしているのだ。

「い、院長に買わせるくらいなら、紫苑におねだりします」

やんわりと断りを入れた吉良は、突然、腕を健斗に掴まれる。
健斗がにこりともせず、じっと吉良を見つめる。

「な…何ですか、院長」
「俺では駄目なのか？」

何がどういう意味で駄目なのか、全く解らない吉良は頸を傾げる。

「俺がお前に何かしてやりたいと思うのは、いけないことか？」

切実で、素直さすら感じさせる甘い声音に、吉良は固まる。
普段の傲慢で強引な風情などまるでない。これは、院長お得意の口説きモードの状態だと、瞬時に有能看護師は気付く。但し、気付いても、何故このタイミングでこの状態を自分に向けたのかは、理解できなかったが。

「他の男のモノにはなったが、お前は俺にとって大切な女だ。お前に似合う服を贈るくらいの些細な幸せを、俺に許してくれてもいいだろ？」

目の前の男が戯れに放つ口説き文句を、幾百と聞き流している吉良でさえ、勘違いしそうになるほど。
この技で女を口説き落としているのかと、冷静に判断している半面、吉良の心拍は見慣れないものを見て、動揺で跳ね上がっていた。
乞う囁きを放つ健斗の色気が、自分をベッドに誘う時の紫苑と重なり、どうしようもなく吉良を緊張させる。

「…い、院長、そのキャラ、似合いませんよ？」

動揺を押し隠しつつ、吉良が茶化すようにそう言えば、健斗はニ

ヤリと淫靡に笑う。

「その割には、心拍数が上がっているぞ」

気づかぬ間に、手首の動脈を抑えられ脈を取られていた吉良は、慌てて相手の手を振りほどく。

「男が女に服を買い与えるのは、脱がせるためだからな？俺の期待に十二分に添えよ？」

「絶対に脱がされないですからっ！」

吉良が絶叫すれば、確信犯の健斗は愉快とばかりに破顔して笑い声を上げる。

出勤してきた受付事務員、藤堂絢子の耳に、吉良の絶叫と、院長の笑い声が聞こえる。

絢子は、すっかり慣れ親しんだ日課に、苦笑する。

「また院長が、あげはちゃんをからかって遊んでる…今日も平和ねぇ…」

こうして、榊クリニックの一日は始まっていく…。

ＥＮＤ

とある日の光景…　3（後書き）

健斗が…口説いているのだか、からかっているのやら…
改稿したら、余計に健斗がパワーアップしてしまいました（汗）

七月七日のｌｏｖｅ　ｌｅｔｔｅｒ　前篇（前書き）

…季節外れですが、七夕ネタです。
今回も三人称表記です。

七月七日のｌｏｖｅ　ｌｅｔｔｅｒ　前篇

七月七日、昼過ぎ。
仕事が終わり自宅マンションに戻った榊紫苑は、郵便受けをチェックする。
何通かの手紙と、広告を抜き出してエレベーターに乗り込む。
手紙の宛名を何気なく確認していると、エアメール封筒が一通ある。
住所転送で送られてきた手紙。

『ＡＧＥＨＡ　ＫＩＲＡ』

吉良宛のその文字は男性の物で、紫苑の眉根がピクリと寄る。
即座に相手の宛名を確認する。

『ＭＡＳＡＨＩＴＯ　ＭＡＴＵＭＯＴＯ』

明らかに、男の名前。
しかも、紫苑には全く聞き馴染みがない。

“誰だ、こいつ…”

自分の知らない男からの手紙に、胸がざわつく。
今すぐ手紙の中身を検めたい衝動に駆られたが、それは良くないと思い直した。
紫苑は吉良が仕事から戻るまで、待つことにした。
その間、イライラが止まらなかったのは、言うまでもない。

§

夜、九時近くなって吉良は戻ってきた。
何時もと同じ帰宅時間でも、紫苑はいつも以上に帰りが遅く感じた。
鍵の音とともに、紫苑は玄関先に立った。

「ただい…うわっ！」

玄関を開けた瞬間、そこに紫苑が仁王立ちしていた事に、吉良はかなり驚いた。
買った食材を詰め込んだエコバックを、危うく落としそうになる。

「お帰り」

いつものように笑顔でそう迎えてくれたものの、恋人の機嫌が底辺を這っている事に吉良は気付いた。

「ど、どうしたの？な、何か嫌な事あった？」

他の人間ならば気付かない機微を察知した年上彼女に、紫苑は張り付けた様な演技の笑みを止めて、不機嫌な表情を見せる。

「なんで分かる訳？」

憮然としたまま自分を見ている紫苑に、吉良は首をかしげる。
何か怒らせるような事をしたのかと吉良は考えるが、思い当たることがない。
紫苑は吉良から買い物袋を取り上げると、彼女に一通のエアメールを突き付ける。
無言で差し出された手紙を吉良は受け取り、贈り主の名前を確認して破顔する。

「雅人ったら、マメねぇ」

気安く親愛の情が込められたその言葉に、紫苑の眉間に深い皺が寄る。
封筒から顔を上げた吉良は、不機嫌そのものの紫苑と目が合う。

「…何で怒ってるの？」
「別に」

ふいっと、踵を返しキッチンへ歩いていく恋人に、吉良は手紙と彼の後ろ姿を交互に見て不機嫌な理由をやっと悟る。

“意外にやきもち焼きなのね”

吉良は苦笑しながら自分の部屋へ行くと、ペーパーナイフを持って紫苑のいるキッチンへ向かう。
紫苑は慣れない手つきで、エコバックから食材を出している。

「紫苑」
「何」

視線を合わせようとしない相手の前に、吉良はエアメールとペー

パーナイフを差し出す。

「私、ご飯の支度をするから、開けて手紙の内容、紫苑が呼んで聞かせてくれる？」

「…俺が？」

わずかに驚いた表情を見せた紫苑に、年上の彼女は微笑んで頷く。

戸惑いながら手紙を受け取った紫苑は、シンクで手を洗い料理の支度をはじめようとする彼女の後姿を見つめる。

相手が全く頓着していない様子でそう言うので、嫉妬深い年下彼氏の方は拍子抜けする。

「本当に開けるよ？」

「うん、お願い」

相手があまりに頓着せずに言うので、紫苑は覚悟を決めて封筒を開封した。

中には便箋と写真が二枚入っている。

とりあえず便箋だけを取り出し、紫苑はそれを開く。

「拝啓、吉良様。

お元気ですか？

僕、二十歳になれたよ！

薬は手放せないけど、病気もせず心臓も元気でやってるよ！

で、今回は、すごい報告があるんだ。

なんと、僕にもようやく彼女が出来ました！

もう、可愛いんだよ！これが！

すごくない？

貴女と出会った頃には考えられなかった幸せな事が、あの頃の貴

女が言った通り、毎日のように現実として起こってます。
写真を同封するから、俺の彼女見てね！
ところで、吉良さんは彼氏出来た？
陰険エロ眼鏡の邪魔になんて負けないで、良い男見つけてね！
それじゃ、また。

七夕と貴女に限りない感謝を込めて。

松本　雅人」

手紙文面をそのまま声に出して吉良に聞かせた紫苑は、封筒から写真を取り出す。
写真の一枚には、二十歳くらいの線の細い青年と、金髪碧眼の少女が仲良さそうに映っている。
もう一枚は、空の写真。
天の川が映った夜空が、映し出されている。

七月七日のｌｏｖｅ　ｌｅｔｔｅｒ　後篇

紫苑はその写真を持って、包丁を扱う吉良の傍に寄る。

「写真見る？」

紫苑が尋ねれば、吉良が包丁を使う手を止めて、彼を見上げる。
吉良が見やすいように、紫苑は写真を見せる。
写真を見て、吉良は嬉しそうに笑う。

「わぁ。彼女お人形さんみたいに、ふわふわして可愛い～！雅人も去年より男の子っぽくなってる！」
「あげは、この雅人って」
「看護師になって、初めて受け持った患者さんなの。顔に似合わずやんちゃでね。病院脱走の常習犯で、良く探し回ったなぁ…まあ、それがあって、仲良くなったんだけど」
「それでどうして手紙なんか来るわけ？」
「一種の、生存確認かな」
「生存確認？」
「雅人、七年前に渡米して移植手術をしてるの」
「移殖手術？」
「他の人の臓器を提供してもらって、自分の臓器と交換するの。とても危険を伴う手術でね、仮に手術が成功しても、人によっては移植された臓器が体に合わなくて、拒絶反応で亡くなってしまう事もあるの。だから、拒絶反応を抑えるために免疫力を低下させる薬をずっと飲まないといけないの。免疫力が無くなると、菌に対する抵抗力が無くなるから、風邪をひいただけでも命に関わることがある

のよ」
「あぁ、海外に渡って手術の為に移植臓器を待つって、結構ニュースでも話題に上がっているよね？」
吉良は頷く。
「法令が改正されて日本でも法律上、十五歳以下の子供でも手術はできるようにはなったけど…あの頃は海外で臓器提供者を待って手術をするしかなかったから…余計に手術をする事が不安だったと思う…臓器提供者が現れるかも分からない、例え成功しても一年生存率が八割弱あるのに、十年だと四割五分になるって知って…まだ中学生だった雅人が怖くなって、手術を嫌がって自棄を起こしたこともあったわ」
看護師として働いている時の表情を見せたままの吉良を、紫苑は黙って見ていた。
紫苑には何となく、雅人の恐怖心が分かる気がした。
そして、吉良がどんな態度でその少年に向かって接していたのかも。
だからこそ余計に、紫苑は嫉妬する。例え恋愛関係じゃなくても、彼女は正面から相手の心と向き合って、少年を支えたのだろうから。
「だけど雅人は、手術する事を選んだの。その時に彼と約束したの。雅人は毎年、生きていたら七夕に届くように手紙を書くって。私はその手紙の返信を必ずするって。もう六年くらい続いているかな…」
「今時、電子メールじゃなくて手紙？」
「直筆の手紙の方が、本人が書いたってより分かるからって」
「どうして七夕指定なわけ？」
「移植手術をするって雅人が決めたのが、七夕だったの。病院の笹の葉にも、手術が成功するように、書いたわ」

「…そいつあげはの事、好きなんだね」
まだ不機嫌がおさまらない紫苑に、吉良は苦笑する。
「紫苑が思うような恋愛感情は、雅人にもないわ」
「本当に？」
「ちゃんと、彼女が出来ましたって、彼の手紙にもあったでしょう？」
ほっとしたような、自分の知らない吉良を知っている男がまたいると分かったことで、更にモヤモヤしたような気分が紫苑を包む。
「…一年に一回、七夕なんて気障ったらしい…まるで織姫と彦星じゃないか」
ぼそりと呟いた紫苑に、吉良は手を止めて紫苑を見上げる。
これが七夕でなければ、紫苑も気にしなかったのかもしれないと吉良は思う。
年に一度しか逢瀬が許されない神話が、紫苑の気持ちをざわつかせるのだ。
この年下の彼氏は、意外にロマンチストだから。
「私は、年に一回しか会えないっていう神様の命令にただ従う彦星様より、どんなに忙しくても毎日連絡をくれて、此処に帰って来てくれる行動派の貴方が好きよ」
吉良は紫苑の肩に手をかけ、背伸びをして彼に軽く口づける。
「それとも紫苑、私の事を一年も放置したいの？」
慌てて容姿の良い男は、首を横に振る。

なにせ、独占したいがために、彼女を自分のマンションへ強引に連れてきたくらいだ。
一年も吉良から離れたら、孤独なウサギの様に自分が死んでしまうとさえ紫苑は思う。

「最近のあげは、なんか俺より余裕があって、むかつくんだけど…」

恋人になって一緒に暮らして、その歳月が長くなればなるほど、紫苑には吉良が愛しすぎて心の余裕がなくなっていく。
けれど、年上の彼女は歳月と共に、好きと言葉にすることも自然と出来るようになり、嫉妬する紫苑を宥めるようになったりと、余裕が垣間見える。
素直に感情を露わしてくれる事は、望んでいた事でもあるし嬉しいとは思うのだが、主導権をどんどん吉良に奪われているような気がして紫苑はならない。

「紫苑が心配性なのよ。貴方が思うほど、私はもてないの」

驚くほど色恋の感情に疎い彼女がそう言っても、説得力のかけらもない。
それに、吉良は日増しに綺麗になって人目を惹くのに、彼女自身にその自覚はない。
その美しくなる理由が、自分の存在あってこそだという事実を、紫苑も自覚していないから、やきもきする。
紫苑は吉良を抱きしめ、深いため息を漏らす。

「この間、職場で患者に口説かれたって聞いた」

不要な従兄弟からの情報が、余計に紫苑の不安を煽る。
吉良は、困ったように笑う。

どれだけ誰に口説かれようと、吉良が心を向けるのは目の前の青年ただ一人なのだから、何も心配することはないのにと。

「恋人がいるのでごめんなさいって、その場で断ったわ。院長から聞いてない？」

「聞いてない」

「…ねぇ、機嫌直して。ご飯作れないわ」

「俺よりご飯が大事？」

紫苑は明らかに怒ったような声でそう呟き、腕を解き吉良の手を掴んでそのままキッチンを離れる。

「な、何？ど、どうしたの？」

「俺がどれだけ不安になってるか、あげは全然、分かっていないだろ！俺がどれだけ吉良に惚れてるか、今から体に教え込むから覚悟して。朝まで寝かせないから！」

「えぇっ！嘘っ！？だ、駄目よ、ちょ、紫苑っ！」

突然、体を横抱きに抱え上げられた吉良は、そのまま問答無用でベッドルームへ。

不機嫌な紫苑の宣言のままに、吉良は夕飯を作るどころか、眠る事さえできない夜を明かした。

おまけへ続く…

七月七日のｌｏｖｅ　ｌｅｔｔｅｒ　後篇（後書き）

改稿にて、少し移植に関する話を詳しくしてみました。
そのせいか、吉良の台詞は長いわ、小難しい話になってしまいました…しかも、資料を見ても自分が理解できているような、出来ていないような…（汗）
しかも、医療従事者にも本来は職務における守秘義務っていう縛りが有るのですが…
これに限っては、吉良と雅人の間で、手紙で恋人と喧嘩になったらお互いの事を話しても良いという算段になっていたという裏設定になっております。
フィクションなので、このあたりはサックリスルーで（笑）

おまけはちょっと糖度上げての改稿（という名の内容増量）になっております。

七月七日のｌｏｖｅ　ｌｅｔｔｅｒおまけ（前書き）

Ａｔｔｅｎｔｉｏｎ‥
今回は、Ｒ１５程度の微エロな回想が垂れ流しデス…苦手な方はご注意を。

七月七日のｌｏｖｅ　ｌｅｔｔｅｒおまけ

理不尽にも、身を以て紫苑の愛情を幾度も再認識させられた吉良は、自分を抱きしめる男の胸に、疲れ切ったように顔をうずめた。

吉良が紫苑の過多すぎる愛情表現からようやく解放されたのは、深夜も過ぎ空が白み始める間際の頃だった。

晩御飯も食べていなければ、食事の調理に取りかかった物も、そのままキッチンに取り残されたまま。片付けなければと理性が働く半面、吉良の体は泥に沈んだように重たくて、もう指一本動かしたくない状態だった。

お腹が空き過ぎて力が出ないのか、烈し過ぎる紫苑の愛情表現に浮かされ過ぎたのか、吉良にはもう分からない。

彼女が理解出来たのは、紫苑が普段いかに気を遣いながら自分を抱いていたのかと言う事くらいだった。

今日は遠慮なんて言葉が皆無で、羞恥心すら失われるくらい乱れさせられた。

強引で、意地悪で、雄々しい愛撫は、恐いほどに彼の『男』を吉良に体に刻み込んだ。

馴染んだ相手の肌が、温もりが、自分に触れる彼のその全てが別人の様でいて、弱い所を確実に攻めてくる痺れるほどの甘美な感覚は、吉良を惑わし殊更に淫らにさせた。

終焉が来ないのではないかと思うほど繰り返された行為の最中、どれだけ果てたのかも分からない。

「紫苑の莫迦…今日も仕事なのに…」

出勤時間までに起き上がれるのかも分からない吉良は、そう非難

するように呟く。
紫苑は困ったように笑い、「ごめん」と悪びれもなく謝る。
心ゆくまで吉良を堪能した男の機嫌は、すっかり戻っていた。けれど、何時まで経っても自分との関係に溺れきらない恋人の一言は、どこか淋しい気持ちになる。

「…こういうのは…その…休みの前だけにしてね」

恥ずかしそうに、掠れた声で甘く気だるい調子で吉良に呟かれ、紫苑の心は一瞬にして晴れる。
無自覚に上手に窘めてくれる彼女に、むしろ煽られた気分さえするけれど、流石に紫苑もこれ以上は体がもちそうもない。紫苑も吉良と同じような時間から仕事がある。

「…そうする」

紫苑は素直にそう答え、自分に寄り添う吉良の、柔らかい猫っ毛の髪を梳きながら、触れ合う素肌に籠った熱りの冷めやらぬ感覚の余韻に浸る。
少しすれば、すぐに吉良からは寝息が聞こえる。
相変わらずの寝つきの良さに、不眠症の紫苑はつい羨ましくなる。

“昼は淑女、夜は娼婦が良い…なんて、良く言ったものだよな”

どこぞの先人の言葉が、不意に紫苑の脳裏に浮かぶ。
昼間の真面目な吉良からは想像もできない、夜の艶やかな彼女を知るのは紫苑だけ。
苦しげで切なげな甘い喘ぎも、快楽に浮かされて褥で艶めかしく身を捩る姿も、縋るように乞うように絡む腕も、潤んだ熱っぽい視線も。

知るのは、彼氏と言う立場にある自分だけの特権。
幾度、吉良がこの快楽に溺れて堕ちてくれたらと、思ったかしれない。
けれど吉良は、紫苑の邪な望みなどすりぬけていく。
たとえ一年に一度の逢瀬しか重ねる事が出来なくても、彦星に心囚われたままの織姫の様に、吉良が自分を求めてくれたら。
紫苑は望まずにはいられない。
最初は、彼女に自分を『見て』もらいたかっただけなのに。
それが叶えば、心を返してくれたら…彼女からの愛が欲しくなり、次から次へと消えることなく慾が湧いてくる。
愛は貪れば貪るほど我儘に、貪欲になる。
以前に比べたら、比べようもないほどの幸せに満たされているはずなのに、どんどん餓えていく。
そっと頭を上げて吉良を覗きこめば、彼女は疲れ切ったように、でも満たされ安心しきった無防備な寝顔を見せてくれる。
見ているだけで安堵し、紫苑の唇が自然と緩む。

“結局、俺が我儘なんだよな…”

我儘を許して包んでくれる吉良だからこそ、紫苑も心に素直になれる。
初めて、心に自由であることを教えてくれた人だから。
紫苑にとって、どれほどの救いだったのか吉良は知らない。
今はもう、彼女の居ない生活など紫苑にはとても考えられない。
想像しただけで、気が狂いそうになる。

“吉良にだけは、我慢なんてしないから…これからも覚悟してね?”

紫苑は彼女の髪を梳く手を止め、吉良の細い肩を抱いて軽く片腕で抱きしめる。

吉良が傍にいる幸せを感じながら、紫苑も深い眠りに落ちた。

END

それを運命とは呼ばない（前書き）

今回はスピンオフ作品で、健斗×美菜の物語。
ドS夫婦の出会いの様子で、健人視点です。

それを運命とは呼ばない

初めてその女を見たのは、研修医（インターン）の頃。
同期の研修医の中に、複合的な意味で飛びぬけた女が居る。
そんな噂を仲間内から聞いていたが、実際に見て驚愕した。
その女、西宮美菜（にしのみや　みな）には、一分の隙もなかった。
皆と同じケイシーという、ツーピースのパンツスタイルの白衣を纏っているものの、その姿は、異質だった。
白衣と言う禁欲的な服装にも関わらず、なめらかで女性らしい彼女の肢体をはっきりと映しだす。布越しでも分かる扇情的で魅力的なボディライン。
靴はナースシューズだが、普通のそれよりもヒールが高い。
特注である事は、すぐに知れる。
夜勤を連日こなしているとは思えない完璧な化粧と、ミルクブラウン色の手入れの生き届いた大きめの巻き髪。
元が少しきつめの眼をしたクールビューティーなだけに、彼女の容姿は殊更に目を惹く。

“確かに、異質だな”

ほとんどの研修医や、医者は連日の過酷な勤務でよれた格好になる。
研修医は給料が安いから、どこかの病院でアルバイトをしたりして金を稼ぐ。
平生からして、人ならざる過酷な忙しさを強いられる研修医は、文字通り病院詰めで人間生活から逸脱していく。
それ故に、睡眠時間の枯渇で顔つきも変わる。

風呂だって満足に入れないうえ、身なりになど気を使う余裕がなくなる。

現に彼女以外の女性研修医は、薄化粧さえせず、暗澹とした医者の非常識な生活に馴染み始めていた。

けれど、彼女は入社式に見たときのまま、女王然とした容姿を維持し続けていた。

もっとも、日本の美容業界ナンバー1である企業の社長令嬢なのだから、俺同様に他の研修医に比べ、バイトをせずとも金にも自由が利く。

だが、俺がその姿を見たのは小児科病棟で、仕入れた情報では、同じ小児科に回された研修医がぶっ倒れて、この数日は夜勤を連勤し、そのまま外来診療に入っているという話だが…。

その女には、過酷さを謳う疲れた様子は何一つ見えない。いや、見せていない。

ピンク色の白衣や、子供が好きそうなアニメのキャラクターが縫い付けられたエプロンを身に付けた看護師たちの中で、ひと際、浮くほどに美しかったのだ。

彼女の周囲には、何故か笑顔の子供たちがたくさんいた。

どう考えても、子供には威圧感しか与えない姿であるにも関わらず。

「美菜しぇんしぇ～」

舌っ足らずな子供ですら笑顔で、彼女にすすんで抱きついていく。

「こんにちは」

柔和に微笑み話しかける姿に、俺は納得がいった。

“こいつは根っからの子供好きだ”

どう見ても、おとぎ話に出てくる悪い継母の様な容姿で、同僚の男共に向ける視線は冷徹であるのに、子供たちに向ける瞳は慈愛に満ちている。
面白い女だと、思った。

§

「…どういう詐欺を働いたら、餓鬼があんなに集まるんだ？西宮」
ナースステーションに戻り、円形のカウンターで医師記録を記入していた西宮美菜に、俺はそう声をかけた。
近付いた俺を見上げた瞬間、彼女の瞳に冷めた色が映る。
彼女は、敵意むき出しの微笑みを浮かべる。
美しい容姿に相まって、この女の心は棘だらけ。
何人もの医者や研修医が彼女に手を出して、即座に玉砕している。
「人徳と言っていただきたいわね、榊健斗」
「良く俺の名前がわかったな？」
「女癖の悪さで有名でしてよ？」
歯に衣着せぬ口の悪さに、周囲の看護師たちの方が青い顔をした。
直系に近い俺に下手な事を言えば、首が飛ばされると彼女たちは思っているのだろう。
現に、直系筋の榊凱がこの一カ月に二人、素行に問題のある看護師を退職に追い込んだ。
だから、研修医である俺たち榊の新米医師にどの職員も謙り、ほとんど当たり障りのない事しか言わない。

「それから、他の男と違って身だしなみに気を使っている、珍しい人種ですから」

確かに、俺も他の奴らとは違い、身形にはそれなりに気は使っている。

それでも、小奇麗程度だ。

西宮の様に、徹底して自分を洗練させるような下手な真似は打たない。

榊の人間と言えど、重鎮の医者に目をつけられると面倒だからだ。

「珍獣扱いか」

「仕事もロクになさらないダメ男と、申し上げたのよ」

「に、西宮せんせぇ～」

悲鳴交じりに、周囲の看護師が彼女の名前を呼ぶ。俺ではなく俺の背後にある『聖心会』という榊の影に怯えているのは明白だった。

だが、西宮は何一つ動じた様子もなく、言葉を続ける。

「インターンが勤務中に、このような所にフラフラしているのが良い証拠。さっさと外科にお戻りになったら？」

まるで目の仇の様な発言だ。

他の野郎が悪し様に、口が悪いと噂する訳だ。

それにしても、相手が俺の配属先を理解しているのは異なことだ。

「俺の配属先まで情報収集済みとは…お前、俺に惚れてるな？」

刹那、相手は侮蔑的な眼差しを俺に向けた。

「あたくしは、実家の権力にものを言わせる男も、女に節操がない男も、仕事意欲もない道楽主義の男も嫌いなのよ」

周囲の看護師たちの手が一斉に止まり、視線が一気に彼女に向けられた。

「そ、それ以上は駄目ですよ、美菜先生！」

「首飛んじゃいますっ」

「健斗先生、美菜先生は連日徹夜で疲れているだけですから、戯言ですからっ！」

「さらっと、流しちゃってください！」

必死になって西宮をかばう看護師たちに、俺は疑問が浮かぶ。

これほど高慢で容姿の良い女は、総じて女に嫌われる傾向があるはずなのだが、西宮にはそれがない。

子供たちに好かれることと言い、看護師にもかばわれる事と言い、この女はなかなか人中掌握術に長けているのかもしれない。

男に関しては、その能力は全く発揮されないようだが。

「戯言にしては熱烈な言葉だな、美菜」

突如、西宮は椅子から立ち上がり、俺のネクタイを掴んで引っ張る。

「よろしい事？あたくしの名前を呼べるのは、あたくしの夫になる男だけ。次に口にしたら、貴方のそのふしだらな下半身に、自重と言う言葉を教えて差し上げてよ？」

間近で凄艶な笑みを浮かべ、艶めかしい声で恐ろしい事を口にした女に、俺はニヤリと笑みを返す。

俺を榊の人間と知って、此処まで挑発的なもの言いが出来る剛毅とも愚かとも言える、この女の態度は俺の加虐心を煽る。

相手は俺の反応を予想できなかったのか、わずかに驚いた表情を見せた。
俺のネクタイを持つ、西宮の手が緩む。
その隙を、俺は逃さなかった。
西宮の頸に手をのばし、後頭部を押さえるようにして彼女の体を素早く引き寄せ、そのまま唇を重ねた。
周囲の看護師たちから、悲鳴のような黄色い声が響く。
刹那、俺の脛に強烈な蹴りが入る。
容赦もなければ、実に場慣れしたカウンター攻撃だった。
思わず西宮を離し、苦痛に顔をしかめる。
蹴られた脚を押さえるような屈辱的なポーズは、俺のプライドにかけて絶対にとらなかった。
熾烈な性格の美女は動じた様子もなく、冷やかに笑う。
「稀に見る下種男ね？あたくしの手で、直々に社会的抹殺に処して差し上げてよ？」
こういう気の強い女は嫌いじゃない。
単に男に飼い慣らされるだけの、お飾りの女には絶対にならない。
それに、魅力的なプロポーションも好みなら、己の美を最大限に生かす事を惜しまない美意識の高さも好みだ。
まさに俺の理想を体現したかのような女だ。
ただし、この暴力的な所だけは減点だ。
「気に入ったぞ、お前。いずれ、後悔するほど啼かせてやる」
「泣かせる？逆に、泣かせて差し上げてよ」
俺の言葉の意味を正しく理解出来なかった女は、絶対零度の冷徹さに満ちた笑みを湛え、そう言葉を返した。

西宮のその自信に満ちた顔に、後悔の念が浮かぶのは、もう少し先の話だ。

END

儚いからこそ、花火は大輪を咲かす　1

吉良あげはが、榊健斗に呼び止められたのは午前診療の後だった。

「吉良、ちょっと来い」

不機嫌よろしく、人差し指で来いとジェスチャーをした院長に、吉良をはじめその周囲にいたスタッフが凍りつく。

こうして榊健斗がスタッフを呼びつけるときは、ほとんどがお咎めをする時だ。

さっさと診療室に戻っていった健斗に、仲間が吉良を心配そうに見る。

「…あげちゃん、何したん？」

「…さぁ？何したんでしょう、私」

吉良も、思い当たる事がなくて首を傾げるしかない。

「あげはちゃんは仕事中、ミスらしいミスなんてなかったわよ」

「この間の研修レポートは提出済みだし…シフト表は出来上がって確認ＯＫ貰ったし、物品発注も問題なし。カルテチェックも良いし…」

指折り数えながら、次々に自分の業務を確認していく吉良に、仲間が複雑な苦笑いを浮かべる。指を折るごとにその業務が本来は院長がすべきものになったからだ。

「それなら、何であんなに院長の機嫌悪いんだろうな?」
「それ言うたら、健斗先生の機嫌悪いんは今朝からですやろ?普段やったら、朝礼前に呼び出ししはる所ですえ?」
「そうなると、『聖心会』絡みのパーティー話だ」
その言葉に、吉良を除いた皆が一様に頷いた。
健斗は定例的に開かれる一族のパーティーの話が出ると、しばらく不機嫌になる。
彼曰く、
「勝手知ったる野郎共に愛想笑いを浮かべて、キツネとタヌキの化かし合いをして、何が楽しい。女相手ならまだしも」
…だ。
同じ榊一族だからと言って、仲が良い訳ではない。
いくつかの派閥があり、本家だの分家だと変な格差をつけ、水面下で侮蔑の応酬。常に虎視眈々と会長職の座を狙って腹の探り合いをしている。
健斗自身は、そういった話術はお手の物だが、女ではなく男相手と言うのが、健斗の興味を著しく減退させている。
「吉良ちゃん、ホスト役のご指名かもよ」
本来ならばそれは妻の美菜の役割だが、『聖心会』系列の病院の院長と言う肩書きでの出席の場合、クリニックの内情を把握している吉良がホスト役としてほぼ付き添う。
無論、健斗の指名で。
スタッフの全員が、そのホスト役を務めたが、誰も二度と行きたいとは言わない。
健斗がまき散らした毒の尻拭いが大変な上に、収拾がつかなくな

る事態に陥り、凄惨な目にあったからだ。

「あげちゃん…ガンバレ☆」
「骨は拾うから」
「心おきなく、逝って来い」

一様に合掌ポーズをした仲間に、吉良は苦笑する。
ライオンの親の様な、優しい愛情というか、何というか。
吉良には、院長の面倒を丸投げされた気分だった。

「…と、とりあえず、行ってみます」

待たせて不興を煽る前に、吉良は足早に診療室に赴く。
入口の扉で立ち止り、一度、ゆっくりと深呼吸をして扉をノックする。

「吉良です、入ります」
「あぁ」

扉を開いて中に入れば、健斗は椅子に腰を下ろして、机の上にある二通の白地の封筒に視線を向けていた。
吉良が部屋に入ったのを確認すると、健斗はその封筒の一つを手にとって吉良に差し出す。
上質な封筒の周囲には真紅の薔薇の刻印が刻まれ、『眞鍋あげは様』と中央に黒の印字で名前が記されている。
それは、医療法人『聖心会』グループの会長主催のパーティーの招待状である事を示していた。
吉良の表情が、途端に険しくなる。
眞鍋の姓は、彼女が両親と絶縁し除籍した際に一緒に捨て、今は吉良姓を名乗っている。

吉良姓を名乗っている事は、榊会長も知ってるため、これまでにも何度か吉良は会長主催のパーティーの招待状を受けたが、全て『吉良あげは』となっていた。
誤植したとは考えにくい。
吉良は差し出された封筒を受け取り、封筒を開いて葉書大のカードを抜き出して内容を確認する。
榊の本宅で行われる、内輪だけのパーティーへの招待の言葉が記された最後には、差し出し人の名前。
それを見て、吉良は名前が違うことに納得する。

「…院長、良くこれを預かりましたね？」
「断っても良かったが、あいつから頭を下げたんでな」

差出人は、健斗と折り合いの悪い榊の人間。
健斗が配達役を引き受けたことも、その相手が健斗に頭を下げることも吉良にはとても想像できない。
しかし、皮肉気に笑った健斗の態度から、相手が頭を下げたのは事実のようだ。

「あいつが俺に頭を下げてまで、お前に会いたいと言ったんだ。どんな面をして対面するのか楽しみだから、今度の土曜、絶対に明けろよ」

楽しみと言ったその男の表情には、愉悦を期待するような物は一切なかった。
あったのは、毒は吐いても怒りは殆ど見せない男の、静かな怒りだけ。
吉良はただ、「はい」とだけ答えた。
彼女に断るという選択肢は、与えられていなかったから。

§

「え？しばらく帰って来られないの？」

吉良は一日に一度、必ずある榊紫苑からの電話を受け、思わずそう言葉を漏らした。

ドラマの撮影を二本抱えている為、このところ帰っては来てもすれ違いで顔を少し合わせる事しかなく、ゆっくり話をするのも電話だけ。

その彼から、撮影の都合で数日は戻れないと言われ、吉良は無意識にその言葉を口にしてしまった。

普段は数日帰宅できないと言う連絡が来ても、その言葉を絶対に口にはしない。

紫苑にはどうしようも出来ない事を口にして、彼の気分を害し仕事の邪魔になるのが嫌だったから。

電話口で、榊紫苑は恋人の言葉の中にある異変に、何となく気付く。

『…どうしたの？何か困った事でもあった？』

「え？あ、ううん…そうじゃないの」

慌ててそう答えたものの、吉良の言葉も歯切れが悪かった。

自分でも、どうして何時も言わない言葉を口にしてしまったのか、とっさに分からなかったのだ。

『何?また患者に口説かれたとか?もしかしてこの暑さで体調崩したとか?大丈夫!?』

心配そうに尋ねてきた相手に、吉良はくすりと笑う。

何気ない一言で、色々心配してくれる紫苑に、胸が温かくなる。

「ううん。違うの…ただ…ちょっと、紫苑に会ってギュッと抱きつきたいなぁって…」

昼間のパーティーへの出席話で、自分がひどく心細くなっていた事に、吉良はそこでようやく気がついた。

だから、彼に無性に会いたくなっていたのだ。

「しばらくそれが出来ないんだなぁって、残念だっただけ。ごめんね」

電話口から紫苑の深く長いため息が吉良の耳に聞こえた。

『あのさぁ…そう言う誘い文句は、ホント勘弁して。仕事サボって、今すぐあげはの所に帰りたくなるだろ』

「…え?」

『だから、今すぐ帰ってあげはを抱きしめたくなったんだけど?』

自分が放った言葉の意味を自覚していなかった吉良は、自分が紫苑に甘えたいと無意識に言っていた事を、ややあって理解する。

一気に自分の頬が、熱を帯びていくのを吉良は感じた。

「…う…あ…うぅ…恥ずかしい事を言いました…ごめんなさい」

電話を持っていない手で、自分の顔を押さえて、消え入りそうな声で吉良は紫苑に謝罪する。
再び、電話口で深いため息が漏れる。
恥じ入られると余計に相手の心を刺激する事に、吉良は気付かない。

『…頼むよ、あげは…俺、マジで襲いに帰るよ？』
「こ、来なくていいからっ！し、仕事に集中して！終わって帰ってくるまで、待ってるから！…って、待ってるって、襲われるのは、期待してないからねっ！」

どんどんドツボにハマっていく吉良に、榊紫苑が電話の先で淫靡に笑うのが分かった。

『分かったよ…戻ったら、あげはの望み通り気絶するまで深く愛してあげるから、覚悟して待っていて？』

そんなことは誰も言っていないと否定するよりも先に、紫苑の声が吉良の脊髄を甘く痺れさせる。
ゾクリと、紫苑の誘惑に惹かれそうになった吉良は、己の思考を振り払う。

「エ、エロい声で、エロい事をさらっと言わないでぇっ！」
『俺をエロくするのは、あげはだけだよ』

吉良が耳まで朱に染めて声をあげれば、耳元でダイレクトに紫苑の低音の美声が響く。
胸を甘く締め付け、心を淫らに惑わせる囁きに、吉良は「莫迦ぁ！」と叫んで電話を切ってしまった。

「はぁ…もう、紫苑の莫迦。最近、エロさに磨きがかかりすぎ…こっちまで、変な気分になっちゃうじゃないの…」

携帯電話をリビングのガラステーブルの上に置き、吉良はそのテーブルの上に突っ伏して恥ずかしさを一生懸命、誤魔化そうとして自分で撃沈する。

「本当は、そんな話がしたかった訳じゃないんだけどなぁ…」

吉良は体を起こし、携帯電話の横に置いてある、昼間に渡された招待状を手に取った。

儚いからこそ、花火は大輪を咲かす　3

招待状に直筆で書かれた差し出し人の名前。
榊凱（さかきがい）。
性格を表すように几帳面で整った、少し神経質っぽい筆跡は相変わらずだった。
現『聖心会』の会長の三男で、ドイツに留学していた脳外科医で、年齢は榊健斗と同じ。
榊の人間は長じて容姿端麗な人間が多く、凱の容姿も例外ではない。
特に健斗と凱は美形医師として、女性職員・患者からも人気が高かった。
ただし、双方共に性格には大きな難がある。
榊凱は仕事において完璧主義者で、かなり気難しくスタッフ泣かせであった。そのため、自分が認めたスタッフを重用する傾向があった。
前職場で吉良がオペナースをしていた時、凱は彼女を器械出しに頻回に指名した。
吉良はどのような医師の器械出しでも、相手の癖を理解し相手に合わせる事が出来た。それ故に、榊凱の手術において、吉良は最良のパートナーであった。
数多くのオペをともにした二人は、ある種の戦友でもあった。
懐かしい記憶に、吉良の表情が自然とほころんだが、すぐに表情は消える。

「…もう、五年かぁ」

吉良は一人、そう呟いた。
榊健斗から聞いた情報によれば、凱は三日ほど前に留学先から戻ってきたらしい。
彼女が榊凱と最後に話をしたのは、五年前。
彼が留学をする直前の事。

“凱先生は、怒ってるだろうなぁ…”

最後の別れ方が別れ方なだけに、お互いにこの四年間、連絡を一切取っていない。
いや、吉良が一方的に、仕事を辞めたことも、携帯電話や住所を変えたことも、姓を変えたことすら知らせなかった。
一方的に、自分から完全な音信不通状態を作っただけに、相手も強行手段に出たのかもしれないと、吉良は思った。
榊本家の力を使えば、どこにいようと、すぐに吉良の消息やその生活など把握するのはたやすい。

“嫌っていた榊の力を使うなんて…”

吉良はぎこちなく笑う。
法人主催のパーティー程度なら吉良も出席するが、榊一族の内輪だけのパーティーに出席など論外。
政財界などから著名人が招かれる事があるものの、基本的には部外者は立ち入れない。
榊の人間の婚約者であれば例外もあるが、吉良の様な一介の看護師が招待された事例はないのだ。
しかも、真紅の薔薇の刻印入り。
真紅の薔薇の刻印は、拒否権の無い絶対執行の招待状。
一介の看護師にすぎない吉良が、それを反故にすれば榊の命令に反したとして、看護師として生きていく事は出来なくなる。

凱が今回の様な強引な手段を取ったのは、吉良にとっては初めての事。
彼は榊の人間でありながら、その力を行使することを嫌っていた。
「紫苑に聞いたら、凱先生の事、少しは分かるかと思ったんだけどなぁ…」
健斗と凱が前職場時代に不仲である事を目の当たりにしているので、吉良は健斗に聞く事は出来なかった。
だから、紫苑に話をしてみようと吉良は考えていたのだが、話題になる前に話を強制的に終わらせてしまった。
榊健斗は父が榊会長の弟、母が傍系の榊一族という極めて稀な家系であるため、吉良は健斗の従兄弟である紫苑を傍系の人間として勝手に認識している。
本家筋であれば、医者ではない人生を選択することなど不可能だから。
紫苑本人も健斗も、その誤った認識を正そうとはしない。意図的に隠されているので、吉良は紫苑の正しい出自を知らないまま。
その為、例え傍系でも、多少なりとも本家筋の情報は入るので、凱の事を聞いてみようと思っていた。よもや紫苑と凱が異母兄弟でしかも兄弟仲が最悪であることなど、吉良が知る由もない。
吉良としては、欲しい情報が取得できなかったので残念ではあるが、話題に上がらなかったのは、結果として不幸中の幸いだった。
「ま、しょうがないか」
吉良は自分の左手薬指にある指輪に視線を下ろし、そっと右手の指でなぞる。
ピンクサファイアの鏤められたその指輪をくれた相手を思い出し、ふと笑みが浮かぶ。

したかった話は出来なかったけれど、年下の恋人との他愛のない話で沈んでいた気持ちが払拭されていた。

「なるようにしかならないんだから」

そう言いながらも、一抹の心細さが残った吉良は、当日、お守り代わりに紫苑がくれた指輪を身につけていこうと心に決めた。

§

「…院長」

吉良あげはは、運転中の榊健斗に視線を向ける。

相手はテーラーメイドのタキシード。

ドレスシャツにアスコットタイというパーティー仕様のいでたちを、一分の隙もない華麗な着こなしで決めるあたりに、この男の育ちの良さを感じる。

彼は愛車であるランボルギーニ社のディアブロのハンドルを握り、癖のある車を体の一部の様に操作する。

「何だ？」

運転の隙を見て、健斗は助手席の吉良をちらりと見てすぐに視線を前に戻した。

嫌味なほどに様になると、吉良は思った。

対して、吉良は浴衣。

淡い紫と白の生地に、大輪の薔薇と蝶が描かれたそれを纏い、髪は黒髪ショートボブのウイッグ姿。爪も浴衣に合わせて装飾されている。

さながら日本人形の様だった。

吉良のコーディネートを施したのは、健斗の妻美菜で、浴衣は特注品。

榊紫苑に会えないまま約束の土曜日となり、文字通り人形の様に、有無も言わさずこの姿に仕立て上げられた。
そして、今、パーティー会場に向かうべく榊健斗が運転する車の中にいる。

「浴衣を着る意味がどうしても分かりません…」
「お前、凱の名前に気を取られて、招待状を細かく見てなかったな？」

言われて吉良は、改めて手元にある榊家のパーティー招待状を見る。
招待状の裏側には、ドレスコードの注意書きがあった。

『女性は浴衣着用の事』
「…どうして女性だけ？」
「海外からＶＩＰが来る。日本贔屓で大和撫子が好きだっていう、そいつらの眼の保養の為だ」
「…はぁ…大和撫子…」

このご時世にあって絶滅危惧種な大和撫子を、上っ面だけで量産しようという計画かと、吉良はため息をもらす。
何故自分が、黒髪のカツラまで付けることになったのか、それで少し納得がいくが、腑に落ちない事もある。

「それならむしろ、着物の方がいいと思いますけど？内輪の‘ホームパーティー’とはいえ、榊のような財界人も訪れる様な大規模で派手なパーティーに浴衣はＮＧだと思うんですけど？」

榊のそれは、すでにホームパーティーの域を超えている。いくらドレスコードで定められたとしても、本当に大丈夫か不安でならな

い。
口角を歪め、美貌の紳士は横目で楽しげに吉良を見る。
「着物よりは、脱がせやすいからだろ？」
「…帰っても良いですか？」
「その場合、このままホテルに直行して、俺が代わりにお前を剥けば良いのか？」
「な、なんでそうなるんですかっ！？」
「艶やかな格好をしたのに剥かれねぇなんて、女が廃るぞ」
「廃っても良いので、脱がせないで下さい」
「凱の面を見るより、ベッドで俺に啼かされた方が楽しいと思わんのか？」
「院長は恋人じゃないので結構です」
「だから背徳感があって良いんだろうが」
「…はぁ…もう、どんな発想ですかそれ」

吉良は額を押さえ、頭を横に振る。
恒常化しているこのセクハラ発言だけは、どうにもいただけないと吉良は思う。

「外見が良くても、それじゃあ、ただのセクハラオヤジですよ」
「容姿が良いとは褒めてくれる訳か」

紳士の皮を被ったサディストは、微かに唇の端を緩める。
どれだけポジティブシンキングなのだろうかと、吉良は首を竦めて微かに笑う。

「中身は立派なセクハラオヤジですけどね？」
「男から性欲とったら何も残らないだろうが」
「…それは院長だけです」

容赦なく鋭く突っ込んだ仕事のパートナーに、健斗は鼻で笑う。

「その調子でいろ。どうせ、あの会場にいる連中は、俺と中身は似たり寄ったりのおっさん連中だ」

吉良は困惑気味に笑う。

凱に数年ぶりに会うこともそうだが、榊家の内輪のパーティーに出席する事は、一般人の吉良には敷居が高過ぎて一層に緊張する。

その緊張をほぐそうと、健斗が下らない事を言っているのを、吉良は十分承知していた。

「不出来な部下ですみません」

「手がかかる女ほど可愛いもんだ」

さらりとそう言って、その男は普段の皮肉気な笑いを浮かべた。

儚いからこそ、花火は大輪を咲かす　5

§

車内での健斗の冗談が功を奏したかはさておき、幾許かの落ち着きを取り戻した吉良だったが、榊の本家邸に愕然としていた。

「…院長、ここ個人宅ですよね？日本ですよね？？」

門をくぐりぬけても、車で数分走らねば玄関にたどりつけない。庭に道路がある時点で、まず吉良には未知の世界だった。

眼下に広がる広大な敷地は、剪定の生き届いたイングリッシュガーデン。

屋敷の前には大きな噴水。ロータリーの様に噴水を囲んで、道路が整地されている。

屋敷の外観は貴族が住むような瀟洒な洋館で、一歩足を踏み込めば高級リゾートホテルの様な内装。

「や、やっぱり、私、場違いですよっ」

小声で隣の男にそう言えば、健斗は片眉を歪める。

「ジジイがババアのために道楽で建てた家だ。気にするな」

「む、無理です」

道楽程度で建てられるほど安い作りでもなければ、規模でもない。元々、母方が財閥出身であった『いずみ病院』の創始者には、大

した物ではなかったのかもしれないが、庶民の吉良にはやはり場違いとしか言いようがない。
会場となる大広間には、何となく見た事のある財界人や、本院に勤務する榊の主要な医者やその家族の姿がある。

「相変わらず、本家は派手好きだな」

健斗はさしておもしろくもなさそうにそう呟く。
吉良の目からすれば榊の本家も、健斗も突き抜けた金銭感覚で派手さはさして変わらない。だが、質には拘るが奢侈ではないと自負する健斗からすれば、本家は全てにおいて華美が過ぎて嫌味が残る。

「俺は、こういう場所は好かん。さっさと切り上げて帰る心積もりだけしとけよ」
「あ、はい…では、早めに会長たちにご挨拶を済ませた方が良さそうですね」
「あぁ、会長ならあそこで歓談中だ」

この場で成すべき優先順位を即座に頭の中で構築し、第一位を告げた吉良に健斗は視線だけで相手の居場所を示した。
彼の視線の先には、現『聖心会』会長である榊雄（さかきゆう）の姿がある。
榊雄は、杖を持った大柄なタキシード姿の男と、長身でスタイルの良いチャイナ服姿の女性と、楽しげに歓談している。
その榊雄と吉良は不意に視線が合い、それまで榊雄と話をしていた長身の男女が、二人を振り返る。
何というか絵になる美男美女で、男性の方は三十代半ばであり、杖を持つには不似合いに思えるがっしりとした体格をしているので、恐らく足が悪いのだろうか。アジア系で顔の造形から中国人だろうと推察できる。
女性の方は欧米人で、近寄りがたいほど整った美貌をしている。

顔もさることながらチャイナドレスで際立つ体型はモデルの様に華奢ではなく、女性らしい曲線が女性の吉良から見ても嘆息を誘う。
モデルか何かだろうかと吉良が身惚れながら彼らに軽く会釈をすると、相手は榊雄に視線を戻し、何言か話をして隣にいた長身の男性とその場を離れて行った。

「すっごい美人…」

黒のピンヒールで颯爽を歩くその女性の後ろ姿を見ながら吉良は、感嘆の声を上げる。

「あれは…マリー紅(ホン)か。ＶＩＰの連れて来た客だな」
「マリー・ホン…って、香港の若手事業家の？十八歳で年商五億を稼ぎ出しているって話題の？」
「詳しいな、お前」
「昨日、彼女が日本でプロデュースしたカフェへ美菜先生と行った時に、美菜先生がいろいろ教えてくれたので、偶然」

恐らくそれは偶然などではない。
何処からかパーティーの出席者を調べ上げ、その情報をさりげなく吉良に叩きこませていた妻に、健斗は薄く笑う。
美菜は自分が健斗の隣に立てない時は、吉良に必要最低限の情報をそれとなく仕込んでいる。吉良にも健斗にも恥をかかせぬよう、そっと陰で配慮している。

「あいつは千里眼だな」

妻を思い出し柔和な笑顔を浮かべた男の呟きに、吉良は笑いを堪える。

「院長、奥様を思い出して、鼻の下が伸びてますよ?」
「あぁ。良い女だと、惚れ直した所だ」
「院長って、美菜先生の事だけは素直ですよねぇ」
「なんだ、やきもちか?」
「違いますよ。そう言う所は紫苑と同じだなって、思っただけです」
「お前、どさくさまぎれに俺に惚気たな?」
「ちっ…違いますっ!」
「罰として、帰りにホテル直行だな?」
「な、何時までそのネタ引っ張るつもりですか!?」
「お前が首を縦に振るまで」
「ふりません!」

周囲を気にして小声で強く否定をした吉良を見て健斗はうっすらと笑っていたが、すぐにその表情は消える。

「…相変わらず仲が良いようだな、二人とも」

声のする方を吉良が慌てて振り返れば、そこに榊雄が立っていた。

吉良は会長に向き直り、頭を下げる。

「お久しぶりです、榊会長。御挨拶が遅くなりました」

「そう畏まる事はない。息災でやっているか」

「はい」

顔を上げた吉良は、顔を上げて恰幅の良い相手を見る。

多少、太身になったとはいえその容姿は、榊一族の誇る美麗な外観を損なうことはない。

むしろ、七十にさしかかろうとする男には、貫禄と渋みが増したと言える。

相手は、しばしじっと吉良を見る。

「昔に比べ、内面から滲み出る艶やかさがあるが…恋人でも出来たか？」

「え…あ…はい」

他人から言われる恋人という響きが、吉良は少し照れくさくて、はにかみながらそう答えた。

その様子に、榊雄は目を細める。

吉良が交際している男が実は自分が勘当した末の息子であるという事を、聖心会の会長は把握している。だが、それをおくびにも出さない。

「良い男か？仕事を辞めろなどという、男ではあるまいな？」

「仕事の制限はされません。私のやりたい事は尊重してくれますし、彼は自分がどれだけ忙しくても、優しく大事にしてくれます」

意外にも大胆に惚気た吉良に、滅多に笑わぬ男の表情が、穏やかなものに変わる。

吉良は視線を下に向けていたので気付かなかったが、隣にいた健斗はしっかりとその変貌を見ていた。

“紫苑が気になるなら、勘当といて頭下げりゃ済む話なのに。このおっさんもプライドが高い上、相当な頑固者だ”

医師の道を選ばなかった紫苑を、榊の名を名乗る事のみ許して勘当した会長。

雄は歳を過ぎてから出来た末の息子である紫苑を、かなり溺愛していた。だが、雄はあまり子供への愛情表現は得意ではなく、どの息子たちにも、素っ気ない必要な会話程度しかしたことはない。

紫苑は愛人の子供だったこともあり、父親からの愛情を殊に注がれている事を悟った他の年の離れた兄弟との仲は悪く、榊の本家での居場所がなかった。

それに加え、雄は幼少期の紫苑に不用意な言葉をぶつけて紫苑の心を深く傷付けてしまった。それ以来、紫苑は父親を倦厭し、榊の一族である事も、医者になることにも強く反発し、早くから芸能生活で自活する術を得て榊の家を飛び出した。

紫苑が家を飛び出す前に、親子の壮絶な喧嘩があり、それが今も二人の間で大きなシコリになっている。健斗はそれを知るだけに、内心で呆れる。

「仕事に理解のある男ならば良い。健斗の所に飽きたら、何時でもわたしに言うと良い。本院に戻れるように早急に手配する」

「申し訳ないんですが、こいつを飽きさせるつもりはないので、口

説くだけ無駄ですよ」

吉良が返答に困ると、榊健斗が素早くそう返事をする。

雄は独占欲の強い甥を見て、鼻で笑う。

「相変わらずだな、健斗。立ち上げた病院も、ずいぶん繁盛しているようだな」

「俺の所が儲かるのは、世の中が病んでいるからですよ。俺の力じゃありません」

健斗が皮肉気に笑えば、雄は同じように笑みを返す。

時代の流れと共に心を患う人間が増え、うつ病の患者数も増えている。

健斗は睡眠外来を立ち上げているが、専門は精神内科。平たく言えば、彼は精神科医。

うつを発症する人間は不眠症状などを伴う事が多く、うつであると無自覚であるものが多い。

そして、日本人の心理的に『精神科』という名前に快い感情がない。そのために抵抗感を抱き、病院を受診しないまま悪化するケースが多い。

そこに着眼し、健斗は『睡眠外来』を主体にした病院を興し、睡眠障害を起こしているうつ病患者を治療している。

外科医の多い一族からは、精神科医など医者ではないと冷ややかに揶揄されたが、結果的に、四十を前にして病院を興し、それを成功させたのは健斗だけ。

慈善事業で病院は賄えない。利益追求だけでは患者は獲得できない。

三年あまりの短期間に、患者を集客し病院に固定させ、経営を軌道に乗せるのは容易なことではない。

医者としての才覚と、企業家、経営者としての才覚も伴って初め

て成功した事例なのだ。

「操は良い息子に恵まれたな」

「どうでしょうね。親父は外科医になれなかった手先の不器用な俺を、白眼視していますから」

「外科医ばかりが医者でもない。経営者側からすれば、多方面の治療に対応できる医師が揃っていた方が良い」

「親父も、会長ほど理解力があればよかったのですがね」

健斗は伯父に首を竦めて見せた。

“ま、所詮、医者以外は職業じゃねぇって思ってる輩達の総大将だけどな”

それでも、有能であれば何科の医師でも良い程度の理解力があるだけ、伯父はましだと健斗は思っている。

「ところで、吉良に紹介状を送りつけた張本人はどこですかね？」

「さっきから姿が見えんな」

「…探すか。吉良、行くぞ」

「え、い、院長！」

挨拶もせずに歩き出した健斗に、吉良が慌てる。

「も、申し訳ありません、会長。これで失礼いたします」

深々と吉良が頭を下げれば、雄は小さく頷く。

「凱とゆっくり話をすると良い。積もる話もあるだろう」

その言葉に、吉良は複雑な表情を浮かべた。

「はい。では、失礼します」

吉良は再び礼をして、会場の人込みに消えていった健斗の後を追いかけた。

§

「どこ行ったのかしら、院長…」

先に行ってしまった健斗を追いかけたが、人込みに紛れて彼を探し出すことができなかった吉良は、ひとまず人気の少ない庭先に出る。

携帯電話を取り出し、健斗に電話をかけてみるが通話中で繋がらない。

吉良は携帯電話を下ろし、ため息を漏らす。

ただでさえ心細いのに、話相手の少ない場所に一人で置かれるのは余計に心許ない。

「別嬪さんがため息なんてつくもんやないで？」

少し離れた横から声がして、吉良はそちらに視線を向ける。

年齢は五十台半ばの胡麻塩頭の男は、ウイスキーの水割りが入ったグラスを片手に、庭先から吉良の方へ歩いてくる。

その姿を見て、吉良は驚愕する。

「ウー先生！」

中国籍で香港を拠点に活動する脳外科オペの権威である外科医、胡飛その人だった。

分単位のスケジュールで、多忙な日々を送っているといわれる彼の人が、此処にいる事に吉良は驚愕する。
日本贔屓で、日本語も関西系だが堪能だ。
健斗が言っていたＶＩＰは、彼の事かと吉良は瞬時に悟る。

「うぉ、ばれた！？」

体全体で驚きを表現した男は、慌てて吉良の手を取り、逃げる様に人気のない場所へ駆け込む。それでも、ライトアップはしっかりされており、大声を出せば邸に声が届く場所で、吉良の不安感を煽るような場所ではなかった。

「悪いが、内緒にしといてぇな。次から次へと話しかけられて、落ち着いて酒も飲めんし、息苦してしゃぁない」

矢継ぎ早に寄ってくる人間達から隠れるように逃げていたらしい相手は、片手で拝む様な格好をして吉良に頼み込むので、吉良は素直に頷く。

「くっそぉ…榊に騙されたっ…内輪のホームパーティーで、別嬪さんたくさん用意したからのんびり遊んで行けとか…嘘はないねんけど、真実じゃあらへん！のんびりできるかっ！」

言葉の裏をかくのが榊のスタイルなので、吉良は裏を読まなかった素直な相手に苦笑いする。
最も、榊の内輪は医者ばかりなので、目の前の有能な脳外科医を逃すはずがない。

「心中お察しします。先生は相変わらず、多方面でお忙しいんですね」

蝶ネクタイを外したタキシード姿の胡は、吉良をマジマジと見て首をかしげる。

「お久しぶりです」

「あれ、小姐（お嬢さん）、どこかのオペで会ったかいな？」

「はい。四年ほど前に、いずみ病院で行われた脳幹部の巨大腫瘍の手術の時に」

「あぁ！流れるような器械出しで、わしに気持ちようオペさせてくれた、あのナースか！確か、眞鍋言うたな？」

吉良は自分の事を姓まで覚えていた相手に、驚く。

「はい。名前を覚えていていただけで光栄です」

「覚えとる覚えとる。雄に、小姐をわしの所に留学させへんか言うたんを、断られたしの」

自分の知らない所で、そのような話があったことなどついぞ知らなかった吉良は、目をしばたたかせる。

「オペ着や白衣も凛々しかったが、浴衣もまた色っぽくてええの」

胡は破顔する。

「日本の夏は、浴衣に花火がないと物足りん。榊に条件出しといて正解やった。小姐を見れただけでも、日本に無理してきたかいがあったちゅうもんや」

ドレスコードを浴衣に変えた張本人に、吉良はにこりと笑う。

「先生は日本文化がお好きですものね」
「文化が好きっちゅうか…まあ、別嬪さんが単に好きなだけのおっさんやな」

そう言って笑った胡飛には、まったく嫌味も色を含んだいやらしさもない。社交辞令である事はすぐに分った。

「眞鍋がこのパーティーに来るっちゅうことは、あんときの榊の坊っちゃん先生と結婚したんか？」
いきなり地雷を踏んだ相手に、吉良は困ったように首を横に振る。
「いえ今日は、上司のホスト役で同伴を」

説明するのが難しかったので、さし障りのない説明をした吉良に、胡は不思議そうな顔をする。

「…？上司は凱やあらへんのか？」
「ウー先生のオペに参加させていただいた直後に、外来だけの病院に移ったので」
「ちゅうことは、今はオペには入りよらんのか？」
「えぇ」
「せやったら、榊に遠慮せんとわしが眞鍋を勧誘してもかめへんわけやな？」
「…あ、あの、ウー先生…実は私、今は眞鍋姓ではなく吉良姓なんです」
「…日本は夫婦同姓やったな？ちゅうことは結婚したんか？ほんなら、なかなか一人でホイホイとは香港に来られへんな…夫婦は仲睦まじせななら ん。わしの誘いは忘れてくれや」

誤解したまま話をそう完結させた相手に、吉良はあえて事実の修

正をしなかった。
ヘッドハンティングの話を蒸し返されても、巧く断る術が見つからなかったから。
このまま、胡飛が話を下げてくれたまま平穏に話を済ませた方が、角が立たないと判断したのだ。

「はい。申し訳ありません」
「何、謝ってんのや。小姐、その気あるんか？それやったら話は別や」
「い、いえ！そうではなく、ウー先生のお誘いを断るなんて、その、失礼なので」
「オペナースを諦めてもええくらい、旦那に惚れとるっちゅうことやろ？」
「…仕事は生き甲斐です。でも、彼の存在は生きる糧なんです。どんなに辛くても、彼がいるから乗り越えていける気がするんです」

胡飛は、顎を撫でて微かに笑う。

「独身のわしには、甘い話やなぁ。ま、プライベートが充足してこそ、仕事が活きる言うんがわしの持論や。欲張りなんは嫌いやない。どちらもバランス良く取れるよう頑張りぃ」

気分を害した訳でもなく、胡飛は胸の内ポケットから名刺サイズの紙を取り出して吉良に渡す。

「で、わしの下で働く気になったら此処に電話しぃ。わしへのホットラインや」

受け取った吉良は、彼の携帯電話の書いてある名刺に目を瞬かせる。

よもや本当に、直通ダイヤルが記されているとは思いもしなかっ

たのだ。
医師ならば、高名な脳外科の権威へ直通する電話番号など、垂涎ものだ。
求めてもらえるものでもなければ、直々に手渡されるなど一介の看護師には起こり得ない奇跡的な事。

「え…わ、私がこれを頂いても大丈夫なんですか？？」
「もちろんや」
「老胡（ラオウー）」

胡飛が答えたのと同時に、短く鋭く女性の声で呼ばれた。
胡飛は、びくりと身を竦ませて吉良の背後から歩いてくる女性に視線を向ける。
吉良が振り返れば、そこには榊雄と話をしていた美麗なチャイナドレスの女性、マリー紅（ホン）が歩いてくる。

「なんや、もう見つかったか」
「見つかったではない。人に、Ｍｒ．榊の相手を押し付けて逃げるな」

流麗な日本語だが、少し硬い喋り方。良く通る凛とした美しい声だった。

「ええやん。あいつ財界にコネがあるから、日本への企業進出を本格的に考えるなら、愛想売っても損はないし、リハビリにもなるやろ？」
「…お前、そう言って私に一番面倒な仕事を押し付けたな？」
「あ、バレタ？」
「主賓の取るべき行為ではない」

年若くして企業家として大成した年下の女性の威厳と風格に、胡飛はたじたじで苦笑いし、吉良はその美しさに身惚れる。

近付いた相手は、ヒールの分を除けば吉良とそう背丈は変わらない。

間近で見る相手は、シミ一つない透明な白皙の肌。涼やかなスミレ色の瞳も、高く通った鼻梁も、薄い唇も、どれをとっても美しい。

「やっぱり、美人は近くで見ても美人だわぁ…」

そう呟いた吉良に、マリーが吉良に淡い紫の双眸を向ける。

「…貴女が来ているものが浴衣か？」

美しい相手に突如話しかけられ、吉良は振り子人形の様にコクコクと頷いた。

「確かに美しい召し物だ。着物とはまた違った趣がある。老胡が力説するのも頷ける」

「マリー、そういうときは、まず中身の女性から褒めるもんやで？」

「…そういうものか。済まない、私はコミュニケーション能力が欠如しているので、気を悪くしないでほしい」

殆ど表情の変わらない相手は、そう謝罪する。

「マリーはわしの娘みたいなもんなんやが、喜怒哀楽の感情表現が苦手でなぁ。せやからリハビリも兼ねて、今回、わしのホスト役で社交場に連れてきてん。許したってや」

胡飛からも言われ、吉良は慌てて首を横に振る。

本来なら、口を聞くことも同じ場に立つこともないような、雲の

上の存在達に挟まれて、吉良は生きた心地がしない。

「お、お気になさらず。中身は、本当に大したことありませんから」

慌てふためいてそう言えば、マリーの口元がかすかに緩む。

「貴女は表情が良く変わって、愛らしい」

吉良は顔を真っ赤にして、思わず胡飛の方を向く。

胡飛もやや驚いていた。

「び、美人さんに…ほ、褒められた気がするですけど…そ、空耳ですか？」

「わしにも、マリーが褒めとるようにしか聞こえんなぁ…しかも笑うなんて、何年ぶりや？珍しい事もあるもんや」

「うぅ…人生の運を、全部使い果たした気分です」

吉良が顔を押さえ恥じ入って見せれば、胡飛が爆笑する。

「可愛いやっちゃなぁ」

「…老胡、話の腰を折って済まないが、そろそろ出立しないと次の約束に間に合わない」

「もうそないな時間か…」

笑顔の消えた胡飛は、吉良に再度、視線を向ける。

儚いからこそ、花火は大輪を咲かす　8（後書き）

なんちゃって補足：

中国の人は、年上の人を呼ぶ時に苗字の上に「老」と付けて呼びます。日本で言う「●●さん」的なニュアンスです。

ちなみに年下の人を呼ぶ時は苗字の上に「小」をつけるようです。

「●●ちゃん・●●君」的な感じなのかな…。

儚いからこそ、花火は大輪を咲かす　9

「眞鍋の腕、ただの看護師としてみすみす埋もれさすんは勿体無い。現場に戻るんやったら、わしの所も考えといてや。小姐と一緒にオペをするんは、大歓迎や」

世界的権威にそう言われ、吉良は微笑む。

例え社交辞令でも、看護師冥利に尽きるというものだ。

「ウー先生にそう言っていただけて光栄です」

「あんな、これ社交辞令とちゃうから、ようよう考えてくれな？」

「…何年もブランクがあるので…あまりその…あの頃の様には…」

吉良からは、歯切れの悪い言葉しか出なかった。

「人間、死ぬ気で獲得した感覚は、体が覚えてんのや。それに、眞鍋もわしと同じで、手術が成功して患者が助かった時の、あの陶酔に似た感動の中毒者やろ」

自分の心を悟っているかのような目の前男の言葉に、吉良は胸をかきむしられる。

味わったものしか分からない、あの高揚と達成感。患者が命を繋ぎとめ、この先も生きる事が出来ると思うだけで、自分の事の様に嬉しかった。

胡飛の言うように、命が助かったという喜びを味わう度、自分を磨いて頑張ろうと奮起していた。

どんなに辛くても、辞めてしまいたいと思っても、元気になって

退院していく患者の顔が浮かんで踏みとどまり、何度でもオペ室に立った。

すべては、患者が元気に退院する姿を見たかったから。

その至福を、何度でも味わいたいとさえ思った。さながら、中毒者の様に。

「真鍋はわしと同じ匂いがするんや。せやから眞鍋も、過去に囚われて後ろ向きになってしもてても、今はまだ自信失くしたまんまでも、其処が自分の限界と決めつけるんだけは、止めとき」

まるで、吉良の過去を知るかのように諭す相手に、吉良は目を見張る。

「天才なんて呼ばれる生きモンは、人よりちぃっと器用に出来るだけ。挫折もするし、失敗かてする普通の人間や。わしかて、人生投げ捨てたいような仕事の失敗もようさんおうたわ。せやけど、この仕事が好きやっちゅう気持ちは誰にも負けへんし、負けとうない…自分にしか救えん命があるかもしれへん。そう思ったら、もう少し気張ろ思て努力してしまうんや。で、気付いたらまたメス握って患者の前に立っとる…その結果が、今のわしや」

「…ウー先生、もしかして私がオペナースを止めた理由を…？」

胡飛は苦笑いしながら首を掻く。

「いや。さっきの眞鍋の顔がな、わしがオペ失敗して脳外科医やめよ思てた時に、ダチから指摘された表情によう似とってん。せやからカマかけたんや」

「そう…ですか」

「眞鍋も、自分の人生は自分が納得いくように生きたらええ。看護師の仕事は多種多様や。オペナースにこだわる必要も本来はない…

まあ、わしの為に今後の活動内容の候補に入れとって欲しい言うんが、わしの勝手な希望やけどな?…ほな、気張りや」
「はい。ありがとうございました。お気をつけて」

胡飛は、吉良の肩を軽く叩き、娘ほどの年の差のある娘と一緒に建物の中に入っていく。
彼との話は、自分を見透かされたようで怖かったけれど、少しだけ自分の気持ちが軽くなった吉良は、深々と一礼し相手を見送った。

§

時は少し遡り、吉良が丁度、榊健斗に電話をかけて繋がずにモヤモヤしていた頃。
榊健斗は人気のない二階のバルコニーで、かかってきた電話の応対をしていた。

「そいつは本当か、美菜」

相手が放った言葉を俄かに信じられず、思わずそう尋ね返していた。

『あたくし、無駄な嘘はつかない主義ですの』

美菜はくすりと笑いながら、そう答える。

「そもそも、このような嘘を貴方に申し上げて、あたくしに何の利益がありますの?』
「まあ、無いな」

『吉良が欲しい男は、凱だけではありませんのよ』
「お前が言うと、別の意味に聞こえるが？」
『そうね。少なくとも凱は、看護師以上の物をあげはに求めているでしょうけどね』

揶揄を肯定され、健斗は閉口する。
妻の言葉の意味を、健斗は正確に理解し、また己もそう感じていたから。

『今のあげはが男としての凱に靡くとは到底思えないけれど、医師としての凱には揺らぐはずだわ』

健斗は胸ポケットから煙草を取り出し、加えて火を灯す。
深く煙を吸い込んで、ゆっくりと紫煙を吐きだした健斗は、庭を見下ろす。
そこには、壮年の男性と話をしている吉良の姿がある。
相手の男が何者であるかを気付いた健斗の視線が、不意に険しくなる。

「…俺の魅力が凱に劣るとでも？」
『負けるとすれば、男としての魅力ではなく、あげはの仕事に対する情熱に…よ。あげはが外来ナースをするなんて、翅をもがれた蝶も同じなのよ』

手術専門の看護師をしていた頃の吉良は、健斗の眼から見ても美菜の眼から見ても、水を得た魚の様に活き活きしていた。
吉良にとって看護師は天職で、オペナースという立場は最良の伴侶を得たも同じ。
だが、己で見つけたその仕事の幸せを、吉良は踏みにじられた。
両親という、血の繋がった肉親に。

一度は看護師であることも捨て、吉良は人生の坂を真っ逆様に落ちた。

身も心も擦り切れるまで、両親が自堕落に生きて作った莫大な借金を、一人どうにかしようとあがいて。

健斗や美菜に泣きごとも言わず、ただ『大丈夫』としか言わず、吉良は彼らから距離を置いた。二人だけではなく、仲の良かったものすべてから吉良は離れた。

吉良は、誰にも金の無心など一切しなかった。

暴力企業の息のかかった借金取りが、親しかったものを不用意に傷つけないように。

結果、彼女は孤独の中で、降りかかった重圧に押しつぶされた。

病院に搬送された吉良と再会した時、健斗も美菜も、その憔悴しきった彼女を見て言葉を失った。

どうにも出来なくなり、全ての箍が外れた吉良の悲痛な泣き声を、健斗と美菜は未だに忘れることはできない。

両親への恨み事でも、理不尽な現実を嘆くのでもなく、救済の手を求めるのでもなく、ただ「看護師を続けたかった」と泣き叫んだ吉良の姿を。

儚いからこそ、花火は大輪を咲かす　１０

借金と両親から自分を引き離し、新しい職場を用意した榊夫妻に、吉良は恩を感じている。そのためか、吉良はこれまで幾度も他の病院から引き抜きの話を貰ったが、断り続けている。

吉良は、引き抜きがあった話を彼らに一切した事はない。

健斗も本人には言わないが、吉良に届いた引き抜き話の全てを把握している。

中には、健斗の雇用条件よりもずいぶんと良いものも含まれていたはずなのに、吉良は頑としてその誘いを断り続けている。

『しーちゃんがいるから、まず男としての凱の事は心配ないとは思いますけれど…留学で名実ともに外科医としての名を挙げた彼は、危険だわ』

この五年間の間に、凱は新たな脳外科手術を成功させ、学会の論文も高い評価を得た。

医師として、一回りも二回りも成長した凱を前に、吉良のオペナース魂が揺れてしまうのではないかと、美菜は気が気ではない。

当時の吉良が、尊敬以上の何かを凱に抱いている事を知るだけに、美菜の心は不安に支配される。

健斗は眼下に居る吉良を眼で追いながら、うっすらと笑みを浮かべる。

「らしくない心配をするな。あいつは、別に義理立てで俺達の傍にいる訳じゃない」

『でも…』

「お前は吉良を猫可愛がりし過ぎだ」

珍しく気弱になっている妻に、健斗はため息を漏らす。

“こいつの吉良好きにも、困ったもんだ…”

これが他の人間なら、「あたくしの言うことに、黙って従えばよろしくてよっ！」と、相手の意思などお構いなし、問答無用で従えても心一つ病んだりはしない。

そのくせ、吉良の事になると美菜は「恋する乙女状態」になる。

ずっと自分たちの眼の届く所で働いていてほしい半面、吉良のやりたい事を抑圧しているのではないかと不安になって、普段の強引さも、吉良に対しては半分もない。

“まぁ、そこが可愛いと言えば可愛いんだが…”

そうさせているのが自分ではないというのが、どこか妬けるが、美菜が弱い部分を見せるのは自分だけだとも分かっているので、複雑な胸中だった。

「俺はあいつが凱の許へ行くことを心から望むなら、承諾する」

『健』

「俺達の為に、やりたい事を我慢しているのなら、そうすべきだろう」

『…それはそうですけど、凱には渡せませんわ』

不機嫌にそう言い放つ妻の言葉を聞きながら、健斗はうっすらと笑う。

美菜と話をしながら、バルコニーから望む庭先を見下ろしていた健斗は、先程まで吉良と話していた男女が庭から戻ってくるのをじ

っと見つめていた。
胡飛の方がやや残念そうな顔で通り過ぎ、チャイナドレスの女性の方が足を止めて健斗を見上げた。
目があった彼女は首を横に軽く振り、口だけを動かすとすぐに胡飛を追って行った。

“よかったな”

彼女は確かにそう口を動かした。

“侮れねぇ女だな…マリー紅…いや、あれは似せた別人か？”

どうやら、健斗がじっと成り行きを見ていた事を、彼女は気付いていたようだ。
もしかすると、彼女は命を狙われることの多い胡飛の護衛役なのかもしれない。
ヘッドハンティングが失敗したと分かり安堵したが、気掛かりで吉良を見守っていた事を悟られていた健斗は苦笑が漏れる。

『健斗？』
「胡医師の誘いすら断ったあいつが、『聖心会』の中核に戻る訳ねぇだろ」
『…あげはったら、ドクター・ウーのお誘いを蹴りましたの？』
「あぁ、つい今しがたな」

美菜が驚愕の声を上げる。その中には、少なからず安堵も含まれていた。

「吉良の事は任せておけ。悪いようにはしねぇよ」

どこか悪役めいた響きのある言葉に、電話の向こうで美菜が笑う。

『吉良を泣かせないで下さいましね？』

「お前の大事なものなら、大切にしてやるさ」

『そう言う尊大で懐の大きい所、嫌いじゃありませんわよ？』

「素直に惚れていると言ったらどうだ？」

『無事にあげはを連れ帰ってくださったら、考えて差し上げますわ。では、くれぐれもあげはに悪い虫をつけないで下さいましね？』

「あぁ、それじゃあな」

電話を切った健斗は、電話を内ポケットにしまいながら、下に居る吉良に声をかける。

「男に口説かれて脂下（やにさ）がった顔してんじゃねぇぞ、吉良。紫苑にチクるぞ」

胡医師たちと別れ、屋敷の中に戻ろうとしていた吉良は、頭上を見上げ、ようやく見つけた相手の姿に指を指した。

「あぁ！院長！覗き見なんてイヤラシイですよ」

勧誘されていたことなどおくびにも出さず、そう言って笑って見せた吉良に、健斗はつられるように笑う。

「お前、イヤラシイってことがどんなことか、分かってねぇな？教えてやるから、そこで待ってろ」

「うっ…教えてくれなくても良いですけど…早く来て下さいね」

周囲の眼がある手前、普段の様に絶叫せず返事をした吉良に、健斗は鼻で笑い踵を返して歩き出した。

儚いからこそ、花火は大輪を咲かす　１０（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
お陰様で先日総ＰＶ６００００越え、ユニークも１００００越えになっておりました。
併せて、お気に入り登録・評価もありがとうございます。

拙い小説ではありますが、お楽しみいただければ幸いです。
これからも、どうぞよしなにお付き合い下さいませ。

§

“院長ったら、あんな所でずっと見てたのかしら…”

淫靡に笑った男が消えたバルコニーから視線を下ろし、吉良は手元の名刺に視線を向けて嘆息する。

あまり見られて心地よいものではなかった。例え、断ったとしても。

健斗や美菜に、不要な気を遣わせたくなかったから。

“あれで二人とも心配性で、過保護なのよね…”

彼らは普段の人権無視の強引さとは裏腹に、見えない所で色々と気を回している気遣いの人でもある。

傍目に性格がきつい部分が目立って誤解されやすいが、付き合ってみるとその優しさが良く分かる。

だから、健斗のクリニックのスタッフも、ほとんどがオープニングスタッフのまま定着しており、院長夫妻に信頼を寄せている。

無論、吉良も。

「…眞鍋？」

名刺をバックの中の名刺入れにしまっていた吉良は、旧姓を呼ばれ顔を上げる。

相手の顔を見て、吉良は思わず固まる。
会いたい半分、会いたくなかった相手の姿がそこにある。
五年の歳月で、少し渋みを増した男の姿が。

「…が、凱先生」

精悍で整った顔立ちの男は、吉良の顔を確認すると、無表情のまま近付く。
思わず一歩後ずさってしまった吉良の腕を、間近に来た相手は掴んだ。

「また逃げるのか？」

静かに問いかける男の声に、吉良は視線を伏せる。
また逃げる…そう言われた事が、彼女の心にこたえる。
留学の問題で彼を激怒させてしまい、気まずい関係のまま凱が海外に渡ってもう五年。
その直後にオペナースを続ける事が出来なくなり、そんな自分が恥ずかしくて、彼との音信を一切断ってしまったのは吉良の方。
凱と距離を置いたのは自分だと自覚していたから、余計に胸が痛む。

「…お久しぶりです」

ようやくそう挨拶の言葉を出したものの、緊張と不安が混じり、彼女の声は震えていた。
相手の反応が怖くて、吉良は視線を合わせられなかった。

「そうだな…眞鍋、そう身構えるな。別にとって食べたりはしない」

そっと顔をあげて、吉良は榊凱を見る。
性格上、ほとんど愛想笑いをしない凱は、困った顔をしていた。

「悪い…健斗の様に笑ってやれなくて」

言われて吉良は眼を瞬かせた。
昔、「チャラチャラ笑うような軽薄な男は、男ではない」と、健斗を揶揄していた凱を知るだけに、吉良は己の耳を疑う。
どちらかというと目つきが鋭く、笑う事が少ない為に、無愛想で怖いというイメージが付いているのが、凱のコンプレックスだとも吉良は知っているだけに。

「…凱先生、変なもの食べました?」
「相変わらず、さらっと失礼なことを言うんだな」

ため息交じりに凱はそう言うと、失言して渋い顔をした吉良の腕から手を離した。

「すいません…よく院長にも言われます」
「…健斗の所で働いているそうだな?」
「あ、はい…」
「俺は、お前があのままオペナースを続けているとばかり思ったぞ」

言われて、吉良は複雑な表情で笑う。
親が作った借金の問題で吉良が病院を辞める前に、凱は海外に渡ってしまった為、凱は吉良のトラブルを知ることはなかった。

「色々ありまして…」
「帰国して、親父から全て聞いた」
「…そうですか」

「お前、就職してからずっと、親の借金を払い続けていたそうだな？」
「はい」
「親の借金があったから、五年前、俺のプロポーズを断ったのか？」
「……え？プロ…ポーズ？」

身に覚えのない話に、吉良は首をかしげた。
凱は目を細める。

「俺が海外留学する前に、言っただろう。一緒に来て俺を支えてくれと」
「あ、あれ、プロポーズだったんですか！？留学のお誘いだとばかり…」

吉良は思わず素っ頓狂な声を上げ、凱は呆れた様に溜め息を漏らす。

「留学に誘うなら、支えてくれなどと言うはずがないだろう」
「だ、だって、あの頃、私達、お付き合いとか…して…ない…気が……」
「付き合った女でなければ求婚してはならない、などと言う下らない道理はないだろ」
「そ、それは…そうですけど、物事には順序とか、気持ちとか…」
「少なくとも俺はお前に惚れていたし、口説いても全く知らぬ顔をしたのはお前の方だ」
「…えぇ！？」

凱に惚れられていた事も初耳なら、榊特有の口説き文句を凱から聞いた記憶もない。
記憶をいくら辿っても、口説かれた、に相当する出来事の記憶がな

さ過ぎて、吉良は頭を抱えた。

当時、二人は恋人関係ではなかった。
仕事に関して妥協を許さない神経質な凱が、吉良に気安さを許したことで、噂になった事はあるが。
色恋と言うより、年の離れた兄妹の様な親しさはあったと、吉良は記憶する。
それも、仕事に関する一切に、凱は恋愛を持ち込まない主義だったから。
故に、職場の同僚に手を出すような事は、吉良が知る限りでは一切なかった。
それでも、凱も榊一族にふさわしく、院外での女性遍歴は華麗だったが。
だから手を出された記憶のない吉良は、オペナースとしてスキルアップするために、付いて来いと言われているとばかり思っていた。

「お前、それまでにも俺がどれだけ口説いていたか、分かっているのか？」
「私、口説かれていました？？」

まったくもって無自覚の相手に、凱は額を押さえ顔を横に振る。

「お前、軽くあしらっていた訳でも、意図的にはぐらかしたのでもはなく、本気で気付いてなかったのか…鈍いにもほどがあるぞ…」

少なくとも凱には冗談様に口説いた覚えも、遊びの感覚で口説いた覚えもない。
周囲の仲間が外堀を埋めようと協力体制になる程には、吉良以外

の相手には凱の本気度は伝わっていた。
だが当人だけには、完全に伝わっていなかった。

「す、すいません…恋愛に疎くて」

吉良は申し訳なさそうに、頭を下げた。
榊の口説きは挨拶だと思っていた事もあったが、あの当時、既に美菜と健斗が吉良の預かり知らぬ所で裏工作をして何度か恋愛を駄目にしていた。理由も解らぬまま相手から立て続けに別れ話を切り出されていたので、自分に何か問題があるのではと真剣に悩んで、恋愛に後ろ向きな姿勢になっていた。
それに加えて、徐々に酷くなる親の借金の問題で頭がいっぱいになり、恋愛に意識を向ける余裕もほとんどなかった。
が、ある事を思い出し、恐る恐る相手を見る。

「…も、もしかして、あの時、激怒したのって…」
「お前が、考える間もなく即答で、俺の求婚（プロポーズ）を断ったからに決まっているだろう」
「す、すいませんでした！」

自分の鈍感ぶりに、吉良は泣きたい気分だった。あまりにも相手に対して失礼過ぎて。
思いっきり頭を下げて吉良は謝罪する。
何となく、吉良の鈍さを理解はしていたものの、此処まで鈍感だとは思わなかった凱は、プロポーズが通じていなかった事実を、五年の歳月を経てようやく知った。
静かに深いダメージを受けて、凱は何も言えなかった。
無言になった凱に、吉良もそれ以上何も言えず、二人の間に重苦しい静寂が流れる。

「…謝るな。それは俺を惨めにさせる」

ぼそりと呟いた凱は、頭を垂れる吉良の頭を軽く撫でる。

これればかりは吉良が悪い訳でもない。健斗と美菜の常にどちらかが、吉良に近付く男の目を摘み取って、吉良の気持ちを恋愛に向かせないよう働きかけたのは凱も分かっていた。

それが自分への牽制も多分に含まれていたので、同期の二人の行動は凱には忌々しい限りだった。殊に健斗とは、そりが合わない上に幼少期から恒常的に互いを比較されて育ったライバル関係でもある。

恋愛を除外しても、難易度の高いオペの成功率を左右させるほど有能な看護師であった吉良を手中に引き込む事は、本家と分家の医師達にとっては需要で、健斗と凱が吉良獲得の矢面に立っていた。

だからそう言った思惑から逸れて、権力に頓着しない、策謀にも恋愛感情にも気付かない吉良の鈍さはある種、凱にとっては救いだった。

「実は、お前が病院を辞めた話は、留学してすぐに親父から連絡がきていた」

大きく、そして華奢で繊細な外科医の手が頭から離れ、吉良は頭を上げる。

「親父も、退職理由については何も言わなかったから、俺はてっきり、プロポーズを断ったからお前が辞めたものだと思っていた」

凱は怒る訳でもなく、穏やかな表情で吉良を見ていた。

「借金が原因なら、どうして、お前は未だにいずみ病院に戻らない。借金も親の事も、健斗が片をつけたのだろう?健斗への義理立てか

？」

吉良は首を横に振る。

「それは違います」

「ただ一度の、ミスのせいか」

吉良の頬が露骨にひきつった。だが、すぐに表情を戻し、首を横に振る。

「ミスが理由じゃありません」

「では、どうして今の状況に甘んじている」

俯きしばらく無言だった吉良は、やがて覚悟を決めた様に相手を見る。

健斗以外、誰も知らせていない理由を、吉良は口にする。

「…会長にも、お話してないんですけど…戻らないんじゃなくて、戻れないんです」

「何故？」

「心因的な理由です」

「心因的？」

「…凱先生が留学なさった後、両親の借金の取り立てが酷くなって…そのことで精神的に追い詰められて…そのストレスで、オペ中に過呼吸発作を起こしてしまったんです」

「それは聞いている」

患者の命に別条はなかったものの、一歩間違えれば患者の命を損ないかねないミスを同時に犯してしまった。

それが原因で、吉良は手術室に立つ事を自分から辞退した。

それから一月もしないうちに借金の取り立てが病院にまで来るようになり、吉良はいずみ病院を辞め、慣れないキャバクラの仕事で最終的に身を壊した。

「借金や両親の事が片付いた後、何度か個人的に、器械出しの練習をしたんですけど、その度に過呼吸を起こしてしまって、自分がまるで使い物にならないんです」

自嘲するような笑みが、吉良から零れる。
新しく人生をやり直そうとしたのに、体には後遺症が残った。
戻りたくても戻れない。体が拒絶をするのだ。
自分が心血を注ぎこむほど大好きだった仕事を。
両親によってもたらされた借金で苦しんだ頃の精神的苦痛が、いつまでも吉良の体をむしばんで邪魔をするのだ。
もう、オペナースには戻れない。
そう自覚した時、ショックで先が見えず真っ暗になった。
悔しくて、苦しくて…その時ほど、吉良は両親の所業を憎んだ事はなかった。

「それで健斗先生に治療してもらっていますけど、未だに克服できないんです」

震える自分の腕を、自分の手で抑えつけながら、努めて明るく吉良は相手に伝える。

「情けない話ですよね」

「…戻りたいとは思わないのか。医者なら他にもいるだろう」

至極当然の様に問う男に、吉良は困ったように笑う。

「…未練がないと言ったら、嘘ですけど」

「ならば、医者を変えろ。つまらない仕事をせず、また俺の許に戻って来い」

吉良は俯き、一度、大きな呼吸をしてから凱の双眸を見る。

一瞬にして表情の変わった吉良に、凱は息をのむ。

それは、かつて自分の隣で仕事をしていた頃のままの彼女だった。

仕事に対して妥協を許さない、強い意志を持った強く美しい双眸が、凱を見据える。

凱は吉良のその眼が、好きだった。

「私、今の仕事内容も、やり甲斐があって楽しくて好きなんです…世界レベルで評価される優秀な凱先生の眼から見れば、小さなクリニックの看護師の仕事は、つまらない事なのかも知れませんが、患

者を看ることにつまらない事はありません」

穏やかに語るが、彼女の言葉には仕事への侮辱を許さないという牽制が宿る。

一緒に仕事をしていた当時のまま、吉良は看護師としての自分のあり方を何一つ換えてはいない。どのような内容の仕事でも、真摯に向き合う彼女の姿勢が気に入って、凱は吉良を重用していた。

だが凱には、吉良の今の言葉は気に入らなかった。

素晴らしい能力を持ちながら、それを役立てないなど、無能より劣る。

彼にとって、それが何より許せない。

「お前はみすみす自分の才能を潰す気か？お前の力があれば、救われる命も増えるというのに言い訳をして逃げて。惰性で誰でもできる様なつまらぬ仕事をするのか？それこそ、看護師の仕事を冒涜している」

冷然と言い放った相手に、吉良は喉元まで怒りがこみ上げた。

オペ至上主義の凱にとって、今の自分が不甲斐無い者として映る事を吉良は、理解していた。だから、ある程度の責めは覚悟した。

それでも、看護師の仕事を侮辱しているというくだりは、納得がいかない。

きっかけはどうであれ、吉良は今の職場での仕事を妥協して行っている訳ではないし、安易な仕事でもないと思っている。

「才能あるものがその才能を生かすのは、義務だ。それさえも解らなくなったのか」

“簡単に諦めた訳でも、好きで辞めた訳でもない！”

吉良はそう叫んでしまいたかった。
けれど、その言葉を怒と怒りを押さえつけ、吉良は曖昧に笑ってそれらを飲み込んだ。

「凱先生は、私を買いかぶり過ぎです。私程度なら、他にもいます」

言った所で、挫折を知らない凱には到底理解などされないと、分かっていたから。
深く抉られた心の傷は、容易には癒えない。
人の心は、時に金剛席の様に強靭で、時に砂細工の様に脆い。
弱さを知らないものに、弱さを理解することなど出来ない。特に、挫折を知らない凱の様な完璧主義者には理解しえないもの。
凱は呆れたように、短く息をつく。

「お前、何時からそんなに弱くなった…健斗に毒されたか」
「…どういう意味ですか？」
「外科医になろうと努力もせず、精神科医になるような恥さらし道楽者の下に居るから、お前は駄目になったのだ」

明らかな侮蔑が込められた言葉だった。
それは、吉良に対して向けられたものではなく、外科医以外を医者と認めない榊家の、健斗に対する侮辱だった。
刹那、吉良は凱の頬を力任せに平手打ちした。
大きな音が周囲に響く。
近くにいた来客者の何人かが、吉良達の方に視線を向ける。

「今の言葉、撤回してください」

凱は打たれて痛む頬を軽く指でなぞり、吉良を鋭く睨む。
だが、吉良も一度は押さえた怒りが再燃し、負けじと相手を睨み

返す。

「私はあしざまに言われても仕方ありませんけど、院長と精神科医に対する侮辱はこの場に不必要です。撤回してください」

吉良の反論に、凱の視線が殊更に鋭くなる。

「院長は他人に厳しいですけど、同じ様に自分にも厳しい人です。普段は不真面目に振る舞っていますけど、人の知らない所で人の何倍も努力や勉強をしています。けっして道楽で仕事をしている訳でもありません。それに、精神科医は人の心を治療する素晴らしい医療です」

その啖呵に拍手が聞こえ、吉良と凱はほぼ同時に音のする方に視線を向ける。

歩きながら近付く健斗の姿がある。

「お前が俺を褒めるなんざ、初めて聞いたぞ。どうせなら、面と向かって言ってくれないか、吉良」

「院長…」

表情筋だけを動かして作られたその男の笑みに、吉良は思わず息をのむ。

健斗の眼の奥は全く笑っていなかった。

笑っていない所か、臨戦モードのぎらついた怒りが見えた。

儚いからこそ、花火は大輪を咲かす　１４

凱は健斗の姿に舌打ちし、吉良の腕を強引に掴んで引く。

「来い」

「え？あ、ちょ、待ってください、凱先生！」

無理やり手を引かれ、吉良は思わず転びそうになり、思わず凱の腕を振り払おうとする。

だが、凱は聞く耳をもたず、下駄の上、浴衣で歩幅が合わない吉良を強引に連れて行こうとし、吉良は足がもつれる。

瞬間、凱の吉良を引く腕を健斗が掴み、倒れかかる吉良を片腕で抱き寄せる様に支えた。

「嫌がる女に無理強いするのはスマートさに欠けるぞ、凱」

健斗に強い力で腕を捻りあげられ、凱は吉良の手を離す。

吉良はそのまま後方へ数歩下がり、二人を見る。

凱は忌々しげに健斗を睨んで、健斗の手を振り解こうとするがびくともしない。

背恰好は似ているが、健斗の方が鍛えている分、筋肉の付き方が違う。

「馬鹿力が、オペに支障が出たらどうしてくれる」

「この程度で使い物にならなくなるのか？ずいぶんと貧弱な腕だな？」

ニヤリと黒い笑みを浮かべた健斗は、相手を突き放すように拘束

した手を解く。

「繊細さの欠片もないお前には、一生涯、理解はできん」
「杓子定規のお前の事なんざ、理解しても面白くもねぇ。それから、そろそろ吉良を返してもらうぞ」
「俺の話は終わっていない」

健斗は鼻で笑うと、横目で吉良を見る。

「吉良は俺の所有物だ。お前だろうと他の奴だろうと、こいつはやれねえよ」
「い、院長？」

何を言い出すのかと間近の健斗を見上げれば、その男は不敵に笑い、吉良の肩を抱く手に力を込めて更に自分に密着させる。
絶対に何かを企んでいると分かる、嬉しそうな笑みに、吉良は嫌な予感がよぎる。

「なんだ、言ってなかったのか？」
「い、言うって…何を…」
「親が作った借金のカタで、俺の物になったって言ってねぇのか？」

その一言に、吉良は顔色を失い呆然とする。

“それ、紫苑の時に使った設定！”

嘘ではないが、この状況で、この言い回しが何ともいえず、健斗らしいと吉良は思った。

「ま、昔惚れてた男に、そんな情けねぇ話はできねぇか」

健斗は鼻で笑い、凱に視線を向ける。

「こいつが自力で俺に全額返済するまでは、俺の下で働く契約だ。どんな俺の命令にも身も心も絶対服従でな。お前が入り込む余地はねぇ」

既に、榊夫妻から借りたお金は全額返済しているが、初めに、お金を返すまではきちんとクリニックで働きますと言う条件で就職しているから、これも嘘とも言えないのだが。このニュアンスで言うと、愛人契約っぽく聞こえるのは健斗の成せる技だろう。

凱の表情が露骨に険しくなる。

「眞鍋を金で縛り付けたのか」

「欲しいものは、どんな手段だろうと手に入れる。身も心も弱り切ったこいつの心の隙に付け入るのは、楽だったが？」

「健斗っ！お前、眞鍋になんて真似をっ！」

掴みかかろうとした凱の手を、健斗はたやすく払いのける。

「俺にガタガタ説教を垂れんじゃねぇ。お前は五年前に、吉良を捨てたんだろうが」

「俺の話を蹴ったのは、眞鍋の方だ！」

「その方が、好都合だっただろう？留学の前から、向こうで師事した医者の娘との縁談話が上がっていたんだからな。これ幸いと留学後にさっさと結婚して、向こうで権力逆手にオペ三昧。おかげで今の名声を手に入れたんだろうが」

健斗の言葉に、凱の怒気がしぼむ。明らかに怯んでいた。

「その上、吉良をオペナースとして召致して、愛人にでもするつもりか？そいつは都合が良すぎるってもんだ」

次々に健斗の口から放たれる言葉に、吉良は健斗の意図を悟り、健斗と凱を交互に見る。

凱は吉良の視線から逃れるように目を逸らし、健斗を見る。

「お前こそ、眞鍋を愛人扱いだろう。人の事をとやかく言える立場か」

健斗は冷やかな笑みを浮かべる。

「俺とこいつは、仕事上のパートナー契約だ。そう言っただろうが。考え方が邪だから、そういう下種の勘繰りをするんだ、お前は」

相手に誤解を招くような言葉を撒き、その罠に嵌った相手を虚仮にするような健斗の言葉に、凱はようやく気付き苦々しい顔をした。

容姿だけは麗しい人の悪い男は、ニヤリと笑ったまま吉良の肩を抱き、強引に向きを変えてその場から押しやるようにともに歩き出す。

「眞鍋！」

捨てた名しか呼ばない相手に、吉良は足を止める。

不機嫌そうに健斗が吉良を見下ろせば、吉良は凱に向き直る。

「…凱先生、私、眞鍋じゃなくて吉良になったんです」

吉良が困ったように告げれば、凱は険しい表情で目を細めた。

「お前、今幸せか？」
「とても」

即答した吉良は、照れくさそうに笑った。

「オペナースを諦めてもか？」
「簡単に諦めた訳じゃありませんから、最初は辛かったですけど…でもそのおかげで、思い出したんです。どんな形で看護師を続けても、私が看護師として成したかった事は叶えられるって。自分に出来ることを頑張れば良いって教えてくれたのは、院長を初めとする今の仲間です。だから、幸せです」

虚勢でも何でもない、真っ直ぐな本音で吉良が言葉を返せば、凱もそれ以上は何も言わなかった。
健斗はその様子を横眼で見ていた健斗は、短く息をついた。

「吉良、もういいだろ。帰るぞ」
「あ、はい…凱先生、遅くなりましたけど、結婚おめでとうございます。今日はお会いできて、嬉しかったです」

吉良は深く頭を下げ、既に歩き始めた健斗の背を追いかける。
後ろは振り返らなかった。

儚いからこそ、花火は大輪を咲かす　１４（後書き）

＊蛇足的ネタ

吉良が“紫苑に使った設定”といった話は、紫苑と吉良が付き合う前の話（別タイトルの長編）に掲載されています。
いずれ、こちらでも掲載するとは思いますが、現在、時間的な都合でそちらの改稿作業まで手が回らないので、サックリ流して下さいませ。

とりあえず、同じネタで凱と紫苑の兄弟は健斗に騙されたというお話です。

儚いからこそ、花火は大輪を咲かす　１５

§

帰り道、健斗の運転するディアブロの車内で、しばらく無言だった吉良は何かを思い出したように、「あっ！」と、切羽詰まった声を上げた。

「どうした」

「大変です、院長！豪華なビュッフェ食べ損ねちゃいましたっ！」

気の抜ける一言に、健斗は「はぁ？」と不機嫌な声を上げる。

「黙っているから、感傷にでも浸っているのかと思えば…お前は色気より食い気か」

「…だって一食分、食費が浮くじゃないですか」

「お前、何時になったら、その貧乏症が治るんだ」

「失礼なっ！これは節約術です！」

「紫苑が稼いでいるだろ」

「だって、生活費は折半ですもの」

「はぁ？何ケチくさい事を言ってんだ、紫苑の奴は」

「紫苑じゃなくて、私が言ったんです。一緒に暮らし始めた時に、そう約束をしたんです」

女性の為には惜しみなく金を使う健斗にしてみれば、なぜそんな奇怪な約束を紫苑が承諾したのか分からない。

従兄弟はそんなしみったれた、羽振りの悪い金の使い方をする様な男ではなく、むしろ金には無頓着で財布の紐が緩すぎるくらいだったと、健斗は記憶する。

「正直、紫苑の言う『私への好き』は興味本位の一過性の物で、私に飽きるのは早いと思っていたので。そう約束をした方が、後腐れなくさようならが出来るかなって…」

吉良にしてみれば、女遊びの激しい榊一族の人間を二十代前半から間近で見て来たので、紫苑の突飛な行動も、榊家の人間の戯れ程度にしか考えていなかった。

遊び慣れたその行動を真に受けて、恋愛に溺れるほど若くもなかったけれど。

だから榊凱の言葉も、榊家の『社交辞令』程度にしか認識が出来なかった。

吉良はそう言って、前を走行する車のテールランプを眺める。

「お前、その話、絶対に紫苑に言うなよ?」

ドライすぎる発言に、健斗はクラッチの踏み込み加減を間違えそうになったが、努めて冷静な体を装ってそう吉良に念を押す。

“こんな話を聞いたら、間違いなく、あいつはへこむぞ”

女遊びの手管は玄人でも、二十五で初恋をようやく体験した恋愛初心者が、恋する相手から別れ前提の話をされるのは、あまりにも酷な話だ。

吉良の事に関してだけは異常に心が打たれ弱い従兄弟には、実は健斗も真っ青な黒思考を持つ吉良の本心など刺激が強すぎるのだ。

一度、人間不信に陥った吉良の心に張った闇は深い。

普段それを表現しないだけに、時折、零れ出る吉良の心の影は、鋭利な刃物の様だった。

「…もう、その約束をするときに、同じ事を言いましたよ？」
「お前は鬼か」
「え？鬼？何がですか？」

意味がわからないと言った体で、吉良は首をかしげる。

「お前、ドMを装った鬼畜腹黒ドSだな」
「院長、そう言う変態性を助長させるカテゴリー分け止めてくださいよね」

心外と言わんばかりに、そう言い放った吉良の視線が、運転席側の窓ガラスの先にくぎ付けになる。

「院長！」
「あぁ？」

見通しの良い高台の道路を走行中の健斗に、吉良がテンションの上がった声を上げる。

「左見てください、左側！花火が上がってます！」

街の摩天楼の隙間から上り、薄墨の空に打ち上がる花火を吉良は見つけたのだ。

「莫迦かっ、運転中にそんな方向見れるかっ！お前だけで見てろ」
「えー、どこかに車止めて見ましょうよ！綺麗ですよ！」

吉良は運転中の健斗の肩をゆすり、子供の様なわがままを言う。

「っ危ねぇ！ハンドルがぶれるだろうがっ！止めりゃいいんだろ！」

健斗は渋々、花火が見やすくて手頃な駐車スペースのある場所に車を停める。

二人は車から降り、花火が見やすい場所に移動する。

吉良は、打ち上がる花火に目を輝かせる。

「花火、久しぶりに観ました！」

「あぁ、そりゃよかったな」

健斗は興味なさそうに、煙草を取り出して火をつける。

ゆっくりと紫煙を吐き出す吐息が、溜め息の様だった。

「何ですか、院長。花火も嫌いなんですか？」

「儚いのが気にくわねぇ」

花見にしても、花火にしても、大衆受けするものが嫌いと言う健斗に吉良は首を竦める。

「その儚さが良いんじゃないですか。儚いから、花火は夜空に綺麗な華を咲かせるんです」

「お前は詩人か？」

「あんなに大きくて鮮やかなものが長く形をとどめたら、ケバケバしくて魅力が半減です。儚いから次々と打ち上がる煌めきに、心奪われて見惚れるんです」

「お前の人生自体が、打ち上げ花火状態だろ」

「院長はさりげなく、きつくて嫌な事言いますよね？」

吉良は怒る訳でもなく、ただ、困ったように笑って、花火に目を向ける。

しばらく吉良は遠くに打ち上がる花火を、じっと眺めていた。

健斗はそんな吉良を、相手に悟られないように横目で眺める。

黙り込んでみたり、はしゃいでみたり、榊邸を後にした吉良の様子は明らかにおかしかった。

“まぁ、無理もねぇか…”

地雷を踏んでみたものの、それを単にあしらった彼女の反応が、健斗には何とも言えないやるせなさを抱かせる。

「…悪かったな。昔の男との逢瀬を邪魔して」

煙草を咥えながら、健斗はそう呟いた。

吉良はゆっくりと健斗に視線を向けた。

「何ですか、院長らしくない」

「今のうちなら、愚痴を聞いてやるぞ」

「愚痴なんて、何もありませんよ」

「言いたい事はあるんだろ」

思いを見透かされた吉良は、苦笑して首を竦める。

「凱先生の留学先での事、院長も美菜先生も、私が気にすると思って、わざと教えてくれなかったんですね？」

「パーティーに行かないと、駄々をこねられても困るんでな。美菜に文句を言うなよ、口止めしたのは俺だ」

本当は、美菜から受けた電話で凱が離婚調停をしていることを知らされたのだが、それはおくびにも出さない。

例えどのような情報が吉良の耳に届いたとしても、健斗は彼女が凱に靡く事を徹底阻止した。妻と吉良を‘守る’ことは、健斗にとっては同意義だから。

「しませんよ、そんな事。それに、凱先生とは男女の関係じゃありませんから」

「…違うのか？」
「…医師として尊敬はしていますし、好きでしたけど…でも、恋愛感情とはすこし違うんですよね」
「あの当時、俺の目にはお前も凱に惚れている様に見えたが？」

吉良は微かに笑う。

「憧れの先輩の様な、お兄さんの様な…手は届かないけど近くに居て、後ろを追いかけたい…そんな感じです」
「お前、ああ言う堅物が好みか」
「下ネタを言わない所は好みですよ」

どうあっても男女の間柄を詮索する相手にチクリと揶揄した吉良だが、健斗がおもしろくなさそうに鼻で笑う。

「俺はオープンで、あいつが単なるむっつりなだけだ」
「オープン過ぎるとセクハラです…それに、院長の期待に添う様なものは、本当になかったんです…あったとしても、留学はやっぱり断ったと思います」

もし吉良の中に、少しでも凱への恋愛感情があったのなら、留学の話を即答では断らなかった。それでも両親や借金を思えば、結局は悩み抜いた末に丁重に断る選択肢しか吉良には出来なかった。

「それしか答えはなかったですから。結婚したって知っても、おめでとうとしか浮かばなかったし…何年経っても、良くも悪くも、全然、凱先生は変わってなかったです」

何一つ、変らない。
外科医至上主義で、妥協を許さない。

己の仕事に誇りを持ち、常に向上しようとするその医師としての姿勢がとても好きで、器械出しとしての技能を磨き、一人でも人の命を救いたいと思っていた昔を思い出した。

吉良には凱の不変性が、嬉しくもあり悲しくもあった。

凱が変わらなかったからこそ、変ってしまった自分とは、もう以前の様な関係に戻る事はないのだと気付かされたから。

「本当は、凱の下に戻りたかったんじゃねえのか？」

指で煙草を挟んで煙草を口から外し、紫煙をゆっくりと吐きだした健斗は、花火に視線を向けたまま、そう尋ねた。

「…うーん」

吉良は首をかしげながら、唸る。

「おいおい、悩む所か？」

「…戻りたいって、思わなかったんですよね」

至極真面目に悩む吉良に、健斗は唇の端を歪める。

「当然だろ。凱より俺の方が良い男なんだから」

「…そうかも知れませんね」

軽くあしらって笑うかと思っていた健斗は、すんなりと肯定の返事が来たので思わず吉良を見下ろす。

「…お前、熱でもあるのか？」

「それ、私に失礼です」

少しむっとした吉良は、そう言いながら視線を花火に向けた。

「悔しかったんです」

「悔しい？」

「凱先生が院長の事を中傷した時、自分の事をどうこう言われるより、嫌だったんです。どうして医者としての院長を正当に評価できないんだろうって」

「だから、あんな台詞を吐いた訳だ」

「そう言えば、聞いてたんですよね…」

ばつが悪そうに吉良が呟けば、健斗は携帯灰皿に煙草の火を押しあてて消す。

そして、その灰皿を片付ける。

「莫迦なことを言ったな、お前は。外科医至上主義の堅い頭の奴らに、何を説いたって無駄だ。お前まで、敵視されるぞ」

「分かってます。分かってますけど…我慢するより先に、手と口が出ちゃったんです」

怒りにまかせて行動したと言う事は、それだけ吉良が腹にすえかねたと言うこと。

普段は軽く毒を吐く程度の吉良が、抑止も効かずに行動に出るほど、自分を評価しているのだと知り、健斗は吉良の頭を軽く小突く。

「あいつらに真っ当な評価をされても、気色悪いだけだ。お前みたいに、分かる奴だけ俺の事を分かってりゃ、それで良い」

健斗は穏やかに笑った。

皮肉屋ないつもの笑みではない、心からの笑みに、吉良もつられるように笑う。

わざわざ、誤解を招く言葉で凱の怒りを煽り、吉良へ向いていた凱の怒りをうやむやにしたことも、吉良はちゃんと理解している。

ドSで、人を喰った事ばかり言うけれど、その実、健斗がとても優しい人間であることを知っているから、吉良も彼の下でずっと働ける。

「院長の良さはスタッフの皆、誰より理解していますよ」

自分を見上げて笑う優秀な部下の左頬に、健斗はそっと手をのばす。

包み込むように頬を捉えられた吉良は、ただ相手を見つめ返すしか出来なかった。

普段は皮肉と軽薄さに彩られた似非紳士の彼の表情は、今、滅多に観る事のない彼本来がもつ理知的な真顔だった。

作り演じるのではない素の健斗の面立ちは、やはり紫苑に少し似ているのだと、吉良は目を奪われる。

「そう言う時は、他の連中なんざ引き合いに出すんじゃねえよ。お前を口説きにくくなる」

紫苑とはまた違う、低く骨の髄に響く健斗の囁きに、油断していた吉良はその甘い誘惑を孕む声にゾクリとする。

わずかに頬を朱に染めてしまった吉良は、慌ててそんな自分を振り払おうとする。

「またまた」

何時もの様に笑ってあしらおうとしたが、同時にふわりと煙草の香りが吉良の鼻梁を突く。

間近に迫った相手の顔に驚く間もなく、右の唇の端に柔らかな感触が撫でるように触れて離れた。

「！！！！！？」

口づけられた場所を、確認するように吉良は無意識に指でなぞる。
唇か頬か判断のつかない微妙な位置。
何が起こったか分かってはいても、彼女の頭は真っ白になる。
既に元の距離にある健斗の表情が、ニヤリと歪む。

「凱相手に俺の事を称賛した褒美だ。あいつに嫉妬と怒りに狂った表情をさせるなんざ、お前も大した女だ」

からかわれたと気付き、吉良は耳まで真っ赤に染まる。

「…ほ、褒美って…ただのセクハラじゃないですかっ！常春スケベ親父っ！」

吉良は目の前の男の胸をばしばしと叩く。
健斗はその衝撃をモノともせず、不敵に笑う。
恋人ができようが、相も変わらず初心な面が吉良からは消えない。
キス一つで、この恥ずかしがりようは稀有だった。

「離さねぇぞ？お前みたいないじり甲斐のある女、そうはないからな」

さりげなく『おもちゃ宣言』をされて、吉良は悔しそうに相手を睨む。

「前言撤回します！院長なんて、ロクデナシでドSなエロ親父です！良い所なんて、あるもんですかっ」

まるで子供の喧嘩の様な事を言い放った吉良に、健斗は盛大に噴き出す。

「お前は、ほんっとに可愛げのある女だな？しゃあねぇ、食べ損ねた晩飯を奢ってやるから機嫌を直せ」

「食べ物で誤魔化すつもりですか？」

むっとして相手が返事をすれば、健斗は人の悪い笑みを浮かべる。

「ラブホ直行で体を満足させてやろうか？」

「…慰謝料代わりに、御馳走お受けします」

「素直じゃねぇな？」

健斗は首を竦め、吉良に車に戻るように指で促す。

吉良は言われるまま、助手席に戻ろうと歩き出す。

「吉良」

「…はい？」

歩みを止めて吉良が振り返れば、複雑な表情で彼女を見る健斗の姿がある。

「俺の所にいたんじゃ、オペは一生涯、出来ねぇぞ」

健斗はどれだけ努力しても、それだけは吉良に与えてやれない。

それは健斗が彼女を手に入れた時に抱いた、唯一の、負い目でもある。

それを知ってか知らずか、吉良は小さく笑う。

「私が看護師を続けるのは、患者さんが元気になる姿を見たい。そ

れだけです…それは、私が看護師であり続ければどこでも叶いますから。それに…」
「それに？」
「院長の下で働くと、他事が考えられなくなるくらい充実してますから」
「…これからも、俺しか見えなくしてやるさ」
「あー、それ、聞き間違えると口説き文句ですよねぇ」

いつもと変わらず、戯言をあしらった吉良に、健斗は鼻で笑う。

「今更お前が抜けたら、困るんでな。頼むぞ、クリニックの雑用係」
「…それ、クリニックじゃなくて、院長の雑用処理です」
「同じ事だろ」
「はぁ…わかりました。今日はもう遠慮なんかせずに、あのビュッフェより豪華な晩御飯、お願いします」
「良い心がけだ。悶え死にさせてやる」
「それは、悶えるくらい美味しいご飯ですか？仕事で悶え死ぬってことですか？」
「くっくっくっ…どうだろうな？」

健斗はそう言って車に乗り込む。
その楽しげな健斗の様子に、吉良は小さく笑う。
どこかずっと張り詰めた顔をしていた健斗が、普段の彼に戻り吉良は安堵する。

“やっぱり院長はこうでないと”

看護師として引き上げてくれたのが健斗だからこそ、今こうして吉良は笑っていられる。
だから、健斗にも笑っていてもらいたいと思う。

“院長にずっとついていきますよ”

挫折で未練を引きずって生きるのではなく、新たな道を示して一人で歩けるよう吉良を導いてくれたのは、ほかならぬ健斗だから。

吉良は健斗の下で働く事を、自らの意思で決めたのだ。

彼が望む、新たな医療の形を実現させるために。

一人でも多く、心を病んだ人が癒され自分の様に前を向いて生きていけるように。

「おい、捨ててくぞ」

「あ、行きますからっ」

吉良は慌てて歩きだした。

ＥＮＤ

それを男は浪漫と云うの？　前篇（前書き）

※この小説は、『儚いからこそ、花火は大輪を咲かす』の後日談的なお話です。

「あげは、お願いがあるんだけど」

榊凱に招待されたパーティーに出席をして、一週間が経った日。
三日前にようやく長いロケから帰ってきた紫苑と、吉良は珍しく休みが一緒になった。
そんな土曜日の午前九時に、神妙な面持ちで紫苑は吉良を呼ぶ。
掃除の途中だった吉良は掃除機のスイッチを切って、傍に寄ってきた紫苑を見上げる。
お願いなんて滅多に言わない相手に、吉良は首をかしげる。

「どうかしたの？」
「ちょっと来てくれる？」
「？」

内容を言わない紫苑の後に付いて行けば、そこは寝室。
ベッドの上には浴衣や帯などが広げて置かれている。
しかも、吉良の物ではない。黒地に菊と疋田柄をあしらったしとやかな浴衣。
生地はどう見ても、そこいらの安物ではない。

「これ着て？」
「…どうしたの、これ？」
「あげは、健斗に浴衣を貰ったんだろ？」
「…美菜先生からは、確かに貰ったけど」
「出所が一緒なら、同じことだよ」

紫苑はそう言って、吉良に自分の携帯電話の待ち受け画面を見せる。

そこには、白と薄紫の生地に薔薇と蝶をあしらった浴衣を着ている吉良の姿がある。

しかも、明らかな隠し撮りだった。

「なにこれ、いつ撮ったの!?」

驚いた吉良は、思わず紫苑の携帯を両手で掴んで、マジマジと画面を眺める。

「健斗が送ってきた…あげはを同伴でパーティーに連れて行ったって」

「…院長、いつの間に…」

油断も隙もない上司の行動力に、吉良は呆れる。

きっと、この写真をネタに健斗から何かしらの皮肉を紫苑が言われたのだと、吉良にはおおよそ察しが付いた。

「俺だけあげはの浴衣姿を直に見てないから、着ている所が見たいんだ」

「それは構わないけど…写真の浴衣あるわよ?」

「健斗の買った浴衣なんて癪に障る」

健斗に張り合って、自分も浴衣を特注で用意した紫苑は不機嫌そうに答える。

「どうしてそんなに、院長に対して対抗意識を燃やすの?」

「吉良が、俺じゃなくて健斗に浴衣を頼んだからだよ。なんで、健

斗ばっかり頼るわけ？俺、そんなに頼りない？」

言われて、吉良は首をひねる。

上司に浴衣を頼んだ覚えはないし、当日までドレスコードが浴衣になっていることすら吉良は気付いていなかった。

そもそも、聖心会がらみのパーティーに行く時は、必ず美菜が吉良の全身をコーディネイトする。

衣装に関しては吉良の意思に関係なく、吉良を着飾ることを趣味とする美菜に全て一任されている。

「そう言う訳じゃないのよ」

「じゃ、どういう訳？」

「仕事関係のパーティーは、いつも美菜先生がお洋服を選んでいるのよ」

「なんで美菜様が？」

「えっと…『健の横に立つのなら、全てにおいて妥協は許さなくてよ！』とか、『貴女をあたくし好みの淑女に変えて差し上げてよ』って言われて…」

それは前者が建前で、後者が美菜の本音だろうと、紫苑は思う。

なにせ、夫である健斗よりも吉良の方に、美菜はご執心なのだから。

「だから今回も、美菜先生にすべてお任せだったの。お洋服に関しては、院長も美菜先生に口出し出来ないって言ってたから、院長は何にも介入してないと思うわよ」

「…本当に？」

「美菜先生に聞けば確実よ？」

「…いい。美菜様なら…仕方ない」

妙に納得した恋人に、吉良は曖昧に笑う。
紫苑が美菜に逆らえない事を知っているから。

「それじゃあ、お掃除が終わってから着替え…」
「今すぐ着て」
「でも途…」
「部屋なんて、大して汚れてないから」

言葉を次々に遮った紫苑の口調は、有無を言わせぬ気迫がある。
吉良はただならぬ気迫に気押され、小さく頷く。

「わ、分かったわ…い、今から着替えるから、リビングで待ってね？」
「…なんで？今更、恥ずかしがる仲でもないでしょ？」

至極当然の如く言い放った相手に、吉良は頬が朱に染まる。
吉良にしてみれば、自分が脱衣する姿をじっと見つめられるなんて、脱がせられるより恥ずかしい。
初々しい反応に、紫苑は淫靡に笑いそっと吉良の耳元に顔を寄せる。

「どうせなら、脱がせてあげようか？いつもみたいに」
「ば、莫迦ぁ！朝から、エロい声でそんな事言わないのっ！もうほら、早く出て！」

吉良は耳まで真っ赤にして、紫苑を強引に押しやって部屋から追い出すと、扉を閉めて両手で火照る頬を押さえる。
上司である榊健斗の様に、下ネタを言うこと前提で身構えて話をしていれば、あしらってかわせる。
だが、意識していない場面で不意に言われると、元からそういう

話が得意ではない吉良は、恥ずかしさに打ちのめされる。

“紫苑ってば、確信犯で不意打ちするなんてひどい…しかも、自分の声のエロさを分かっていてやるから、性質が悪いのよ”

色気豊かな恋人の破壊力絶大な戯言に、いつまでも慣れない吉良はそう心の中で悪態づいて、恥ずかしさを誤魔化そうと必死になった。

§

“危ない。着せる前に脱がせっぱなしにする所だった…”

吉良に追い立てられてリビングへ戻った紫苑は、ソファに腰を下ろして顔を両手で隠し天を仰ぐ。

裸体を幾度も重ね情事を楽しむ仲になって久しいと言うのに、着替えを見られるという事を、吉良が恥ずかしがるとは思いもしなかった。

適当に流すか、あっさり追い出すか、その程度の反応が返ってくるとばかり思っていた。

けれど、予想外に吉良が乙女の様に顔を赤くして困った顔をするので、長いロケ生活で禁欲を強いられた紫苑の欲望が、つい鎌首をもたげてしまった。

何とか自制し、警告のつもりで紫苑は甘く囁いてみたが、あの慌てふためきようからして、吉良が理解しているかは謎だった。

“…本当に、吉良は自覚が足りなさ過ぎだよ…口説く男が俺みたいな奴だったら、どうするんだよ”

吉良が鈍いからこそ、他の男が手を出しても彼女自身は気付かないままなのだが、強引な男相手では危険極まりない。

吉良が自覚のないままに垂れ流しにする可愛さに、誤爆する輩もいると思うと、気が気ではない。

自分が強引に吉良をオトしただけに、紫苑は自分の様な男が吉良の周囲に現れるのが不安だった。
既に一人、ずっと吉良の周囲に侍っている。
榊健斗という名の、危険極まりない男が。
それですら気を揉んでいると言うのに、新たに面倒な男の影まで。
“よりによって、俺よりも先に健斗が吉良の浴衣姿を見るなんて、むかつくじゃないか！しかも、クソ兄貴まで！”
メールが送られてきた時の怒りを思い出し、紫苑は両手を顔から離し、鋭い視線で天井を仰ぎ見る。
『凱の野郎、今にも手を出しそうな顔で吉良を見ているぞ。下心アリアリの面でな』
「あの野郎、手ぇ出しやがったら速攻殺す！」
メールを読んだ紫苑は、思わず怒りの形相でドスを効かせて剣呑な感情を口にしてしまった。
普段は愛想の良い負の感情を一切見せない紫苑の様子に、周囲の役者仲間が思わず青い顔をして身を引いた。
とっさの機転で何とか周囲は誤魔化したものの、紫苑の腹の虫はおさまらない。
凱が結婚したと健斗から情報を得てはいても、榊の人間が結婚して派手な女遊びを控えるはずもない。
凱が吉良に手を出すのではないかと、紫苑はその日はずっと苛立ちと焦燥が募っていた。
かといって、仕事を抜け出せるだけの時間もない。
やっと仕事が片付いて戻れたのは、四日も経ってから。
パーティーの事を聞くには、微妙に時間が経ち過ぎていた。

それとなく聞き出せばよかったのだが、吉良相手ではどうしてか紫苑は上手く聞き出せない。
それが余計に紫苑を悶々とさせた。

「…紫苑、どうしたの？そんなに怖い顔して」

不意に聞こえたその声に、紫苑は慌てて顔を下げ声のする方に視線を向ける。
いつの間にか、浴衣に着替えた吉良が近くで不思議そうに自分を見ている。
紫苑が見立てた浴衣は、良く似合っていた。
美菜の選んだ浴衣は、華やかで女性らしい愛らしさで吉良を魅せたが、紫苑が選んだそれは大人の女性らしさを引き出すものだった。
髪も少しだけセットして、浴衣でも違和感はない。

「ど、どう？」

しとやかで淡い色香を漂わせるその姿に、紫苑は淡く笑みを唇に映す。

「綺麗だよ。思った通り、それも良く似合うよ」

吉良はその称賛にはにかむように笑い、目の前に差し伸べられた恋人の手をとる。

「きっと、紫苑が見立ててくれたからよ」

招かれるように、紫苑の前に立った吉良は、美麗な顔をした恋人の頬に手をのばす。

「ありがとう、紫苑」
「…『勿体ない』って、怒らないの？」

以前、贈り物をした時は「勿体ない」「無駄遣い」だと怒って、二度としないようにおしかりを受けた紫苑は、吉良の意外な反応に不思議そうな顔をする。

二人の金銭感覚が違うので、紫苑にとっては廉価でも、吉良にとってはかなり高額であったりするので、付き合う前からいろいろ問題が起こった。

その時の事を言われ、吉良はばつの悪そうな顔をする。

「それは、恋人でもない私に、一度に幾つもプレゼントをくれて、その一つ一つが高価すぎたからよ」

細い指に髪を絡ませ、頭を撫でるように吉良はそう説明する。

「たまに…ささやかなもので、十分嬉しいのよ」
「そんなことで良いの？」
「だって、好きな人からもらえるのよ？」

穏やかに本当に嬉しそうに笑った吉良は、不意に何かに気づく。

「そう言えば私、貴方に贈り物したことないわ…このお礼もしたいんだけど…」

男性に何かを贈るような機会がほとんどない上、金銭感覚も違うので何が妥当なものか吉良にはあまり想像がつかない。

紫苑からすれば、吉良からいつも色々な形で望む物を貰っている。かしこまって贈り物など貰ういわれはないのだが。

それでも、今、彼女から貰いたい物がある。

「…それなら、俺からリクエストしても良い？」
「なにか欲し…な、何か嫌な予感がするんですけど…」

吉良は、目の前の男が口角を釣り上げたのを見て嫌な予感がし、すぐさま後退りしようとする。
紫苑がその行動を見逃すはずもなく、吉良の体を更に引き寄せ、自分の膝の上に横抱きにして座らせる。
逃れられないように腕で拘束した吉良の耳朶に、紫苑は唇を寄せる。

「たまには、あげはからお誘いのキスしてほしいんだけど」

刹那、吉良は困ったような顔をして紫苑を見つめる。薄化粧で顔はあまり分からなかったが、耳が異様に赤く染まっている。
吉良も自分からキスをしない訳ではないが、しても唇に触れるだけのフレンチキスだけ。
紫苑が願うのはディープキスだと、吉良は扇情的な彼の表情で気付く。
しかも、この雰囲気はキスだけで終わりそうもない。

「…い、今じゃないわよね？」
「今だよ？」
「ま、まだ朝よ？」
「昨日は、あげはが嫌がるから我慢しただろ？」
「あ、あんな激しい事、毎日なんて無理よ」

一昨日、会えなかった時間を埋めるように、不安と愛しさをぶつけるように、戻った紫苑から受けた愛の営みは濃密で情熱的だった。
事前の宣言通り、吉良が意識を飛ばすほど。

当然、翌日が仕事の吉良の体調になど配慮もなくて、気力だけで業務をこなした吉良には、二日続けて紫苑の過多な愛の行為を受け入れる体力はなかった。

「俺は、毎日だって吉良を抱きたい」

それは、健全な肉食系男子である紫苑の本音だった。

思ってはいても、吉良の意思をある程度は尊重したいし、前日にやり過ぎたと分かっていたから、昨日は紫苑も渋々我慢をした。

それを男は浪漫と云うの？　後篇（前書き）

※注意

表現が確実に１５禁だと思われる個所がございます。

苦手な方は御自重下さい。

「今日はゆっくり、時間をかけてｍａｋｅ　ｌｏｖｅしたい」

低く掠れた声で囁かれ、吉良は泣き出しそうな顔で羞恥心に顔を染めて紫苑から顔を逸らす。

「だ、だからその声で言うのは反則、っ！」

隙だらけに目の前に露わになった吉良の細く白い首筋に、紫苑の唇が落される。

首筋を舌先でなぞりあげられる様なキスに、痺れるような甘い感覚が身体の奥底から沸き上がり、吉良の声から気だるい吐息が漏れる。

相手を押し退けようと紫苑の肩に手をのばされた吉良の手は、彼に耳朶に優しく咬みつかれた瞬間、吉良は甘い喘ぎを零して震える。

「紫苑…貴方、変…んっ…」

「何が？」

身を捩る吉良を逃さぬように、片腕を吉良の腰に回し、彼女の反対の頸をもう片手で捉えていた紫苑は、首元で囁く。

過敏になったそこに、紫苑の吐息が触れ、吉良は大きく身を震わせる。

「そこで、喋らないでっ」

「…俺の何が変なのか、言って？」

わざと、同じように肌に触れるか触れぬかのギリギリのラインで囁いた紫苑は、わずかに熱を帯びて来た吉良の柔肌に再び唇を寄せる。

濃厚に絡んでくる愛撫に、吉良は紫苑の後ろ頭に手を回し、自分を侵食する快楽を堪えるように彼の髪を乱すように掻き抱く。

「ぁっ…しぉ…帰ってから、んっ…機嫌…悪い…いんちょ…の、事じゃ…ない…でしょ？」

どうしてこういう時だけ鋭いのかと、紫苑は内心で舌打ちする。

快楽流されて、自分を酔わせて不安を忘れさせてくれたらいいのにと。

「私…悪いこと…した？」

聞きたいけれど、確かめたくない。

吉良が凱と恋人関係であったと認めたら、嫉妬で狂いそうだった。

吉良が悪い訳ではない。

彼女の相手が、自分と犬猿の仲である義兄である事が、胸を裂くように掻き千切るのだ。

その男が、日本に戻ったことが。そして、吉良に近付いたことが許せない。

「パーティーで、昔、付き合ってた男に会ったんだろ」

「…誰の…事？」

「…榊凱」

艶めく表情の中にわずかな驚きを見せた吉良に、紫苑は彼女の浴衣の両襟を掴んで強引に開く。

肌蹴て諸肌が晒される。それに伴って大きく露出し広がった胸には、紫苑が一昨日の夜に刻んだ赤く染まった痕が幾つも見えた。

「やっ！んぁっ！」

相手に抵抗の隙を与えず、自分が刻んだその痕の上に紫苑は同じ痕を刻む。

微かな痛みを伴う陶酔に、吉良は甘い悲鳴を上げて、幾度も襲うその快楽に身を捩る。

彼女の声と姿は、媚薬の様に紫苑の感情と身体を高揚させる。

けれど、心はくすんだ炎がチラつく。

凱が…義兄が吉良のこの姿を見たかもしれないと思うと、醜い感情が噴き出す。

「あいつにも、こんなことされた？」

「ちがっ…凱先生は…彼氏じゃない」

息を乱しながら答えた恋人を、紫苑は怪訝そうな顔で見上げた。

「院長にも…元彼かって聞かれたけど…彼は元上司よ」

「上司？」

「凱先生のオペチームにいたの…仲は良かったけど、医師と看護師以外の関係なんて無かったわ…」

「本当に？」

「尊敬はしてたけど…恋愛感情はなかったもの」

「でも、健斗が勘ぐるくらい仲は良かったんだろ」

恋愛の機微に鋭い健斗が、感じるほどの何かはあるのだと、紫苑は信じて疑わない。

「症例で分からない所を凄く丁寧に教えてくれたから、良く勉強の

話をしてたの…先生の様で、お兄さんみたいな感じだったのよ」

吉良は不機嫌を隠さない紫苑の頬にそっと手をのばす。

「私、一人っ子だったから、お兄さんとかお姉さんに憧れてたの。だから勝手に、こういうお兄さんがいてくれたら良かったのにって…」

よりによって、あんな性格の悪い陰険な男を兄にしたいなんて。相手が吉良でなければ、熨斗をつけてくれてやる。と、苦々しい顔の紫苑は内心で舌打ちする。

そんな相手を見て、吉良は、皺の寄ったままの紫苑の眉間を優しく撫でる。

「…院長…また貴方に変な事だけ言って、正しい事は何も伝えなかったのね…」

毎回、従兄弟の言葉に翻弄される恋人に、吉良は苦笑する。

大方、『昔の恋人』と再会して良い雰囲気だったとか、上司は吹きこんだのだろう。

だから、紫苑がいつも以上に不機嫌で、愛情表現が過多だったのだとようやく分かる。

毎回のように騙される年下のこの彼氏も、そろそろ学習能力を発揮しても良いはずなのだが、一向に改善される気配はない。

「紫苑は、院長の言葉を話半分で聞かないと駄目よ」

「聞いてるけど…吉良の事だけは出来ない…俺は健斗みたいにずっとあげはの傍にいる訳じゃない…居ない時間は不安だらけだ」

眉間の皺に触れている吉良の手を掴み、紫苑は吉良をそっと抱き

締める。
紫苑の心を乱すのも、心を癒すのも吉良だけ。
どうしようもない悋気で嫉妬をして、怒りを吉良にぶつけて。
それでも吉良は紫苑を包み込んで気持ちに応えてくれるから、わがままになる。

「俺、どうしようもない餓鬼みたいだ…一人で莫迦みたいに嫉妬して…」
「…貴方が昔の彼女かもしれない人に会っていたら…私だって嫉妬するわ…」

そっと顔を上げた紫苑に、既に怒りや不愉快を示す眉間の皺は刻まれていない。
どこか自信がなさそうで、不安に怯える愛情に飢えた子どもの様な顔をした、演技では絶対に見せない、素の彼がいる。

『たまには、あげはからお誘いのキスしてほしいんだけど』

恋愛慣れしているのに愛し愛されることには不器用な紫苑がそう言ったのは、自分が愛されているのか酷く不安だから。
いつも、気持ちをぶつけてくるのは、確かめたいから。
確かめなければ、愛されているのか自信がない。
母親の愛も、女性すべてから注がれる愛もすべて虚構だと、吉良に出会うまではそう信じていた。
愛という思いそのものが空蝉のような物だと思っていた紫苑には、それが何かを知れば知るほど渇き飢える。
砂漠に垂れる水の滴の様に、得ても得ても満たされない。
求めるだけでは足りなくて。
もっと求められたい。愛を、束縛を乞われたいと願う。
胸を占める不安をかき消すほどの、吉良の心が欲しいのだ。

願う紫苑の額に、柔らかな唇が落される。

「貴方は毎日電話やメールをくれるのに、いつも早く帰ってきてほしいって思うの…紫苑の温もりが傍に無いのは淋しくて…私、どんどん我が侭になっていくの」

「あげは…」

言葉を紡ごうとした紫苑の唇を、吉良が優しくついばむ。幾度も触れては離れ、次第に深く唇を重ねて紫苑の腔を吉良が淫らに犯していく。

初めて受ける吉良からの扇情的な口付けに、紫苑は溺れる。

媚態を帯びた表情で自分を貪る肌蹴た浴衣姿の彼女が艶めかしく、互いを求める口付けの合間に響く吐息とリップ音が紫苑の欲望を煽る。

「あげは…すごく淫らで綺麗だ」

「…紫苑が変なことするからでしょ…ちゃんと…責任とって」

いつもなら赤面をして恥ずかしそうに返答する所だが、焦れたようにそう囁いた吉良に紫苑は軽く口づけをする。

「俺が欲しくてたまらなくしてあげる」

「…莫迦……いつでも貴方が欲しいわ」

どちらからともなく口づけを重ねた先は、享楽。

深く溺れて睦み、ただ互いに貪欲に体と心を求めて、離れていた時を埋めるように愛を交わし合う。

休日はまだ、始まったばかり…。

ＥＮＤ

Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔ．（前書き）

今回は健人視点。
職場での吉良の『日常風景の一コマ』風に書いてあります。
ちなみに昨年書いたものなので、ハロウィンの日の曜日が違っております。

Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔ．

西洋の大晦日とお盆を一緒にしたかのような日が近付くにつれ、街の中が南瓜お化け色に染まる。

正直、俺はこの日本人特有の八百万の神々を信仰する節操のない気質が嫌いだ。

ハロウィンの正しい意味さえ理解しないまま、仮装をして子供がお菓子を巻き上げる日と思っている奴が、一体どれだけいるのか。

バレンタインにしろ、クリスマスにしろ、このハロウィンにしろ、商戦根性丸出しの日本の世情が情けない限りだ。

もっとも、敬虔なクリスチャンでもない俺は、布教を兼ねたこの行事自体に正しさを求めて行動するようなこともしないが。

だが、俺の職場にもその商戦に煽られた職員が大多数で、半月ほど前からクリニックの至る所に南瓜のお化けが存在している。

「何時から此処は、南瓜お化けの巣窟になり果てた」

診療前、コーヒーを持ってきた吉良に俺は思わずそう文句を垂れた。

「今日までの辛抱ですよ」

今年はハロウィンが日曜日で良かった。一日でも辛抱する時間が減ったのだから。

「お前も、ハロウィンに浮かれた一人か」

吉良は、苦笑いする。

「すいません。今日、南瓜のタルトを焼いて持ってきちゃいました」

俺の右腕でさえこのありさまだ。呆れて溜め息しか出ん。

「もういっそ、お前ら全員仮装して業務をしたらどうだ」

「…さすがに患者さまにドン引きされますよ」

「南瓜お化け（ジャック・オー・ランタン）まみれのクリニックに、既に俺がドン引き状態だ」

スタイリッシュさの欠片もない、賑やかな待合。

それでも、見る者を楽しませる工夫を怠っている訳ではないので、今年も他の連中には吉良が俺を説得して黙認と言う形にはなっている。

誰も出勤していないこの時間帯に吉良に小言の様に言うのは、こいつがスタッフをまとめる看護師長だからだ。

別に吉良の看護師長としての能力に欠如があって言っている訳でもない。

「すみません。来年は装飾をもう少し押さえる様に伝えます」

「これ以上にならねぇ様にだけ、注意しとけ」

「はい」

職員を人選した俺が言うのも何だが、基本的に仕事は出来るが個性派揃いのあいつらを一つに纏めて同じ方向性へ操舵するのは容易ではない。それに、行事ごとが好きな連中だ。何かに付けて暴走気味の装飾や行動を起こそうとする。

今年もこの程度で済んで良かったと、俺は正直思っている。

自由にやらせれば、確実に仮装パーティ会場になる。

俺が直に采配を下せば、絶対に装飾など認めない。
吉良だから、俺とあいつらの最大譲歩点を探り出して、俺とあいつらの間に溝を作らないよう交渉術を駆使している。

「まあ、お前が深いスリットの入ったタイトな黒ドレスで魔女のコスプレをして診療介助に入るなら、何でも許すが？」
「絶対、着ません」

即答で返事をする吉良に、俺はつい笑みがこぼれる。
拒まれると余計に着せたくなるのが、性だ。美菜に相談して、いつか着せてやろうと密かに思う。
俺の心情を察したのか、吉良は心底それだけは嫌ですと言う顔をして、コーヒーカップを盆ごと差し出す。
俺はソーサーごとカップを受け取り、コーヒーに口をつける。
それを吉良が黙って見ている。

「…なんだ」
「ケルトでは、十月三十一日に死んだ家族の霊が帰ってくるんですよね？」

そう尋ねて来た吉良に、俺は鼻で笑う。

「それがどうした」
「…お祭り事が大好きだったんで、もしかして、両親の魂も喧騒に誘われて帰ってくるかなって思って」

複雑な顔をして吉良はそう答えた。
憎い半面、吉良の性格からして冷酷に突き放すことも出来ないのだろう。
未だに、両親の死を自分のせいだと引きずっている感がある。

「あの世とやらがあるのなら、大方地獄逝き。逃げ出すことも抜け出す事も出来ねぇだろ。そもそも、どの面下げてあいつらがお前に会いに来るって言うんだ」

娘に多額の借金を擦り付けて豪遊した揚句に、借金取りに追われて自殺したような奴が。

だが、どんな親でも親は親。

情の深い吉良の様な女は、簡単に切り捨てられないだろう。

「そうですよねぇ」

両親の事となると、吉良は途端に辛そうな顔をする。

無理に笑うから、それが痛々しく見える。

以前なら、抱き寄せて宥めるくらいはしてやったが、紫苑の女になった以上、今はそう言う訳にもいかない。

「Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔ．」

「…はい？」

「Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔ．…だ」

吉良は目を瞬かせてから、俺の言葉をようやく理解したように笑う。

「診療が終わったら、南瓜のタルト出しますね」

「俺に甘いものを喰えと言うのか。悪戯希望か、お前」

「そんな事言われても、院長、元からお菓子なんて食べないじゃないですか」

俺は、鞄から掌サイズの小さな包みを出して吉良に放り投げる。

吉良はラッピングされたそれを受け取り、包みと俺を交互に見る。
包みは可愛らしい不線布生地で、中身は見えないようにしてある。
「…これ、なんですか？」
「Ｋｏｒｎｉｇｏｕだ。ハロウィンの起源となったサウィン祭じゃ、そいつを焼くのが主流だ」
「そうなんですか？院長、無駄な所で意外な博識ですね？」
「無駄と意外は余計だ。サウィン祭じゃ徘徊する幽霊にワインと食べ物を供える。お前の莫迦親を追い返すために、明日はそいつを供えとけ」
「莫迦親も失礼ですけど、追い返すって…嫌がらせですか？」
「なんだ？俺が自ら行って、悪霊になったお前の両親をエクソシストよろしく追い出せばいいのか？」
「もぅ、勝手に悪霊にしないで下さい。院長が来るとややこしくなりそうなんで、大人しくこれをお供えします」
「そうしろ」

呆れたように俺を見ていた吉良は、不意に小さく笑った。

「でも院長、普通、Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔ．って聞いた方はお菓子を渡さないものですよ？」
「俺が普通の悪戯をするとでも？」
「…随分、可愛らしい悪戯ですね？」
「なんだお前、めくるめく大人の悪戯が良かったのか？」
「…院長が言うと、なんだか卑猥に聞こえるんですけど」
「診療室で医者と看護師の蜜事なんざ、卑猥そのものだろうが。まあ、お前の白衣はワンピースタイプじゃねえから脱がせにくいけどな」

刹那、吉良が顔を真っ赤にして絶叫する。

「朝から下品ですっ！！」

期待を裏切らない反応をした吉良に、俺は思わず噴き出す。

こいつが傍にいると退屈しなくて良い。

吉良が居るのなら、たまには、こういう莫迦げた行事に乗るのも悪くない。

ＥＮＤ

Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔ．（後書き）

今月末はハロウィンですね。
このお話を書くにあたってハロウィンを調べてみたら、まぁ、諸説があるわあるわ…
ハロウィンの起源は豊饒を祝うとか日本で言うお盆の様なものだったり…カボチャではなく、カブのお化けだったり、そこかしこの地域で色々違う所があって何を参考にしたらよいのやらさっぱり。

このお話では、あまり日本では馴染みのなさそうなケルト起源のお話を参考にしました。
視点を健斗前提で考えたら、この起源の方がしっくりきたので…。
もし、皆様のイメージされるハロウィンと違ったら申し訳ないです。

榊紫苑は眉間に深い皺を作り、酷く難しい顔をしてリビングに入ってきた。

「あげは…」

酷く深刻そうな声でソファーに腰をかけている自分の恋人を呼ぶ。

呼ばれた吉良あげはは、看護師御用達の月刊雑誌から眼を離し、年下の彼を見る。

「どうしたの？」

足早にあげはの傍に来て腰を下ろした榊紫苑は、じっと彼女を見つめる。

鬼気迫った顔で。

だが、言葉は何時まで経っても返って来ない。

「…何？」

「俺の耳、変なんだ」

「変？」

「なんか、ガサガサ音がする。耳の中に虫でもいるのかな…」

「え？？？」

至極真面目な顔をして告白した紫苑に、吉良は眼を瞬かせる。

「虫？？どっちの耳？何時から音がするの？」

「さっきから左耳で」
「それまでは音とかしなかった？何か入ったような感じした？」
「解らない…突然、音がするようになって…俺、死ぬ？？」
真剣にそう尋ねて来た相手に、吉良は慌てて首を横に振る。
「…し、死なないと思うけと…耳の中に指入れたりしてない？」
「出来る訳ないだろ。虫がいたら怖いじゃないか…」
そう言って視線を逸らした紫苑の手が、わずかに震えていた。
平静を装いながらも、本気で怯えている恋人を見てあげはは彼の手を握る。
本当に虫かどうかは解らないが、本当に虫が耳の中に入ったとしたら、誰だって恐怖を感じずにはいられない。
「それなら大丈夫。すぐ取ってあげるわ」
「本当に？」
「ええ。私に任せて」
そう言って、あげははその場から立ち上がり、隣の部屋からペンライトを持ってくる。
そして、部屋の電気を消すと、ライトの明かりを頼りに紫苑の傍に腰を下ろす。
「こんなに暗くして虫がとれるの？」
不思議そうに尋ねる相手に、あげはは頷く。
「虫が耳に入った時はね、耳の中をつついて虫を出そうとしたら駄目なのよ。余計に奥に入ったり、虫が暴れて耳を傷つけてしまうか

ら」
「それなら、どうやって取るわけ？」
「虫はね、明るい所に移動する習性があるから、部屋の中を暗くして、耳の中に光を当ててあげると外に自分から出てくるのよ」
「それで、本当に出てくるの？」
「病院で実際に行っている処置方法だから、心配いらないわ。ちゃんと出てくるから、音がして気持ち悪かったりするけど、少しの間だけは我慢してね」

不安がる患者に言い聞かせるように、優しくあげはは説明する。
そんな彼女を、やっぱり看護師なんだなと思いながら、紫苑は頷いた。

「分かった」

あげはは紫苑の左側に、膝立ちの格好で立つ。

「じっとしていてね？」

あげはは紫苑の耳朶を摘まみ、ライトの光を耳の中に差し込む。
そして、彼の耳の中を注視して確認する。

「……」

しばらく間を置いて、そして、困ったように笑う。

「紫苑…大変。虫じゃないわ」
「な、ど、どうしたのあげは？」
「…すごく大きな耳垢さんが住んでるわ」
その重大な事実に、紫苑はしばらく口がきけなかった。

そんなあなたも好きだから　1（後書き）

閲覧、本当にありがとうございます。
Ｐａｒｆｕｍの更新との兼ね合いがあって、こちらの更新が少しスローになりますが、よろしくお願いします。

§

榊紫苑は、人生でも五本の指に入るくらい恥ずかしい思いを体験した。
あまりの衝撃に、彼はソファーに突っ伏し、しばらくクッションに顔をうずめていた。

“耳垢に怯えていたなんて、恥ずかし過ぎるだろ、俺！”

人生初めての耳のガサガサ音が、虫ではなかったと安堵したのが一割、後は羞恥心しかない。
我を取り戻した彼は、顔を真っ赤にして今の場所に、今のポジションになって彼女の視線から逃げた。

“何時もなら、マメに綿棒で掃除してるのに！くそっ、あの砂漠ロケのせいだ”

紫苑は、一昨日までドキュメンタリー番組の撮影の為に、某有名砂漠で二週間過ごした。
お風呂には入れないし、昼と夜の寒暖の差が激し過ぎて満足に休息も出来ない。
まして、恋人がいない他人ばかりの環境で、紫苑が満足に眠れるはずもない。唯一お守り代わりに持って行った吉良が調香してくれたアロマに、僅かな眠りを与えられたのが、彼にとっては救いだっ

た。
そんな過酷で慣れない環境の中では、細かい所まで手入れをする余裕さえなかった。
“マジで最悪…あげは呆れたかな”
耳垢ごときにびくびくした自分を。
耳垢を溜めているような男に、彼女は呆れただろうかと不安になる。
だが、確かめる勇気はないし、肯定されたら立ち直れない。
「ねえ紫苑」
頭の上から吉良あげはの声がしたが、紫苑は返事をしなかった。
傍で、彼女が屈む気配がした。
「お願いがあるんだけど…」
「…何？」
「耳掃除させて？」
紫苑は、耳が詰まっている為に幻聴を聞いたのだと思った。
「…は？」
確認するようにちらりと相手を覗き見れば、年上の彼女は満面の笑み。
そして手には耳かきと綿棒。
「…もしかして、人に掃除されるの嫌い？」
「いや、人にされたことない…って、そうじゃなくて」

不思議そうに首をかしげる相手に、紫苑は体を起こす。

「情けない男とか、思わないの？その…耳垢ためてその音に驚くなんてさ」

「…どうして？誰でもたまるし、突然、耳から音がしたら怖いじゃない？」

「…汚いとか思わないの？」

そう尋ねれば、吉良はくすっと笑う。

「そんな感覚で考えたことないわ。入院病棟に勤務していた時は、爪を切ったり耳を綺麗にしたり…そう言うケアもしてたのよ？お風呂の介助もするし、おむつ交換も、おトイレの介助も色々」

「看護師って、何でも屋みたいだね」

「そうね。で、久々にやりがいのある耳を見つけたらから、人の耳をお掃除したくなっちゃって。ね、良いでしょ？」

両手を顔の前で合わせ、覗き込むように頼んでくる相手に、紫苑は脱力して小さく笑う。

やりたくてうずうずしているのが、あげはの表情から見てとれる。

紫苑の恥ずかしい失態など、既に頭の片隅にもない様子で、目をキラキラさせている。

下手な慰めなどせず、別ごとに興味を示している恋人に、紫苑はほっとする。

彼女は紫苑の自尊心を傷つけないようにするのがとても上手だった。

“きっとあげはは、無意識なんだろうけどな”

こうして吉良と話しているだけで、自分の失態など何でもない事のように紫苑は思えて塞ぎこんでいた気持ちが少しずつ楽になる。

「お願い。ね？…駄目？」

“この年上彼女、可愛すぎるんだけど…どうしてくれよう”

滅多におねだりされない相手から、上目遣いで熱心にお願いをされ、榊紫苑の心は疼く。

「良いけど…」

「けど…？」

反芻した相手の耳元に顔を寄せ、そっと囁く。

「俺、してもらうの初めてだから…痛くしないでね？」

重低音があげはの耳にダイレクトに届き、彼女の体がピクリと跳ねる。

彼が囁くと真っ当な言葉も淫靡な響きを持ってしまい、あげはの頬は思わず朱に染まる。

「い、痛くならないように…頑張るから」

「俺、痛いの苦手だから、優しくしくね？」

「わ、分かったから、耳元でそんな風に釘刺さないで…」

何時まで経っても彼の悪戯に慣れないあげはは、消え入るような声でそう答えた。

そんなあなたも好きだから　3（前書き）

※此の先より、１５歳未満の方、甘エロ系が苦手な方は御自重ください。

温い表現だとは思いますが…一応、お外で読まれる方、背後にご注意ください。

ＮＧな方、お手数ですがセルフなサービスでお戻りください

尚、誤って読み進まれも、苦情はお受けできません。

§

「っ…ん、そこ…」

紫苑は初めて齎される刺激に、びくりと身を震わせる。

「動かないで、傷つけちゃう」

あげはの指が滑らかな律動を繰り返す度、脊髄から震えが起こる様な感覚に襲われ、紫苑は彼女の腰と背にまわした腕に力を込めてギュッと彼女にしがみつくと、気だるい吐息を零す。

「む、無理…ぞくぞくして、変…」

「駄目よ。そんな力を入れたら、奥まで突いちゃうわ」

「くっ…それ以上、奥まで入れたら俺、我慢できな…んんっ！」

「紫苑、力を抜いて」

「だめっ、ムリっ。良過ぎて…感じる」

「ちょ、ちょっと紫苑、変な声出さないで」

喘ぐように答える艶めかしい紫苑の声に危険を感じて、あげはは指を止める。

耳かきを持った手を持ち上げ、紫苑から手を遠ざけた彼女は、耳まで朱に染まっていた。

「だって…あげは巧くて気持ちいいから…堪えても出る」

年下の青年は恋人の柔らかな膝の上に頭を乗せ、彼女の腹部に顔を埋めるようにしがみつく。

生まれてこのかた、自分で綿棒を用いた耳掃除しかしたことの無い紫苑は、耳かきのもたらす甘い刺激に体が悶えるのを我慢していた。

あげはの指が動く度、耳の奥に響く耳垢の音に悪寒がしたが、同時に耳壁を心地よい強さで擦りあげていく刺激に翻弄される。

堪えようとしても、無意識に思いもしない声が出る。

それに窮したのは、あげはの方だった。

彼から漏れる婀娜な声音は、情事の時に彼が放つ声に質が似ていたから。

故に、あげはの心臓は早鐘を打ち、羞恥に心が落ち着かない。

「紫苑、お願いだからじっとして。出来れば声も…手元が狂いそうよ」

懇願するように呟かれた言葉に、青年はその意味をすぐに正確に悟り恥ずかしくなる。

「…無理だよ…あげはが俺を感じさせるんだから」

自分にしがみついたまま衝撃的な言葉を零した相手に、あげはは泣きそうになる。

「な、ななな何て事を言うのよっ！莫迦っ！人が真面目に耳掃除してるのに！」

羞恥に潤む瞳で見下ろす恋人をちらりと見た紫苑は、わずかに頬

を朱に染めていた。

「俺だって、耳掃除がこんなに官能的な物だなんて知らなかったよ」

「た、単に、紫苑が耳弱いだけでしょ」

「それでも…俺を喘がせるなんて、あげはだけだよ？」

本気で言っているのか、からかっているだけなのか解らないが、威力絶大の低音の呟きにあげははついに根を上げる。

「もう…私で遊んでるだけなら、後は自分でやって」

消え入りそうな声でそう言ったあげはは、紫苑に耳かきを押し付ける。

だが、紫苑は首を横に振る。

「こんな恥ずかしい真似、冗談なら絶対出来ない」

「…ホントに？」

猜疑の眼差しを向ける相手に、紫苑は上体を起こして至極真面目に頷いた。

確かに、人並み以上の矜持を持つ青年が醜態を晒すとは思えず、また、彼の表情と赤みのさす顔に、偽りがないとあげはは確信する。

余裕のない表情と落ち着かない視線、染まった頬は偽り様がない。

「でも、紫苑の体が動いちゃうから危ないもの。貴方が自分でした方が安全かも」

「ガサガサ言って気持ち悪いから、自分でやれって言われても無理だよ。絶対無理。音に耐えられない」

あげはとしては、このままでは手元が狂って彼に怪我をさせてし

まうのではないかと、気が気ではない。
だが、断固として自分での掃除を拒否した美青年に、年上彼女は困惑する。

「此処までしといて、途中で止めるなんてずるいよ」
「でも…」

そう言いながら、紫苑はそっとあげはに身を寄せて、片腕を彼女の背に回して軽く抱きしめる。

「したいって言ったの、あげはだろ」

彼女の肩に顎をかけるようにして、紫苑はあげはの耳元で抗議する。

「そ、それはそうだけど…」
「俺をその気にさせて、途中で止めるなんて酷いよ」

まるで違う響きを持ってしまうのは、紫苑に心地良い刺激の余韻が残っているせいであって、決して邪な感情ではないと思いつつも、あげはの顔は真っ赤になる。

「俺の事、欲求不満にするつもり？」
「よ、欲求不満って…」
「だって、すっきりしないし…どうにかなりそうだよ」
「…じゃ、じゃあせめて、動かないように頑張ってくれる？」

何だかんだ言って、年下の彼氏に甘いあげはは紫苑にそう条件をつける。

「…我慢するから、最後までして」

腕の中の細身な体を強く抱きしめ、紫苑は嘆願するように返事を返した。

不愉快な音に対する嫌悪が四割、同時にもたらされる快楽にも似た心地良さに溺れたい気持ちが六割の紫苑の返事は、どこか熱を帯びていた。

そんなあなたも好きだから　3（後書き）

…なんだかもう、ホントに…イロイロ…済みませんとしか言えない回です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8833v/

Sweet hug

2011年10月21日09時10分発行